遺構	和田鷹山群	諏訪星ヶ台群	和田土屋橋西群	和田土屋橋南群	和田高松沢群	夢科冷山群	和田小深沢群	和田黄蓉ヶ小群	和田土屋橋北群	和田ブドウ沢群	推定不可	測定不可	非黒曜石	未測定	合計
BL1	537	166	84	49	28	48	29	26	11	8	26	7	1	1	1021
BL2	1	3	2	1	5								1		13
BL3	2	12	68	33	18		1		2			1			137
BL4		4	3	3	1										11
BL5		2	2	1	1			1							7
BL6		11													11
BL7		27										2			29
BL8		12													12
BL9	2	8													10
BL10	14													1	15
BL11	1														1
外	2			1											3
合計	559	245	159	88	53	48	30	27	13	8	26	10	2	2	1270
比率	44.0%	19.3%	12.5%	6.9%	4.2%	3.8%	2.4%	2.1%	1.0%	0.6%	2.0%	0.8%	0.2%	0.2%	

第 13 表　照月台遺跡遺構別黒曜石産地数量組成

	数量							重量					
遺構	安山岩	砂岩	凝灰岩	頁岩	未確認	合計	比率	安山岩	砂岩	凝灰岩	頁岩	合計	比率
BL1	335	12	1	1	20	369	70.8%	263147.6	205.2	7.4	11.7	263371.9	87.7%
BL2	3				2	5	1.0%	761.9				761.9	0.3%
BL3	7				5	12	2.3%	6420.2				6420.2	2.1%
BL9	1					1	0.2%	317.8				317.8	0.1%
BL10	1					1	0.2%	2585				2585	0.9%
SH3	39				2	41	7.9%	9884.2				9884.2	3.3%
SH4	73					73	14.0%	15836.2				15836.2	5.3%
SH5	19					19	3.6%	1283.1				1283.1	0.4%
合計	478	12	1	1	29	521		300236	205.2	7.4	11.7	300460.3	
比率	91.7%	2.3%	0.2%	0.2%	5.6%			99.9%	0.1%	0.0%	0.0%		

第 14 表　照月台遺跡遺構別礫石材組成

また、剝片、砕片の数が多く石器製作の痕跡を残しているとみられる。製品の比率が高く剝片砕片の比率が低い本書報告の貫ノ木遺跡と対象的であるが、個別器種の形態および器種の構成に高い共通性が認められる。

(5)　石材組成と石材別平面分布

石材別の器種組成を第 11 表に、遺構別の石材の数量および重量の組成を第 12 表に示す。また、石材、産地群別の石器平面分布を第 84 図～第 87 図に示す。

数量は黒曜石が最も多く、全体の 39.2％を占めている。次いでチャート、無斑晶質安山岩、凝灰岩となる。一方重量比では無斑晶質安山岩が 12,593.16g で最も重く全体の 30.0％を占めるが、2234.9g の石核を筆頭に、大形品が多い。次ぐ砂岩は礫石器の石材で、剝片石器ではチャートが２番目の重量となる。数量が最も多い黒曜石は重量では 3,255.485g で、比率では 7.7％になる。

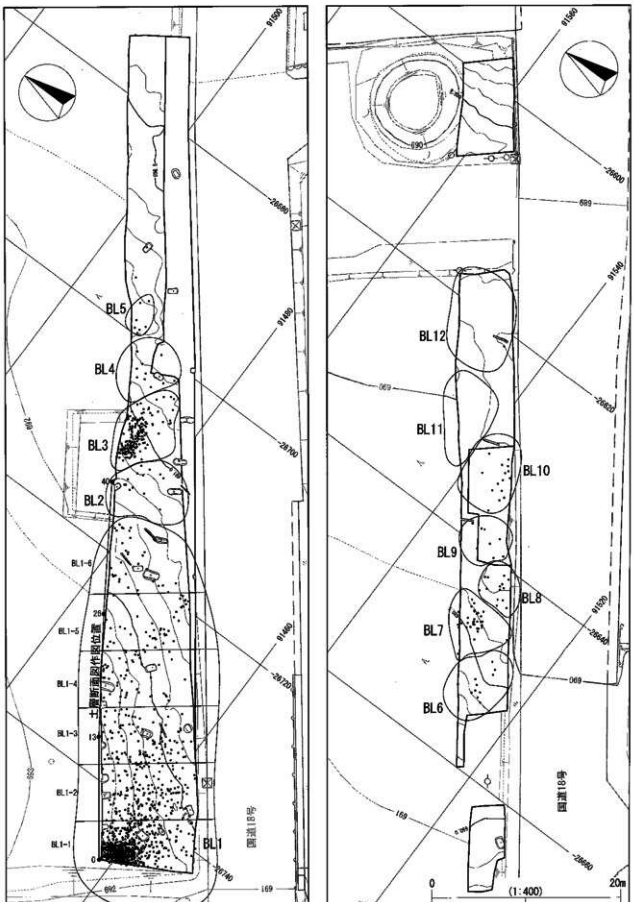
製品だけを集めると圧倒的に黒曜石が多い。BL1・3 ～ 8 で主体となり、BL2・9・10 にも多く分布している。

黒曜石を対象として蛍光Ｘ線分析装置を用いた産地推定を行っている。分析の詳細については第４章第１節に記す。

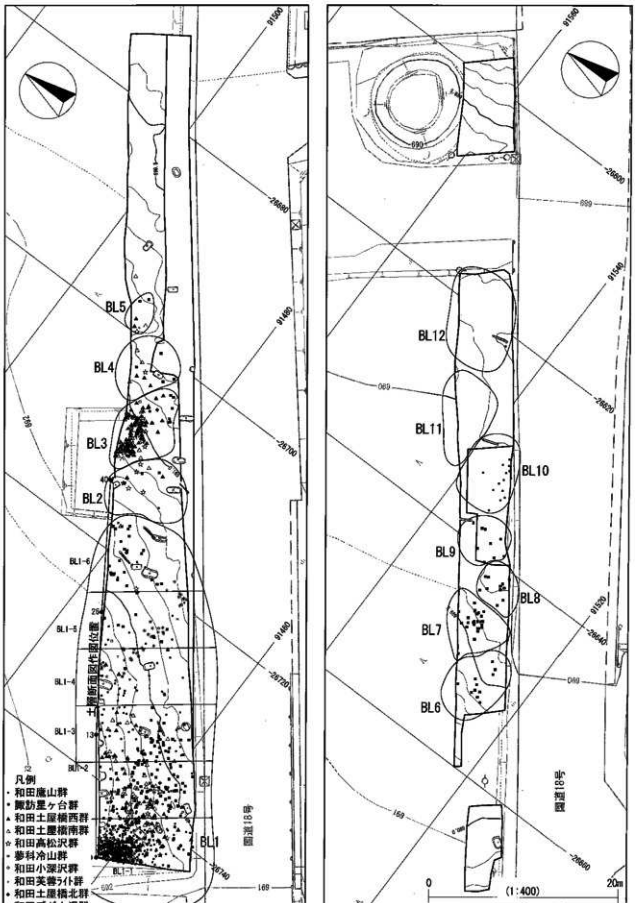
推定産地組成を示した第 13 表をみると、最も多いのが和田鷹山群である。和田鷹山群が集中するブロックとして、BL1 と BL10 がある。遺物数が圧倒的に多い BL1 では、全域に和田鷹山群が分散しているといえるが、特に南端付近に集中する。BL10 は無斑晶質安山岩が主体のブロックだが、黒曜石では他の産地群がなく排他的様相がみられる。

次いで多い諏訪星ヶ台群は BL6 ～ 9 で主体となる。これらのブロックでは他の産地群はないかあっても少量である。BL1 の南半にも多く分布しているが、散在してまとまりが弱い。

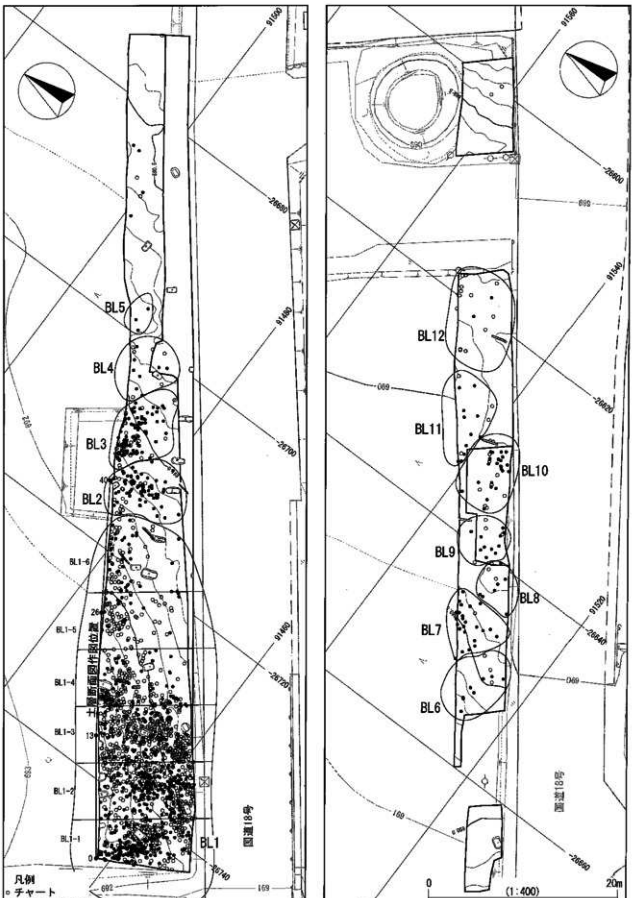
和田土屋橋西・同南群は野尻湖遺跡群ではまれな産地であったが、本書報告の貫ノ木遺跡において主体となっている。数量的には BL1 に多く分布するが、主体となっているのは BL3 である。



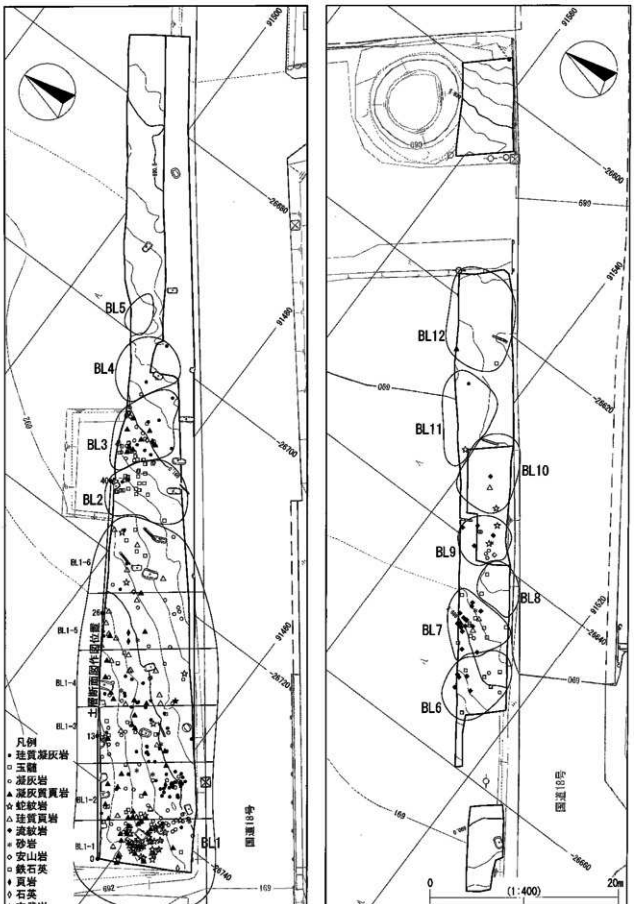
第 84 図　照月台遺跡石材別石器分布１　黒曜石



第 85 図　照月台遺跡石材別石器分布２　黒曜石産地別



第 86 図　照月台遺跡 G 村別石器分布３　チャート・無斑晶質安山岩



第 87 図　照月台遺跡石材別石器分布 4　その他石材

和田高松沢群と同ブドウ沢群は男女倉遺跡群のすぐ上に路頭があり、男女倉遺跡群内に自然石として含まれる。質があまり良くないためか、産地推定においてもほとんどみられない産地だが、本書の貫ノ木H5地点と照月台BP地点には数多く持ちこまれているといえよう。BL1、BL3に多く分布しており、和田土屋橋西群・同南群と相関関係が認められる。これらは長野県小県郡和田村の男女倉遺跡群内を流れる男女倉川の川原の同一地点で採集することができる。

蓼科冷山群は48点存在する。主体となるブロックはないが、BL1の中ほどから北より（BL1-3・BL1-4で事項で報告している範囲）にややまとまって分布する。和田や諏訪の産地群より産地が遠く、球顆が多く質的にも劣るが、それなりにまとまった数がみられる。これは野尻湖遺跡群の他の遺跡にもみられる現象である。

チャートは数量比で全体の26.4％を占める。楔形石器にチャートが多く用いられているが、他の製品は少ない。鶏卵大の円礫を原石で持ち込み、両極での剝離が多くみられる。剝離回数が少ない礫面が多く残される石核や楔形石器が多く存在する。BL1に多く分布しており、数量は少ないがBL11で主体となる。

無斑晶質安山岩は他の石材に比べ、縁辺の鋭利さに欠けることからか、製品の比率が低い。重量が最も重いことからわかるように、大形の石器が多くみられる。BL2・9～11で主体となり、BL1・3・7・8・にも多くみられる。

珪質頁岩、凝灰質頁岩、珪質凝灰岩、凝灰岩の頁岩類も多く出土しているが、主体となるブロックはない。ガラス質の鋭利な縁辺が得られる珪質頁岩は数は少ないが、製品として持ちこまれている。珪化が進んでいない凝灰質頁岩や凝灰岩は剝片類は多いが製品は少ない。

蛇紋岩は斧形石器専用の石材として用いられている。野尻湖遺跡群では250点を超える旧石器時代の斧形石器が出土しているが、その大部分が蛇紋岩製である。これらの蛇紋岩は透閃石や曹長石が多く含まれることから岩石学的には、透閃石岩等の蛇紋岩と異なる岩石となるものが主体を占めている。しかし、考古学的にこれらは蛇紋岩として報告されてきた事例が多いと思われるため、本書においても蛇紋岩としている。剝片、砕片のほとんどが同一個体の斧形石器のリダクションに伴うものである。

第14表に礫の石材組成を示す。礫の石材はほとんどが安山岩である。この安山岩は輝石安山岩や角閃石安山岩に分類される多孔質の安山岩で、遺跡周辺で採集可能な岩石である。敲石等に用いられることはあるが、剝片石器の素材にはならない。安山岩の他に砂岩、頁岩、凝灰岩がわずかにみられるが、これらは礫としてではなく、敲石等の利用目的で持ち込まれた可能性が高い。

調査終了後の照月台遺跡の調査区（南より）

2 旧石器時代の遺構

旧石器時代の遺構として、ブロック12、礫群３、土坑１を検出した。

(1) ブロック

BL1（第88～93図）

上段調査区南西端から約36mをBL1とした。調査区内での中心座標は、X=91467,Y=-26731付近となる。10m弱の幅のある調査区内全体に遺物が分布することから、さらに調査区の北西および南東側に大きく広がると思われる。現国道を挟んで南東に位置するL地点と連なる可能性もある。調査区の南西端側は現代の地形整備により削られているが、谷への落ち際のためその面積はわずかである。

BL1の北東にBL2が位置する。両ブロック間に明瞭な遺物空白域はない。そのため、一連の遺物分布の可能性も考えられる。

縄文時代の集石SH2および、旧石器時代の礫群SH3～５は空間的にBL1内に位置している。SH2は層位的に分離が可能である。BL1内の礫集中部をSH3～５としたため、これら礫群とは混在する状況にある。SH5の礫はナイフ形石器石器群の生活面と同じⅤａ層に集中して分布するが、SH3とSH4はそれより上位のⅣ層で集中して分布するため、残された時期が異なると思われる。

19基の縄文時代の陥し穴が同一空間に分布している。また、旧石器時代の土坑SK25も同一空間内に位置している。

石器はⅠ層からⅥ層で出土し、Ⅴａ層が最も多い。Ⅳ層およびⅤｂ層から出土する石器も多いが、分布の状況から生活面はⅤａ層に求められるものが大半を占めると思われる。

礫はⅠ層からⅥ層で出土し、Ⅳ層が最も多い。法量の大きな礫は２次的な上下移動が小さいと思われることから、多くの礫はⅣ層堆積中に残されたと思われる。この層位はSH3とSH4と一致することから、両遺構に関連する礫の可能性が考えられる。Ⅳ層に分布する石器の大部分が器種および石材から下層のナイフ形石器石器群に属するものが浮きあがってきたと判断されることから、Ⅳ層に分布する礫群および礫に共伴する石器が区分できない状況である。

石器3,031点、礫369点が出土した。石器の数量は本調査地点の約80％におよび、礫も70％で、分布の重なる礫群礫を含めると90％以上を占めることとなる。石器組成はナイフ形石器17点（別に破片３点）、台形石器16点、貝殻状刃器39点、彫器10点、削片４点、掻器18点（別に破片１点）、掻器状石器14点、厚刃掻器４点、削器38点（別に破片１点）、抉入削器９点、鋸歯縁状削器14点、揉錐器10点、楔形石器93点（別に破片１点）、石刃20点、２次加工のある剥片61点、微細剥離のある剥片56点、剥片1,913点、砕片540点、石核118点、原石１点、斧形石器４点、斧形石器刃部破片１点、斧形石器調整剥片８点、斧形石器破片１点、敲石６点、磨石１点、台石２点（別に破片１点）、礫器１点、槍先形尖頭器１点、細石刃３点（別に破片１点）となっている。剥片、砕片、石核の数が多く、剥片剥離の痕跡が多く残されているといえる。中心となるのは、鶏卵大のチャートを石材とする両極打撃による剥離である。そのため、多くの楔形石器が組成している。

石材は黒曜石が最も多いが、過半数には至らず、チャートや無斑晶質安山岩も多くみられる。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

一般的に認識される旧石器時代のブロックの規模を大きく超えているが、遺物分布に疎密があり、密度の高い部分は一般的なブロック同様の規模の単位が認められる。しかし、遺物分布が途切れないことから、大枠で１つのブロックとした。報告はこれらを約6m単位、６ヶ所に区切って行う。この6mの単位に考古学的な意味はない。

以下に６分割した個々の分布の特徴を述べる。

BL1-1 は BL1 の中で最も多い 1209 点の石器が高い密度で分布している。特に X=91460,Y=-26745 付近に密集している。製品はその密集部の外縁に多く分布する。組成の特徴として、台形石器が多く、掻器状石器はあるが掻器はない。石材は黒曜石が過半数を超え、産地は和田鷹山群が主体である。石器の出土層位はＶａ層が主体だが、礫はⅢ層からⅣ層にかけてと、Ｖａ層２ヶ所にピークがある。

BL1-2 にも 667 点と多くの石器が分布している。多少の疎密はあるが特別な集中箇所をもたず、製品の分布もばらつく。石材は無斑晶質安山岩が最も多く、次いでチャート、黒曜石は３番目の数量となっている。特に、X=91461，Y=-26736 付近を中心とする直径 4.5m 前後の範囲には無斑晶質安山岩が多く分布している。黒曜石の産地群は諏訪星ヶ台群が集中し、その西側のやや遺物密度が低い場所に土屋橋西群と土屋橋南群が目立つ。

BL1-3 ではチャートが石器石材の主体となる。出土層位はわずかであるが、Ⅳ層がＶａ層を上回る。Ⅳ層に集中する SH4 が平面的に重なる影響であろうか。また、旧石器時代の土坑 SK25 が存在する。

BL1-4 の南西側は BL1-3 からの続きで、チャートが多く分布する。X=91472,Y=-26730 付近から、BL1-5 内の X=91470,Y=-26720 に向かう長さ 12m、幅 2m の帯状の範囲に蓼科冷山群の黒曜石が分布している。出土層位は他と同じくＶａ層が主体である。

BL1-4 内にⅣ層に生活面が求められる SH3 を検出しているが、同じⅣ層中にチャートの縦長剥片を素材とする削器がまとまって存在する（報告番号 113 ～ 117・122）。これらは主体であるＶａ層の石器群とは時期が異なり、垂直分布図上でも２面あるようにみえるが、層厚が薄いため両者の境目は不明瞭で、石器１点レベルでの分離は難しい。

BL1-5 の北西寄りにはチャートを主体とする分布が認められる。また、北端にはⅢ層を中心に分布する礫の集中がみられる。

BL1-6 に分布する黒曜石の産地は諏訪星ヶ台群が主体となっている。

BL2（第 94 図）

X=91480,Y=-26712 付近を中心として、北 - 南約 8m、東 - 西約 6m の楕円形の広がりをもつ。遺物分布域は北西の調査区外へ広がると予想される。

南西に BL1、北東に BL3 が位置しており、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。縄文時代の陥し穴 SK22・24・30 と平面分布が重なっている。

石器 127 点、礫５点がⅢ層からＶｂ層で出土しており、Ｖａ層が最も多い。本ブロックの大部分でⅠ層からⅣ層上半部の層が現代の削平により失われているので、他との比較においては考慮する必要がある。

器種組成はナイフ形石器破片１点、貝殻状刃器１点、彫器１点、掻器１点、削器１点、楔形石器１点、石刃１点、２次加工のある剥片１点、微細剥離のある剥片２点、剥片 88 点、砕片、21 点、石核８点となっている。剥片砕片数が多く、剥片剥離の痕跡がみられる。

石材は無斑晶質安山岩が 75 点と半数以上を占め、次いで玉髄が 23 点、黒曜石とチャートは 13 点ずつとなっている。

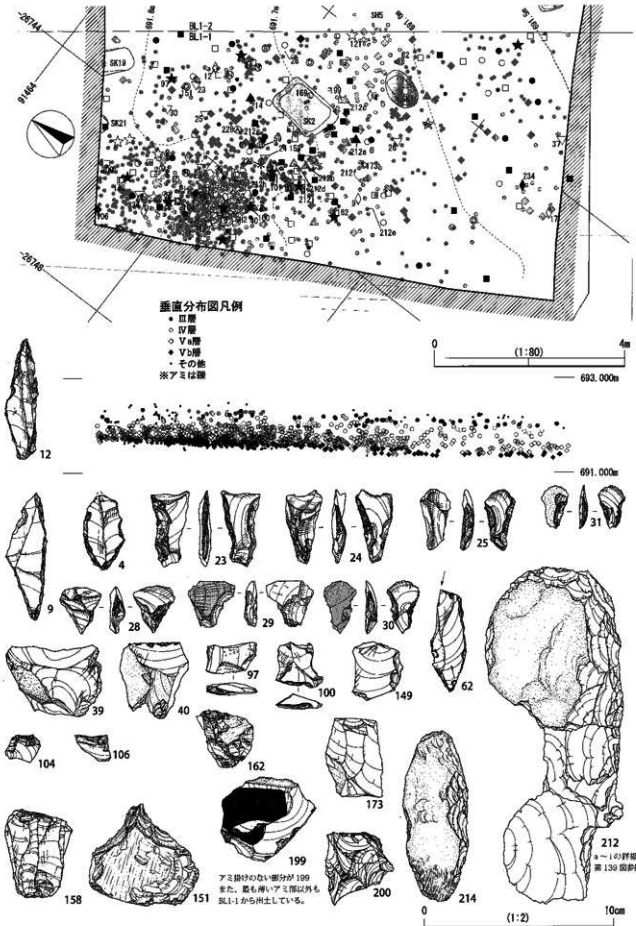
BL3 と４点の接合資料を共有している。

BL3（第 95 図）

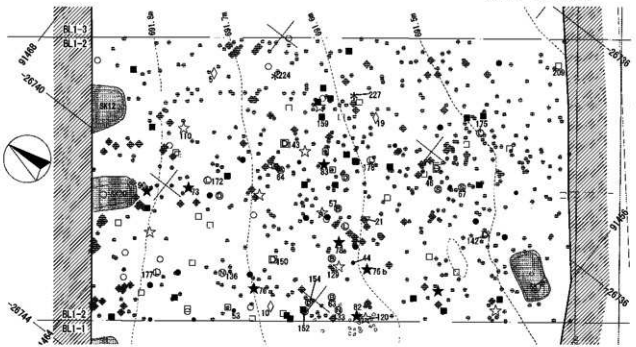
X=91485,Y=-26708 付近を中心として、北 - 南約 6m、東 - 西約 10m の楕円形の広がりをもつ。遺物分布域は北西の調査区外へと大きく広がることが予想される。

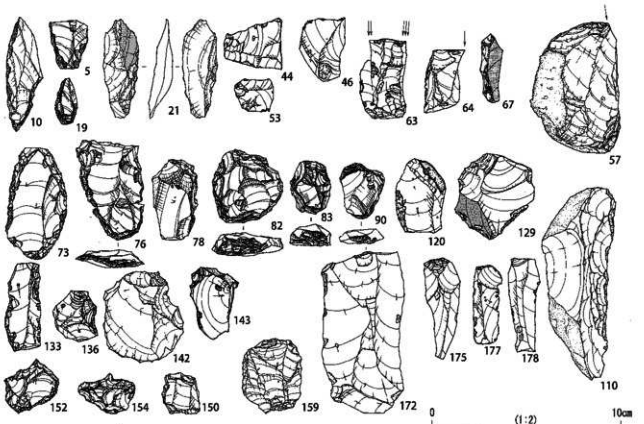
南西に BL2、北東に BL4 が位置しており、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器 347 点、礫 12 点がⅣ層からＶｂ層で出土しており、Ⅳ層が最も多い。BL2 と同様に、Ⅳ層上半

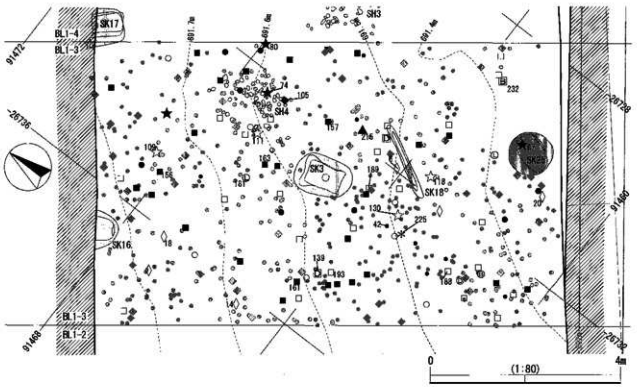


第88図　照月台遺跡 BL1-1 遺物分布図



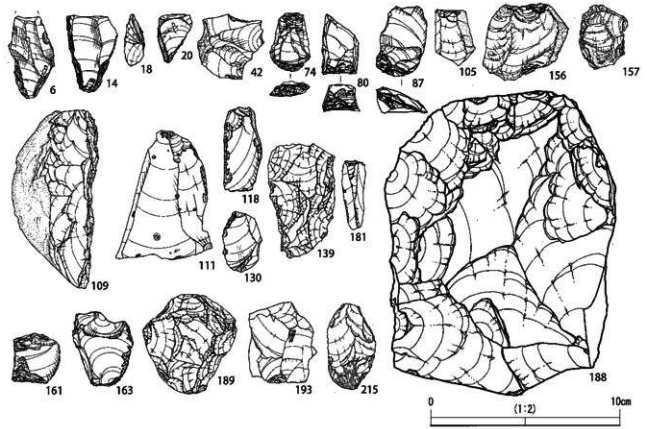


第 89 図　照月台遺跡 BL1-2 遺物分布図

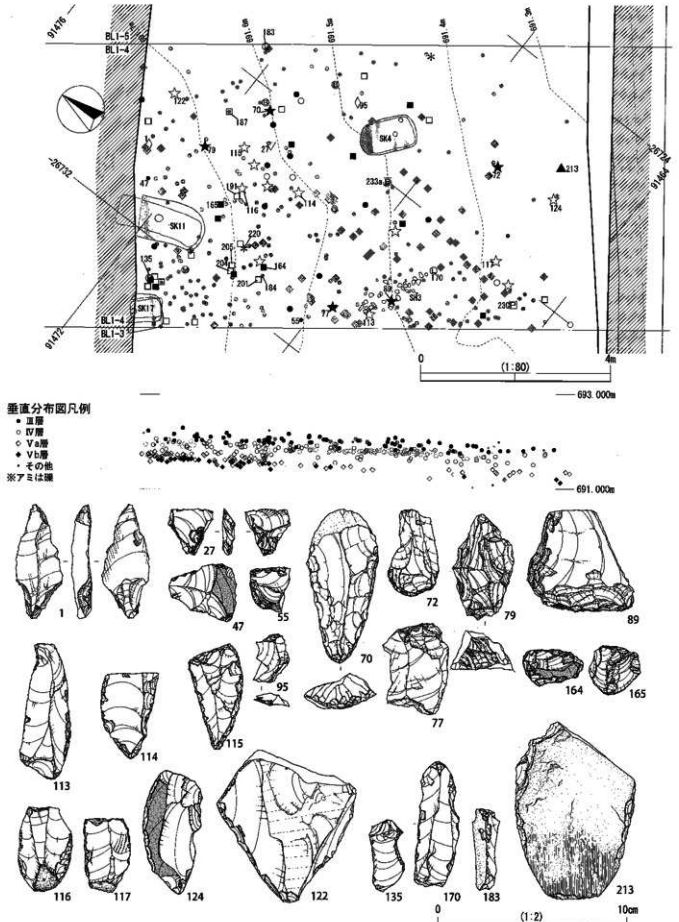


垂直分布図凡例
- ■ Ⅲ層
- □ Ⅳ層
- ◇ Va層
- ◆ Vb層
- ・ その他

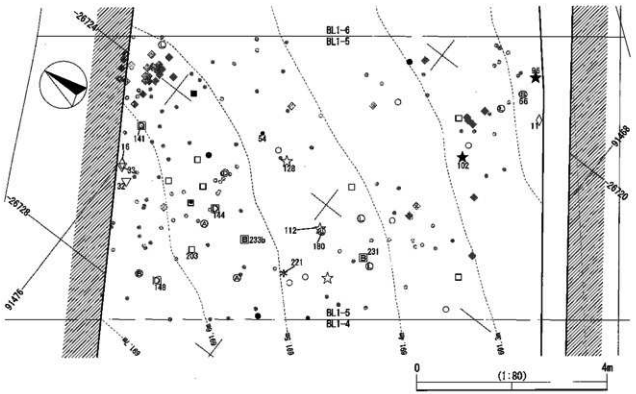
※アミは撹



第 90 図　照月台遺跡 BL1-3 遺物分布図

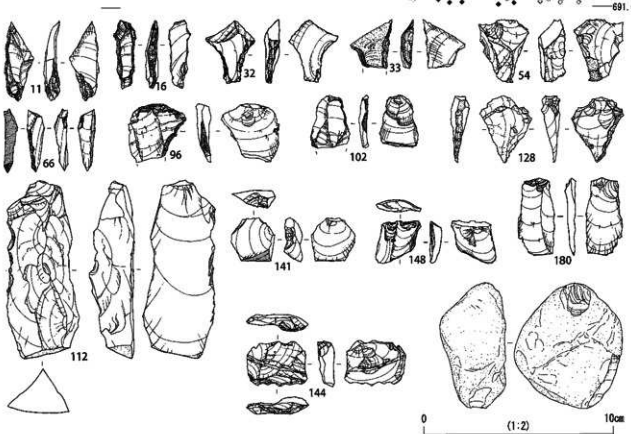


第91図　照月台遺跡 BL1-4 遺物分布図

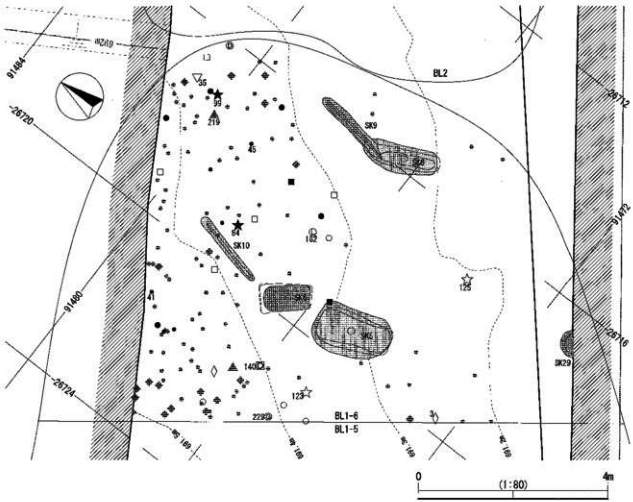


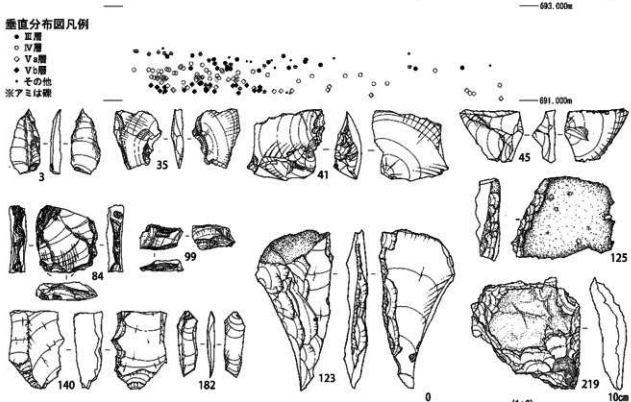
垂直分布図凡例
- ● Ⅲ層
- ○ Ⅳ層
- ◇ Va層
- ◆ Vb層
- ・ その他

※アミは礫

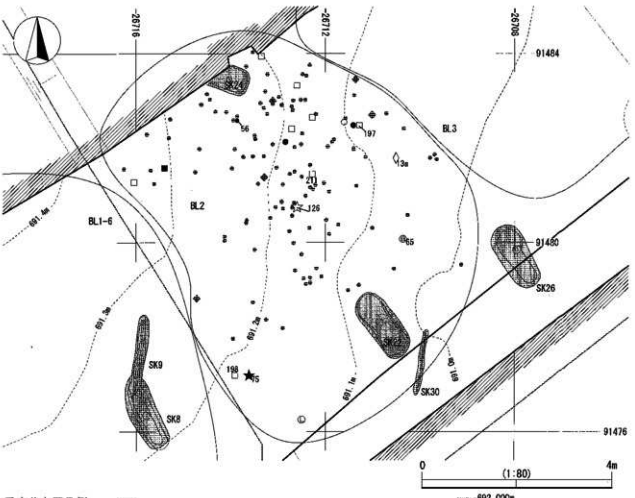


第 92 図　照月台遺跡 BL1-5 遺物分布図



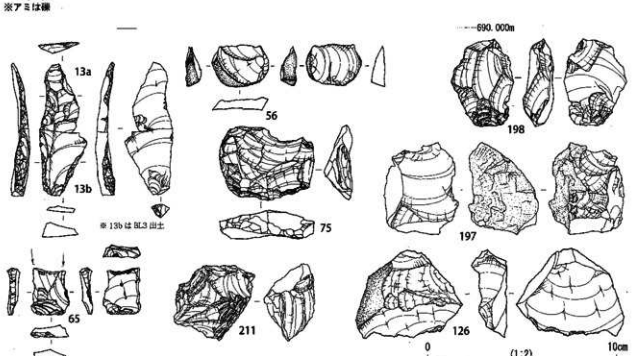


第93図　照月台遺跡 BL1-6 遺物分布図

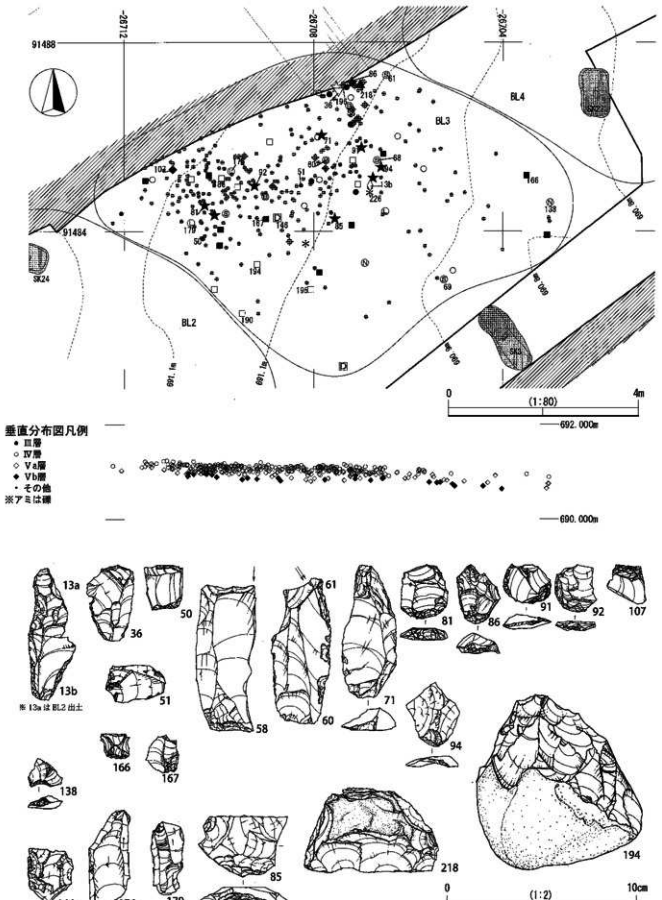


垂直分布図凡例
- 盲層
- Ⅳ層
- Va層
- Vb層
- その他

※アミは礫



第 94 図　照月台遺跡 BL2 遺物分布図



第95図　照月台遺跡 BL3 遺物分布図

部より上位が現代の削平を受けているため、Ⅰ層からⅣ層上半部の遺物が失われている。

器種組成はナイフ形石器１点、台形石器１点、貝殻状刃器３点、彫器３点、削片４点、掻器６点、掻器状石器３点、厚み掻器１点、削器１点、抉入削器２点、鋸歯縁状削器２点、楔形石器10点、石刃３点、２次加工のある剥片９点、微細剥離のある剥片５点、剥片142点、砕片137点、石核11点、斧形石器１点、敲石２点となっている。剥片砕片数が多く、剥片剥離の痕跡がみられる。

石材は黒曜石が183点と半数以上を占め、ついで無斑晶質安山岩86点、チャート32点となっている。黒曜石の推定産地は和田十屋橋西群および和田土屋橋南群が主体となっている。

BL2と４点、BL9と１点の接合資料を共有している。

BL4（第96図）

X=91488,Y=-26702付近を中心として、北-南約3m、東-西約4mの楕円形の広がりをもつ。遺物分布域は北西の調査区外へと広がることが予想される。

南西にBL4が位置しており、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部がない。縄文時代の陥し穴SK27と平面分布が重なっている。

石器29点がⅣ層からⅤb層で出土しており、Ⅴa層が最も多い。礫は出土しなかった。

器種組成はナイフ形石器１点、削器１点、楔形石器３点、石刃１点、微細剥離のある剥片２点、剥片19点、砕片２点となっている。数の少ない小規模なブロックである。

石材は黒曜石が11点で最も多く、ついで無斑晶質安山岩８点、チャート６点となっている。黒曜石数は少ないものの、産地は和田鷹山群がなく、諏訪星ヶ台群および和田土屋橋西群、和田土屋橋南群がみられる。

接合資料の共有はない。

BL5（第96図）

X=91492,Y=-26698付近を中心として、北-南約6m、東-西約7mの楕円形の広がりをもつ。遺物分布域は北西の調査区外にわずかに広がる可能性がある。

南西にBL3、北東にBL5が位置しており、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器10点がⅢ層からⅤa層で出土しており、Ⅳ層が最も多い。礫は出土しなかった。

器種組成は貝殻状刃器３点、掻器１点、抉入削器１点、揉錐器１点、剥片４点となっている。数の少ない小規模なブロックである。

石材は黒曜石が７点、無斑晶質安山岩が３点となっている。

接合資料の共有はない。

BL6（第97図）

X=91525,Y=-26652付近を中心として、北-南約6m、東-西約7.5mの楕円形の広がりをもつ。遺物分布域は北西および南東の調査区外へ広がる可能性がある。

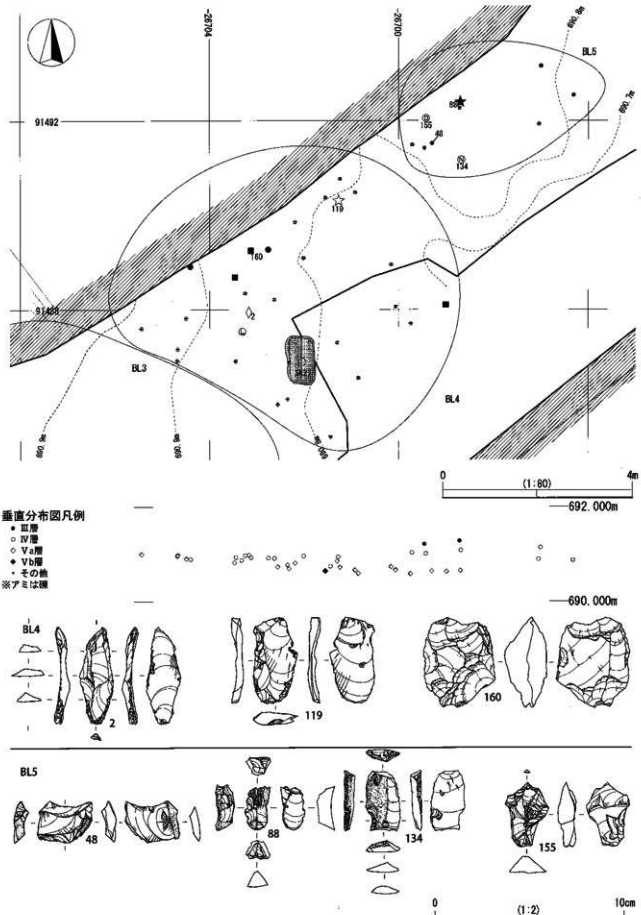
南西にあるBL5とは約50mの距離がある。北東にBL7が位置しており、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器36点がⅣ層からⅤc層で出土しており、Ⅴa層が最も多い。礫は出土しなかった。

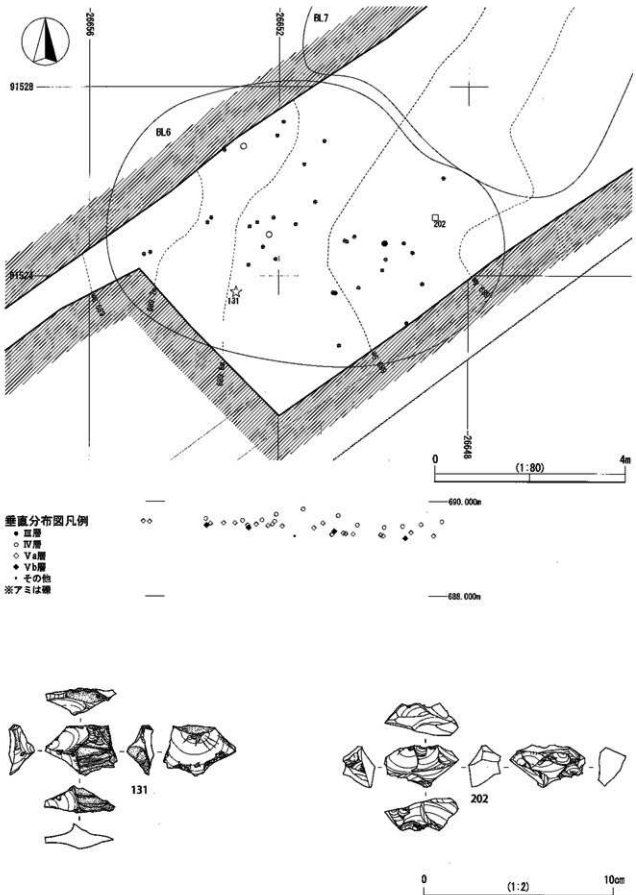
器種組成は貝殻状刃器１点、削器１点、２次加工のある剥片２点、微細剥離のある剥片１点、剥片24点、砕片６点、石核１点、となっている。数の少ない小規模なブロックである。

石材は黒曜石が11点で最も多く、次いで無斑晶質安山岩が９点、玉髄６点となっている。黒曜石の産地はすべて諏訪星ヶ台群と分析されている。

BL7と１点の接合資料を共有している。



第96図　照月台遺跡 BL4・BL5 遺物分布図



第 97 図　照月台遺跡 BL6 遺物分布図

BL7（第 98 図）

X=91529,Y=-26646 付近を中心として、直径 6m 前後の三角形状の広がりをもつ。遺物分布域は北西の調査区外に広がることが予想される。

南西に BL6 が、東に BL8 が位置しているが、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器 90 点がⅣ層からＶｃ層で出土しており、Ｖａ層が最も多い。礫は出土しなかった。

器種組成は台形石器 1 点、厚刃掻器 1 点、鋸歯縁状削器 1 点、楔形石器 1 点、２次加工のある剥片 4 点、微細剥離のある剥片 5 点、剥片 53 点、砕片 16 点、石核 7 点、敲石 1 点となっている。

石材は黒曜石が 34 点で最も多く、次いで無斑晶質安山岩が 25 点、流紋岩が 17 点となっている。黒曜石の産地はすべて諏訪星ヶ台群と分析されている。

BL6 および BL8 と 1 点ずつの接合資料を共有している。

BL8（第 98 図）

X=91529,Y=-26642 付近を中心として、北東 - 南西約 6m、北西 - 南東約 4m の楕円形状の広がりをもつ。遺物分布域は南東の調査区外に広がるものと思われる。

西に BL7 が、北東に BL9 が位置しているが、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器 27 点がⅣ層からＶｂ層で出土しており、Ｖａ層が最も多い。礫は出土しなかった。

器種組成は厚刃掻器 1 点、鋸歯縁状削器 1 点、楔形石器 1 点、微細剥離のある剥片 1 点、剥片 16 点、砕片 3 点、石核 4 点となっている。

石材は黒曜石が 15 点で最も多く、次いで無斑晶質安山岩が 7 点となっている。黒曜石の産地はすべて諏訪星ヶ台群と分析されている。

BL7 と 1 点の接合資料を共有している。

BL9（第 99 図）

X=91533,Y=-26639 付近を中心として、直径約 5m の円形状の広がりをもつ。遺物分布域は南西の調査区外へ広がると思われる。

南西に BL8 が、北東に BL10 が位置しているが、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器 38 点、礫 1 点がⅣ層からＶｂ層で出土しており、Ｖａ層が最も多い。

器種組成は石刃 1 点、２次加工のある剥片 1 点、微細剥離のある剥片 3 点、剥片 28 点、石核 2 点、斧形石器 1 点、斧形石器刃部破片 1 点、敲石 1 点となっている。

石材は無斑晶質安山岩が 11 点で最も多く、次いで黒曜石が 10 点となっている。黒曜石の推定産地は諏訪星ヶ台群が 8 点、和田鷹山群が 2 点となっている。

BL3 と 1 点の接合資料を共有している。

BL10（第 99 図）

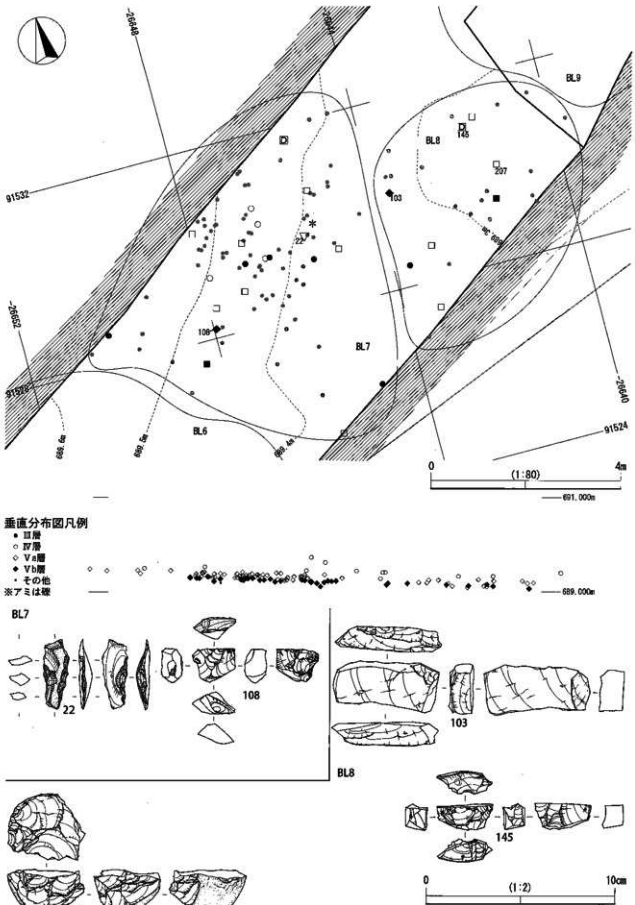
X=91537,Y=-26633 付近を中心として、北 - 南約 6m、東 - 西約 8m の楕円形状の広がりをもつ。遺物分布域は南西の調査区外へ広がることが予想される。

南西に BL9 が、北に BL11 が位置しているが、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。縄文時代の陥し穴 SK13 と平面的に重なる。

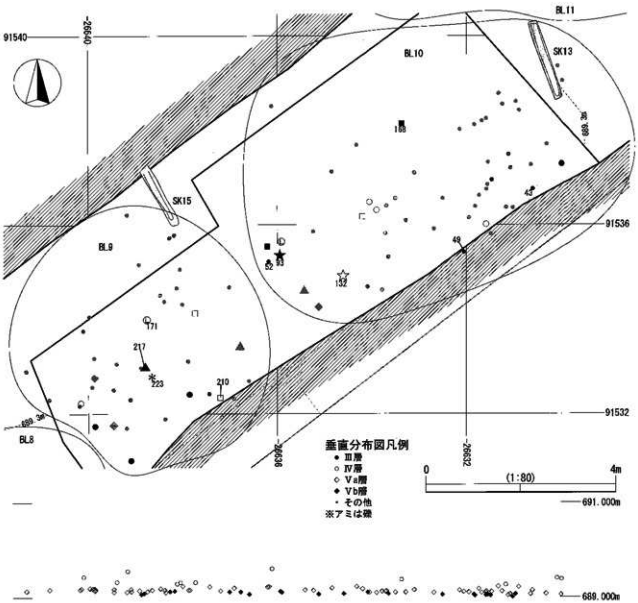
石器 52 点、礫 1 点がⅣ層からＶｂ層で出土しており、Ｖａ層が最も多い。

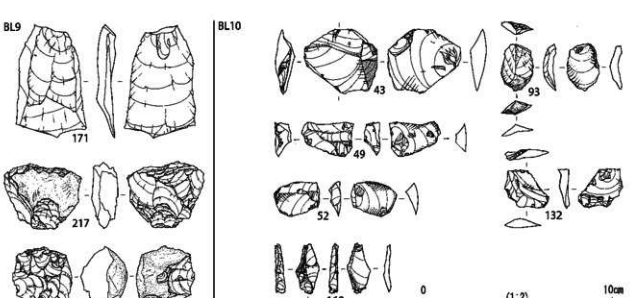
器種組成は貝殻状刃器 4 点、掻器状石器 1 点、削器 1 点、楔形石器 2 点、石刃 1 点、２次加工のある剥片 3 点、微細剥離のある剥片 1 点、剥片 36 点、砕片 1 点、石核 1 点、斧形石器調整剥片 1 点となっている。

石材は無斑晶質安山岩が 24 点で最も多く、次いで黒曜石が 15 点、チャートが 10 点となっている。



第 98 図　照月台遺跡 BL7・BL8 遺物分布図





第 99 図　照月台遺跡 BL9・BL10 遺物分布図

黒曜石の推定産地はすべて和田鷹山群である。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

BL11（第 100 図）

X=91543,Y=-26628 付近を中心として、北東 - 南西約 9.5m、北西 - 南東約 4.5m の楕円形状の広がりをもつ。ブロックの北西側は調査区境があり、調査区の外に遺物分布域が広がると思われる。

南に BL10 が、北東に BL12 が位置しているが、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。

石器 17 点がⅠ層からⅤａ層で出土しており、Ⅳ層が最も多い。

器種組成は掻器状石器１点、削器１点、微細剝離のある剝片１点、剝片 11 点、石核２点、斧形石器１点となっている。

石材は無斑晶質安山岩が 11 点で最も多く、次いでチャートが４点となっている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

BL12（第 101 図）

X=91548,Y=-26620 付近を中心として、北東 - 南西約 10m、北西 - 南東約 7m の楕円形状の広がりをもつ。非常に散漫な分布で、7m の調査区幅いっぱいに広がっており、調査区外に分布域が広がる可能性が考えられる。

南に BL11 が位置しているが、両ブロック間の遺物密度は低いが明瞭な空白部はない。縄文時代の陥し穴 SK14 と平面的に重なる。

石器 18 点がⅠ層からⅤａ層で出土しており、Ⅳ層が最も多い。

器種組成は削器１点、抉入削器１点、鋸歯縁状削器１点、石刃１点、微細剝離のある剝片１点、剝片 11 点、石核２点となっている。

石材はチャートが 13 点で最も多く、次いで無斑晶質安山岩が２点となっている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

(2) 礫群

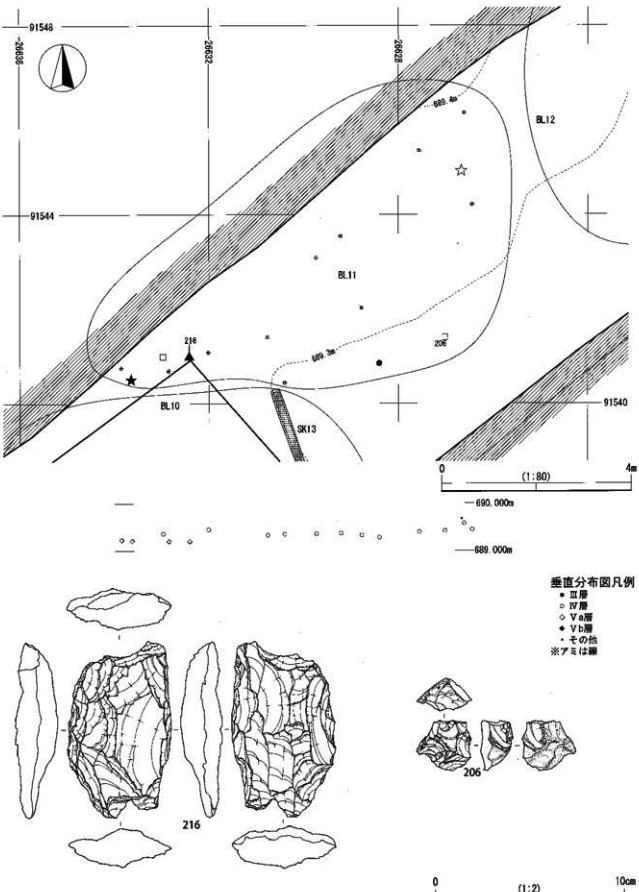
３基の礫群が検出されている。礫群の周囲から出土し、単独で取り上げられた礫も本来礫群に属すものがあると思われるが、関連がないものとの分離が明確にできないため、組成上礫群からはずしてある。平面分布図では礫群に属す礫を形状で示し、焼けている礫にはアミを掛けた。また、単独で取り上げられた礫を黒のドットで、石器をアミのドットで示した。垂直分布図では出土層ごとにマークを変え、礫は黒で、石器はアミで示した。また、図の主体となる礫群礫は大きなマークで表記した。

SH3（第 102 図）

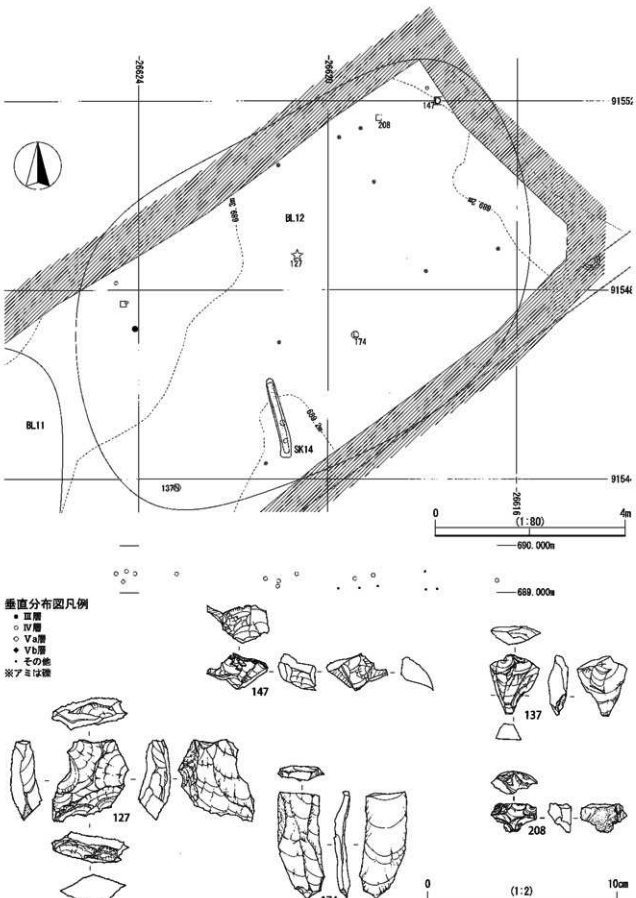
X=91467,Y=-26730 付近を中心として、東 - 西約 2m、北 - 南約 1m の楕円形状の広がりをもつ。礫数が少なく全体的に散漫で、特に中央付近は少ない。BL1 内部に分布しているが、層位的に BL1 の主体となる石器群と時期が異なると思われる。

礫 41 点がすべてⅣ層から出土した。垂直分布図ではⅣ層の上半部に生活面が想定される。しかし、周辺から出土している石器の多くは礫群より下位から出土しており、時期が異なるものが多いと判断できよう。

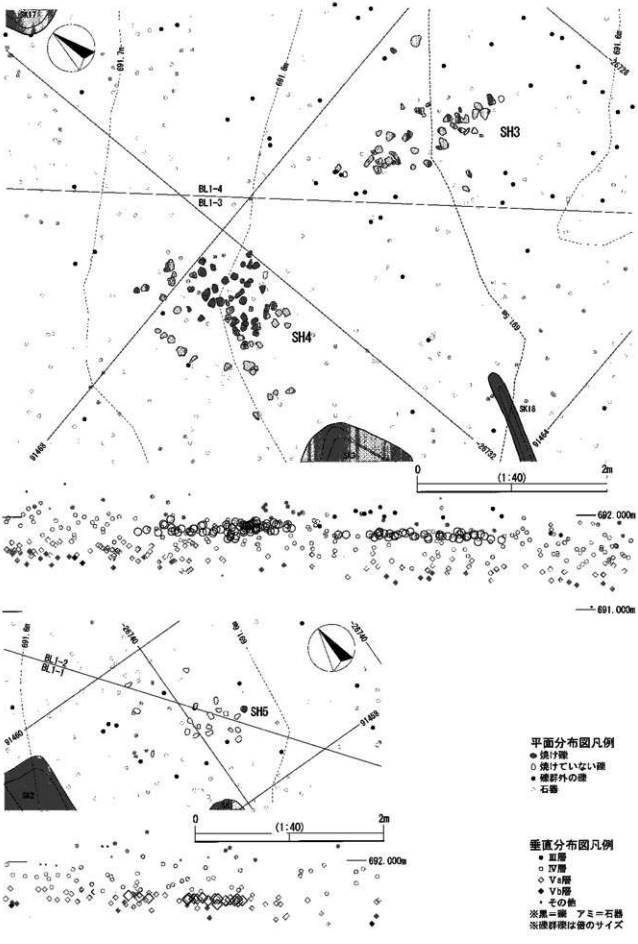
確認できた 39 点の礫の総重量は 9884.2g で、すべてが輝石安山岩を主体とする多孔質の安山岩であった。礫はすべて形状が亜角礫で焼けと思われる赤化がみられた。また、１点にタール状の黒色付着物が認められた。また、ほとんどの礫が割れている。



第100図　照月台遺跡 BL11 遺物分布図



第101図　照月台遺跡 BL12 遺物分布図



第102図　照月台遺跡礫群遺物分布図

SH4（第 102 図）

X=91467.5,Y=-26732.5 付近を中心として直径約 1.5m に円形状の広がりをもつ。西側半分は外縁に礫が並び、内側に空白部がある。東半分に空白部はないが、特に密集することもない。BL1 内部に分布しているが、層位的に BL1 の主体となる石器群と時期が異なると思われる。

礫 73 点がすべてⅣ層から出土した。垂直分布図ではⅣ層の上半部に生活面が想定される。しかし、周辺から出土している石器の多くは礫群より下位から出土しており、時期が異なるものが多いと判断できよう。SH3 とは層位的に一致し、分布や焼け礫の状況から同時期と考えられる。

確認できた 72 点の礫の総重量は 15,836.2g で、すべてが輝石安山岩を主体とする多孔質の安山岩であった。礫はすべて、形状が亜角礫で焼けと思われる赤化がみられた。また、１点にスス状の黒色付着物が認められた。ほとんどの礫が割れている。

SH5（第 102 図）

X=91459,Y=-26740 付近を中心として、北西 - 南東約 1.5m、北東 - 南西約 1m の楕円形の広がりをもつ。礫数が少なく集中もしないことから、礫群というよりは配石であろうか。BL1 内部に分布しており、主体の石器群と層位的に一致している。

礫 19 点すべてがＶａ層から出土した。周囲の石器は軽いためか、上下に拡散しているが、本礫群は拡散がほとんどなく、面が捉えられる。BL1 で主体を占めるナイフ形石器石器群と同時期と思われる。

確認できた 19 点の礫の総重量は 1283.1g で、すべてが輝石安山岩を主体とする多孔質の安山岩であった。礫形状は亜角礫 18 点、円礫１点で、２点に焼けと思われる赤化がみられる。ほとんどの礫が割れている。

(3) 土坑

1.SK25（第 103 図）

X=91462,Y=-26730 付近に位置している。

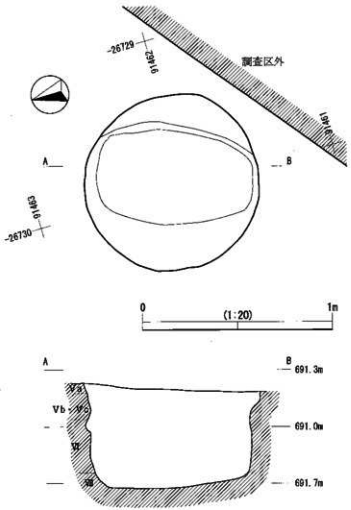
Ｖａ層上面を精査中に円形にⅣ層の落ち込みが検出されたため、サブトレンチを設けて断面観察を行った。その結果、Ⅶ層まで掘り込みが及び壁面がほぼ垂直に立ちあがる土坑であることが確認された。調査区端に近いことから、上層が一部削平されていたが、土坑上面にはプライマリーなⅣ層がわずかに残されていた。

検出面での規模は直径約 90cm、深さ 50cm で東西にやや膨らむ円形を呈する。底部は直軸約 70cm、短軸 30 ～ 50cm の同張りの隅丸長方形を呈し、その長軸は北北東 - 南南西方向となる。非常に硬い赤色スコリア層（Ⅶ層）を 6 ～ 7cm 掘り込んでいる。南北壁は底部からほぼ垂直に立ち上がるのに対し、東壁の立ちあがりはなだらかである。東壁の一部に覆土２層が入り込む直径３～ 4cm、深さ 5cm 前後の小穴がほぼ同じ高さで５ヶ所確認されたが、植物根の可能性も考えられる。西壁には同様の小穴は検出されなかった。

上段調査区において多くの縄文時代の陥し穴が検出されているが、いずれも掘り込み面はⅢ～Ⅳ層上面で、平面形が長楕円から隅丸長方形を呈している。したがって、本遺構は掘り込み面、平面形状とも縄文時代の土坑とは異なることから、確実な旧石器時代の土坑と評価できる。

覆土はブロック状に多層が混在し、締りが弱い。そのため、移植ごてでの掘り下げ時には壁面からぼろぼろと剝がれ落ちる状況であった。覆土は縄文時代の陥し穴のように均質の土が層をなして堆積しているのではなく、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層がブロック状に混在する状況であった。また、覆土全体に姶良丹沢火山灰が拡散しているのが肉眼で観察された。これらの状況から、姶良丹沢火山灰が地表に多く残存している時期、つまり降灰直後に人為的に埋められた可能性が高いと思われる。

化学分析用サンプル土壌以外については、水洗選別で遺物検出を試みたが、周囲から紛れ込んだと思わ



第 103 図　照月台遺跡 SK25

れるチップ２～３点以外はみつからなかった。

BL1 内の縁に位置しているが、遺物がないため石器群と共伴する決定的な証拠はないが、層位的には石器群と一致している。石器群と異なる時期の人が土坑だけ残したと考えるより、石器群を残した人と同じ人が土坑を掘ったと考える方が自然と思われる。

形状や規模から土坑の性格は、陥し穴、墓穴、貯蔵穴などが考えられるが、遺物がないため断定できる要素はない。残留脂肪酸分析、リン酸カルシウム、植物珪酸体分析を実施したが、どの分析においても土坑の性格を決定付けられるような結果は得られなかった。

断面および、遺構本体は土の転写を実施し、展示用に復元されている。

2　旧石器時代の遺物

(1) 石器

3835点の石器が出土した。以下に主な石器について記載するが、その他の器種、法量等の属性は添付CD-ROM中の¥照月台遺跡¥Excel¥照月台旧石器時代石器属性.XLSを参照願いたい。属性の観察項目は遺物番号・遺構の種類・遺構番号・出土層位・X座標・Y座標・標高・器種・材質・重量g・報告番号・個体番号・接合番号・推定産地である。

1. ナイフ形石器（第104～106図・報告番号1～20）

20点のナイフ形石器が出土している。BL1から17点出土しているが、BL1は石器総数も圧倒的に多い。石材は黒曜石が15点で、4分の3を占めている。黒曜石の産地は和田十屋橋西・南群が8点で主体となる。

1は蓼科冷山群の黒曜石の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き、打面を残して基部左右側縁を正方向のブランティングにより、抉り込むように加工している。素材の打面は元々は広かったと思われるが、加工により大きく除去されている。また、打面の向きは石器主軸から傾いている。そのため、素材の石刃自体の剥離軸が傾いていたことがわかる。右側縁尖端にも正方向のブランティングが施され、鋭利な尖端が作出されている。腹面側にも素材のバルバースカーを切る平坦な剥離が認められる。この剥離は素材打面に打点があるようだが、その後の基部への加工により、大きく折断されている。平面形は左右ほぼ対称形で、横断面形はやや甲高の三角形を呈し、縦側面形は反りが小さく直線的である。器種的には剥片尖頭器とすべきであろうか。

2は和田土屋橋西群の黒曜石の縦長剥片を素材としている。基部に素材の打面を置き、打面をわずかに残して左右基部側縁に正方向のブランティングを施している。基部への加工は尖端に近づくにつれ漸移的に弱くなる。右側縁尖端にも正方向のブランティングが施されている。刃部に位置付けられる左右側縁には微細剥離痕が多くみられる。特に右側縁には反方向の微細剥離が顕著で、加工の可能性も考えられよう。平面形は左右ほぼ対称形で、横断面形は薄い三角形あるいは台形を呈し、左右側面形に素材の弱い反りがみられる。尖端はあまり鋭利ではない。

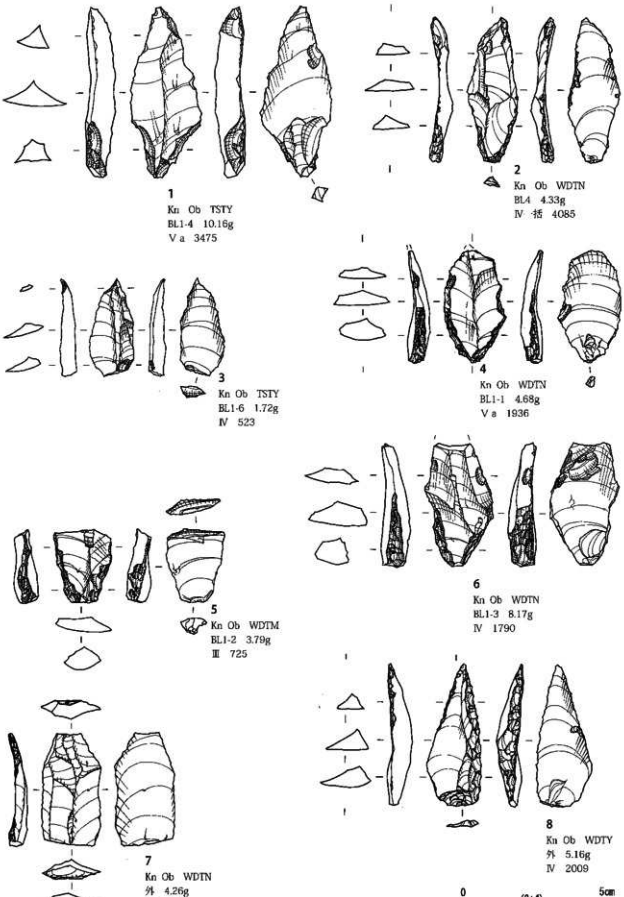
3は蓼科冷山群の黒曜石の縦長剥片を素材としている。基部に素材打面を置いているが欠損している。正方向の加工が右側縁基部と左側縁尖端にみられるが、加工部位はわずかで素材の形状がほぼ維持されている。平面形は左右対称形で、断面が薄く華奢な感じがする。

4は和田土屋橋西群の黒曜石の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き打面をわずかに残して左右側縁基部に正方向のブランティングを施している。また、基部端から左側縁のわずかな範囲であるが、反方向の剥離も認められることから、いわゆる「対向調整」が施されているといえよう。基部からの加工は器体中央部付近にまでおよぶ。右側縁中央部付近には、ベントタイプの開始部をもつ平坦な正方向の剥離がノッチ状にみられる。尖端はわずかに欠損している。平面形は左右対称形で、左右側面形は素材の反りやバルブが目立つ。

5は和田土屋橋南群の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き、打面を残して左右側縁基部に正方向のブランティングを施している。尖端側は欠損している。基部に打面が広く残されるため、基部平面形は平たく厚い。

6は和田土屋橋南群の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き、打面を広く残して左右側縁基部に正反方向のブランティングを施している。左側縁基部に反方向の剥離はみられないが、反方向の加工を施そうとするパンチ痕がみられる。尖端は欠損している。

7は下段調査区のⅡ層から出土しているが、一括で取り上げられており座標がない。和田土屋橋西群の



第 104 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 1（ナイフ形石器 1）

黒曜石の石刃を素材としている。基部に素材打面を置いているが欠損している。左側縁の尖端と基部に正方向のブランティングが施されている。基部と尖端が欠損しているため全体形状がわからない。

８は和田鷹山群の黒曜石の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き右側縁全体に正方向の強いブランティングが施されている。右側縁刃部には正方向の弱い剝離が連続してみられるが、右側縁の加工とは明らかに異なり、使用痕あるいは刃部加工と思われる。打面は残されており、幅は広いが厚みはない。平面形は左側縁が張る左右非対称形で尖端は鋭く尖る。左右側面形にみられる素材の反りは小さく直線的である。

９は珪質頁岩の石刃を素材としている。尖端側に素材打面を置き、左右側縁に正反方向のブランティングを施して素材打面を折断している。左側縁上半部に刃部があるが、刃部には尖端からの微細な樋状剝離や正反方向の微細剝離痕がみられる。平面形は左側縁が「く」の字状を呈する左右非対称形で、横断面形は背部が切り立つ長方形を呈する。左右側面形にみられる素材の反りやバルブは小さく直線的である。

10は珪質頁岩の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き、左右側縁に正方向のブランティングが施されている。右側縁は上半が刃部、下半が基部となるが、基部への加工は弱いノッチ状を呈す。左側縁は全体に正方向の剝離が施されているが、中央付近の剝離は小さく弱い。素材打面は加工により折断されている。平面形は右側縁が「く」の字状を呈する左右非対称形で、横断面形は薄い山形を呈する。左右側面形に若干の素材の反りがみられる。

11は石刃の可能性が高い黒曜石の縦長剝片を素材としている。基部に素材打面を置くが加工により折断されている。左側縁全体に正方向のブランティングが施され、基部端近くには反方向のブランティングも組み合わさっている。右側縁は上半が刃部、下半が基部となり、基部は正方向のブランティングによって作出されている。腹面の基部端には右側縁を打面とする平坦な剝離が施されている。素材打面は加工により折断されている。全体的に加工頻度が高く素材形状を大きく変えている。平面形は尖端が鋭く尖り、右側縁が「く」の字状を呈する左右非対称形で、横断面形は分厚く側縁が切り立っている。左右側面形には素材の弱い反りがみられる。

12は和田土屋橋南群の黒曜石の石刃を素材としている。基部に素材打面が置かれ、左右側縁基部に正方向のブランティングが施されている。右側縁は尖端と基部に正方向のブランティングが施され、中央部に素材縁辺が残されている。この素材縁辺は切り立っており、ブランティングと同様の機能があると考えられる。また、基部端近くにはわずかだが半方向の剝離もみられる。左側縁は上半が刃部、下半が基部となっているが、刃部にはブランティングとはまったく異なる正方向の平坦な剝離が、基部には正方向のブランティングが施されている。基部のブランティングは刃部に近づくにつれ漸移的に弱くなる。平面形は左側縁が「く」の字状を呈す左右非対称形で、横断面形はやや厚く側縁が切り立つ。左右側面形にみられる素材の反りは小さく直線的である。

13は２つに折れたものが隣り合う別々のブロックから出土している。黒曜石の産地は和田土屋橋西群と和田土屋橋南群で別の産地群が推定されているが、判別図上で両者の領域に重なりがあるため、矛盾する結果ではない。石刃を素材として、基部に素材打面が置かれる。左右側縁基部に正方向のブランティングにより素材が折断されているが、素材打面は残されている。上半部は右側縁に正方向のブランティングが、左側縁に正方向の平坦な剝離が施されている。左側縁への加工は、削器の刃部的な加工である。ナイフ形石器としての刃部となる素材の鋭い縁辺が認められないが、欠損後に尖端側だけ再加工されている可能性がある。

14は和田土屋橋西群の黒曜石の石刃を素材としている。上半部が欠損しているが、基部への加工および、形状は13とよく似ている。

15は下段調査区の第3トレンチから出土している。出上層位は不明だが黒色土が付着している。和田土屋橋西群の黒曜石の縦長剥片を素材としている。尖端側に素材打面が置かれるが、左側縁尖端への正方向のブランティングにより、打面およびバルブは折断されている。基部端は正方向の平坦な剥離が、右側縁中央には正方向の微細な剥離がみられる。ナイフ形石器としての明瞭な刃部がみとめられないことから、基部端を刃部とする掻器と考えたほうがよいか。

16は諏訪星ヶ台群の黒曜石を石材としている。素材打面を基部に置き左右側縁に正方向のブランティングを鋸歯縁状に施している。この加工により打面は折断されている他、大きく素材の形状が変化させられている。尖端部が欠損しており、残存部に刃部は残されていない。甲斐で細長く、棒状を呈す。

17は諏訪星ヶ台群の黒曜石の縦長剥片を素材としている。打面を基部側に置き、左右側縁基部に半方向のブランティングを施している。素材打面は加工により除去されている。尖端がわずかに欠損している。

18はチャートを石材としている。大きな剥片の破片を素材としているようで、素材の主要剥離面は図の表面にあるのか裏面にあるのかはっきりしない状況である。左右側縁にブランティングがほどこされている。

19は諏訪星ヶ台群の黒曜石の縦長剥片を素材としている。基部に素材打面を置き、左右側縁基部に正方向のブランティングを施している。右側縁への加工は器体上半部までおよび、素材打面は残されている。平面形は左右対称形を呈し、尖端は尖らず基部は平たい。

20はチャートの縦長剥片を素材としている。尖端側半分が欠損している。尖端側に素材打面を置き、右側縁基部と左側縁中央部に正方向のブランティングが施されている。

2. 台形石器（第106～107図・報告番号21～38）

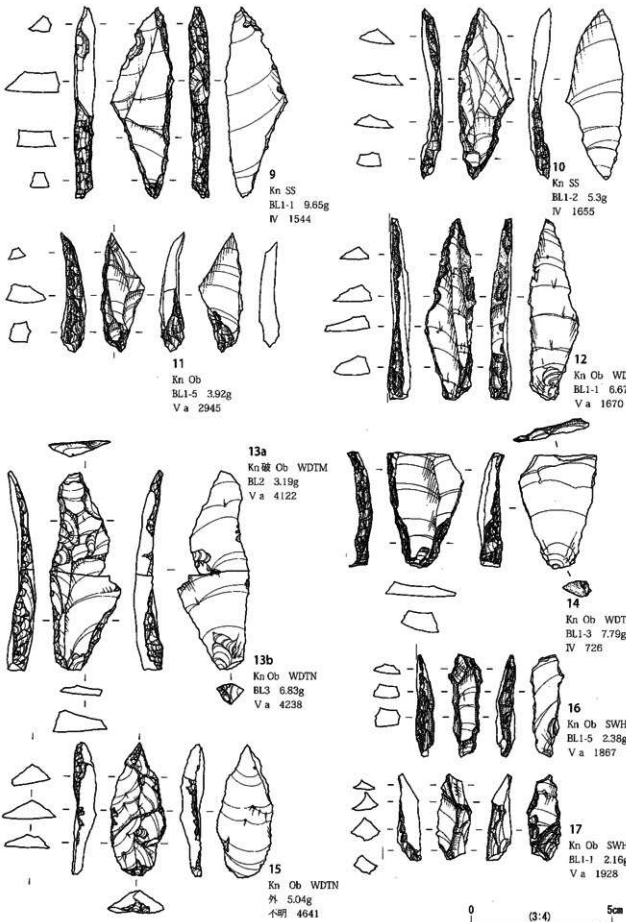
18点の台形石器が出土しており、16点がBL1から出土している。16点が黒曜石で、産地はナイフ形石器と異なり和田鷹山群が主体となる。

21は無斑晶質安山岩の横長剥片を素材としている。左側縁に素材打面が置かれるが、加工により折断されている。また、背面にはポジ面がみられる。右側縁は正方向のやや角度の浅いブランティング、左側縁は反方向のブランティングが施されている。素材打面は加工により除去されている。刃部は鈍く尖るが、厚みがなく不安定な形状を呈す。平面形は左右対称形で、横断面形は表裏凸となるが、裏面側の膨らみの方が大きい。左右側面形はバルブの膨らみが目立つ翼状を呈す。

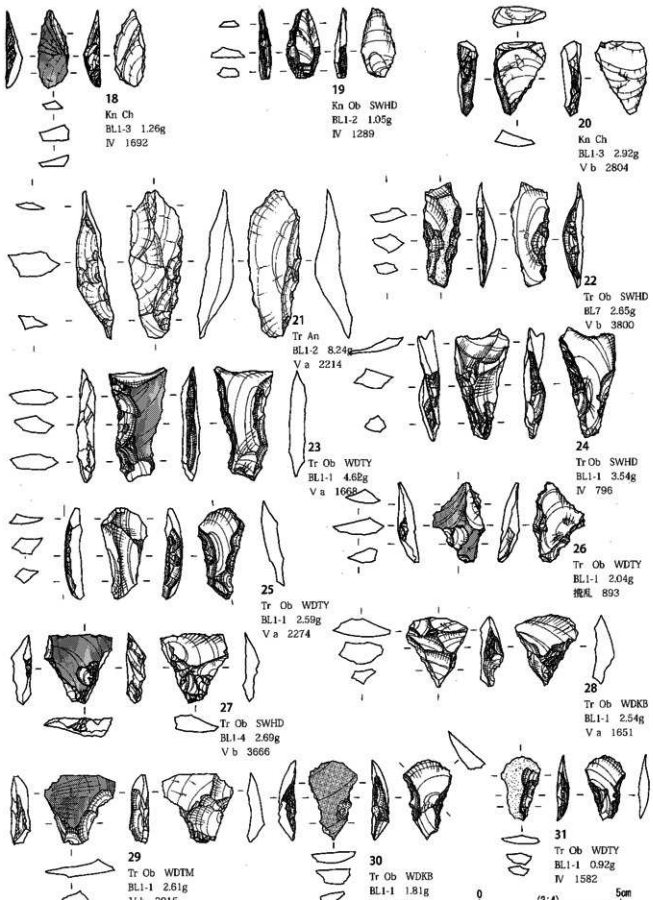
22は諏訪星ヶ台群の黒曜石の横長剥片を素材としている。左側縁に素材打面を置かれるが加工により折断されている。右側縁に正方向の平坦剥離、左側縁に正反方向の平坦剥離を施している。刃部は右上がりの斜刃となるが、尖端は折れている。平面形は上部が広がる細長い台形を呈し、横断面形は表裏とも凸になる。左右側面形はバルブが膨らむ翼状を呈する。

23は和田鷹山群の黒曜石の横長剥片を素材としている。左側縁に素材打面を置かれるが、加工により折断されている。また、背面にポジ面がみられる。右側縁は角度の浅い反方向のブランティングが施され、左側縁は反方向の平坦剥離を施した後に正方向の平坦剥離が施されている。平面形は上部が広がる台形を呈し、刃部は平たく直線的である。横断面形は薄くつぶれた六角形を呈し、左右側面形にみられる反りは小さい。

24は諏訪星ヶ台群の横長剥片を素材としている。右側縁に素材打面が置かれるが、加工により折断されている。右側縁は反方向の平坦剥離が施されるが、基部端付近は正方向の細かく平坦な剥離が施されている。左側縁の加工は正方向の平坦剥離が主体となるが、一部に反方向の剥離もみられる。平面形は刃部が平たく上部が広がる三角形を呈し、横断面形は表裏とも凸となる。左右側面形はバルブが目立ち、凸部が下に偏る翼状を呈する。



第 105 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 2（ナイフ形石器 2）



第 106 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図３（ナイフ形石器３・台形石器１）

25は和田鷹山群の横長剝片を素材としている。右側縁に素材打面が置かれるが加工により折断されている。左右側縁は反方向の切り立った平坦剝離により加工されている。平面形は刃部が山形の上部が広がる細長い扇のような形状を呈する。横断面形は表裏とも凸となり、左右側面形はパルプが目立つ半月形を呈する。

26は和田鷹山群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。左側縁に素材打面が置かれるが加工により折断されている。背面にはポジ面がみられる。左右側縁は反方向の平坦な剝離が施されているが、加工は粗く鋸歯縁状を呈す。刃部は右上がりの斜刃となる。平面形は三角形を呈し、横断面形は表裏とも凸となる。

27は諏訪星ヶ台群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。右側縁に素材打面を置かれ、加工により縮小しているが広く残されている。背面にはポジ面がみられる。刃部は平たく直線的で平面形は上部が広がる台形を呈し、横断面形は表面が平たく裏面が凸となる。左右側面形はやや表面側に反りあがる。

28は和田小深沢群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。素材打面は右側縁に置かれるが、加工により折断されている。右側縁は反方向の切り立った平坦剝離が、左側縁は反方向の平坦剝離が施されている。刃部は緩やかな弧状を呈し、平面形は上部が広がる三角形を呈する。横断面形は裏面が山形で凸となる。左右側面形はやや表面側に反りあがる。

29は和田土屋橋南群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。素材打面は右側に置かれるが、折断されている。その折れ面から正方向の平坦な剝離と反方向の微細な剝離が施されている。左側縁は反方向の平坦な剝離が施され、部分的に正方向の微細な剝離もみられる。刃部は平たく直線的で、平面形は上部が開く三角形を呈する。横断面形は表面がわずかに凸となり、裏面は凸となる。左右側面形はわずかに表側に反りあがっている。

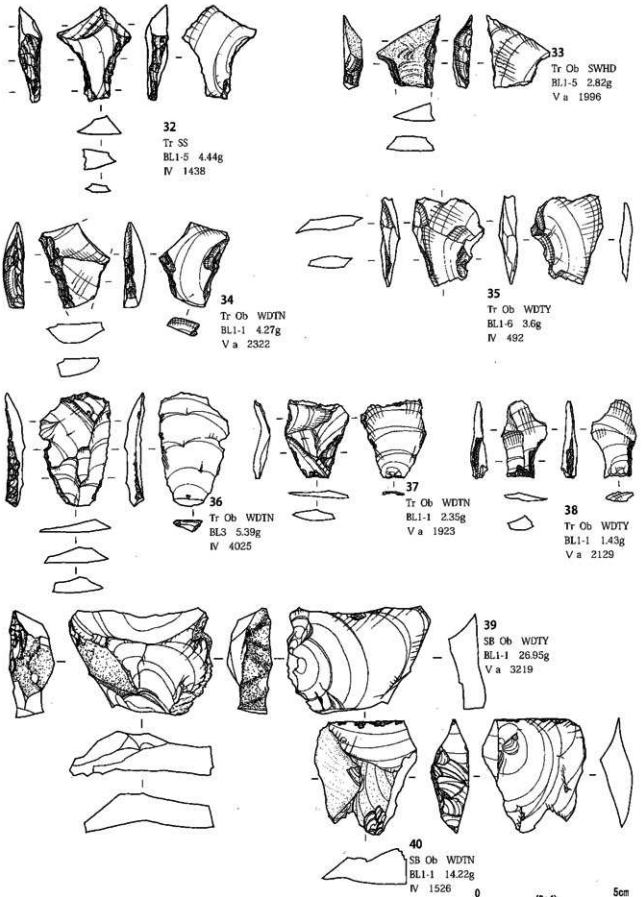
30は和田小深沢群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。素材の打面と主要剝離面の角度が135°前後と大きく、打面は左側縁よりの腹面に置かれている。背面は１枚のポジ面で構成されている。左右側縁に反方向の切り立った平坦剝離が施され、わずかに抉れる基部が作出されている。平面形は刃部が弧状となることから、細長い扇形を呈する。横断面形および左右側面形は表面が平坦で、裏面が凸状を呈する。

31は和田鷹山群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。素材打面は右側縁に置かれるが、加工により折断されている。背面は滑らかな礫面が大部分を占める。右側縁は正方向の平坦剝離が施された後に、反方向の切り立った平坦剝離が施されている。左側縁は反方向の弱い平坦剝離が施されている。刃部は弧状を呈し、基部は弱く抉れている。平面形は小形の細長い扇形を呈し、横断面形および左右側面形は表面が平坦で、裏面が凸となる「D」字状を呈する。

32は珪質頁岩の貝殻状剝片を素材としている。素材打面は左側縁に置かれるが加工により折断されている。左右側縁に正方向のプランティングが施され、ノッチ状の基部が作出されている。加工頻度が高く素材が大きく変形させられている。刃部は山形を呈し鈍く尖る。平面形は縦につぶれたペン先形を呈し、横断面形は台形、左右側面形にはわずかに反りがみられる。

33は諏訪星ヶ台群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。素材打面は左側縁に置かれるが、加工により折断されている。背面の大部分は礫面となっているが、滑らかで機能的には剝離面と変わらないと思われる。左右側縁に正方向のプランティングが施され、ノッチ状の基部が作出されている。刃部は直線的な右上がりの斜刃となり、基部端は欠損している。平面形は切出状を呈し、横断面形は台形、左右側面形は直線的である。

34は和田土屋橋西群の黒曜石の貝殻状剝片を素材としている。素材打面は左側縁に置かれるが、加工



第107図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図4（台形石器2・貝殻状剥器1）

により折断されている。左側縁は反方向の切り立った平坦剥離を施した後に正方向の平坦剥離施されており、この加工により縁辺に潰れがみられる。右側縁は反方向の切り立った平坦剥離が施されている。刃部は右上がりの斜刃となるようだが、尖端は欠損している。また、基部端も欠損している。

35は和田鷹山群の黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。素材打面は右側縁に置かれるが、加工により折断されている。右側縁は反方向の大きく平坦な数枚の剥離が施され、左側縁は正方向の微細な剥離が施されている。全体的に加工が粗く、他の台形石器とはやや様相が異なる。刃部は薄く非直線的で安定していない。平面形は上部が広がる台形を呈し、横断面形および左右側面形には素材の反りがみられる。

36は和田土屋橋西群の縦長剥片を素材としている。素材打面は基部に置かれ、折り取りの加工により除去されている。左側縁基部には正方向のプランティングが、右側縁基部には正方向の微細剥離が施されている。刃部は薄く素材末端にあたるため非直線的である。平面形は細長い台形を呈し、横断面形は台形、左右側面形にはわずかに反りがみられる。台形石器としたが、ナイフ形石器との中間的な器種として位置付けられる。

37は和田土屋橋西群の貝殻状剥片を素材としている。素材打面は基部に置かれ、ほぼ原形のまま残されている。左右側縁には正方向の微細な剥離がみられるが、素材形状はほとんど維持されている。刃部は平たく直線的で、正方向の微細剥離痕が顕著にみられる。平面形は台形を呈し、横断面形は薄く、左右側面形には素材の反りが目立つ。

38は和田鷹山群の黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材打面基部に置かれ、加工によりわずかに縮小させられている。左側縁基部に反方向の細かいプランティングが、右側縁基部に正方向の微細な剥離が施されている。器体上半部に加工はない。刃部は薄く、不規則な指先状を呈す。平面形はゆがんだペン先形を呈する。

3. 貝殻状刃器（第107～109図・報告番号39～56）

51点の貝殻状刃器が出土しており、内39点がBL1から出土している。石材は黒曜石が44点と偏る。刃部に使用痕と思われる微細剥離痕があるもののみを認定条件としたため、微細剥離痕が残りにくい黒曜石以外の石材は数が少ない。黒曜石産地は諏訪星ヶ台群が18点、和田鷹山群が15点、土屋橋西群が6点となっている。貝殻状剥片を素材として、素材打面を側縁に置かれるものがほとんどである。素材縁辺には打面、折れ面、切り立った素材末端などで構成され、加工は部分的に施されるのみある。

4. 彫器（第109～111図・報告番号57～60・62～65）

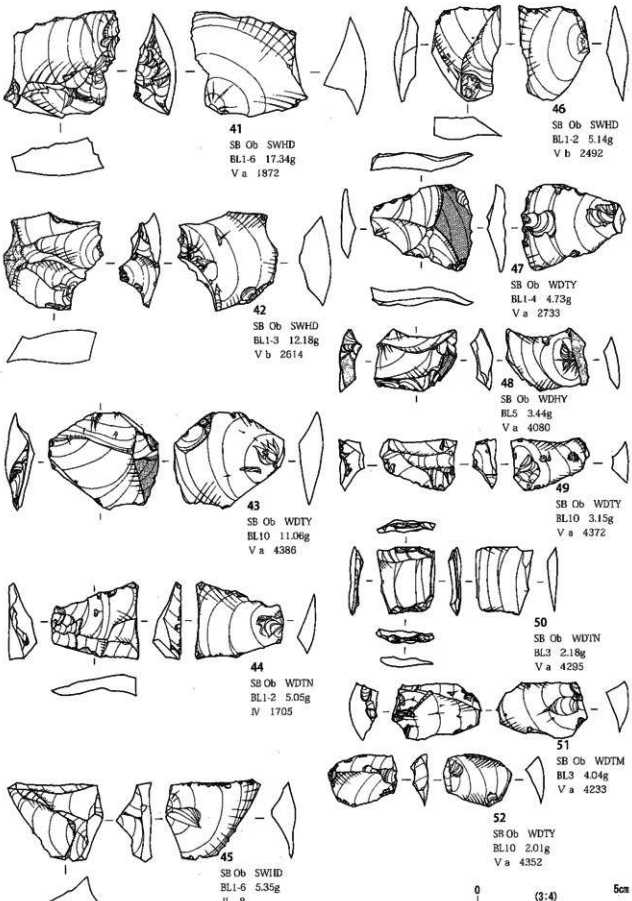
14点の彫器が出土しており、内10点がBL1から出土している。石材は黒曜石が9点と最も多く、産地は和田鷹山群、和田土屋橋南群、和田高松沢群、蓼科冷山群が2点ずつと特定の産地に偏らない。

57は無斑晶質安山岩の縦長剥片を素材としている。素材打面に正反方向の平坦で微細な剥離を施して樋状剥離打面を作出している。樋状剥離は右側縁に素材の長軸に平行する。樋状剥離打面は楔形石器との共通性があり、ド端にもわずかに同様の剥離がみられることから、楔形石器の可能性も考えられる。

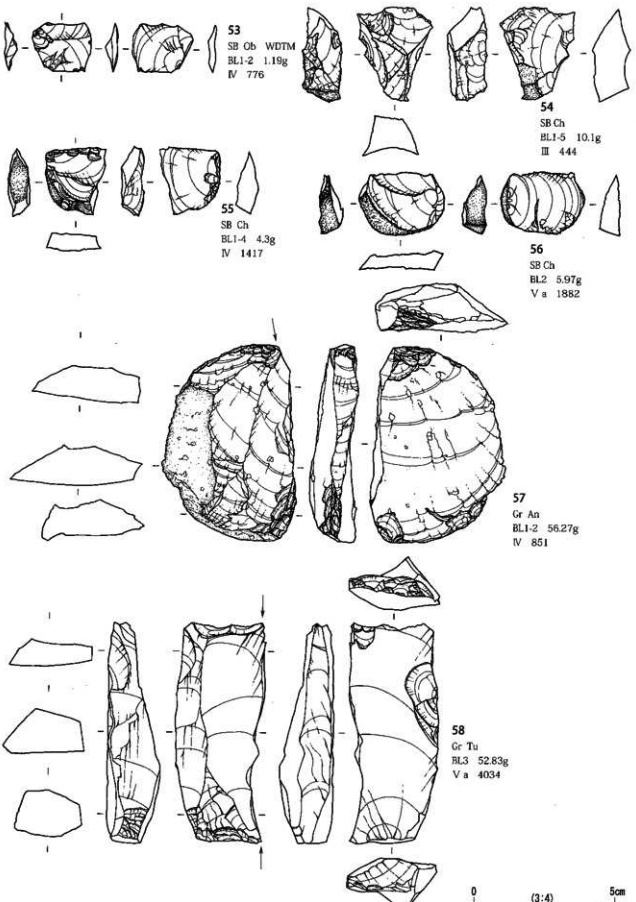
58は凝灰岩の分厚い石刃を素材としている。正方向のプランティングが施された素材末端を打面として樋状剥離を施している。また、下端の素材打面を打面とした樋状剥離も認められる。両彫刃面は連なっており素材長軸にほぼ平行する。腹面に数枚の平坦な剥離がみられる。

59は凝灰岩の分厚く大きい貝殻状剥片を素材としている。素材打面を打面として右側縁に樋状剥離を施している。彫刃面は素剥離軸と平行する。腹面には下端からの平坦な剥離がみられる。素材の打面には直径10mmを上回る素材剥離時のパンチコーンがみられる。

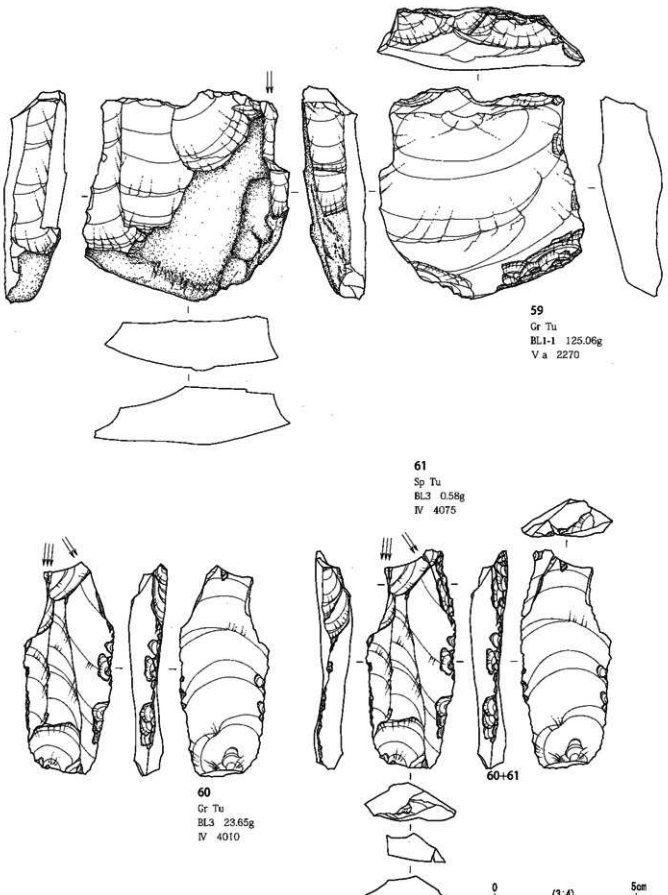
60は凝灰岩の石刃を素材としている。素材末端の折れ面を打面として、左右側縁に樋状剥離を施している。樋状剥離前の素材縁辺には正方向の不規則な微細剥離がみられる。彫刃面は素材縁辺にほぼ平行す



第108図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図5（尖頭状刃器2）



第 109 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 6（貝殻状刃器 3・彫器 1）



第 110 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図７（彫器２）

る。61は60に接合したスポールである。

62～65は黒曜石の縦長剥片を素材としてる。いずれも折れ面を打面として、素材縁辺に平行する樋状剥離を施している。周縁への調整は62は彫刀面以外に正方向のブランティングが施されているが、63は部分的、64は明瞭な周縁調整はない。

5. 削片（第111図・報告番号66～69）

8点の削片が出土し、BL1とBL3に4点ずつ分布する。石材は黒曜石7点、凝灰岩1点である。

66～68は黒曜石製で、いずれも打面が欠損している。削片の稜に対して正方向のやや鋭角なブランティング状の加工がみられる。

69は黒曜石製で、折れ面が打面となっている。樋状剥離以前の下面からの樋状剥離痕がみられる。その樋状剥離痕に切られる稜への加工が認められる。

6. 掻器（第111～114図・報告番号70～89）

26点の掻器が出土し、内18点がBL1、6点がBL3から出土している。石材は黒曜石が18点と多く、産地は和田十屋鱒西・南群が主体となる。

70は無斑晶質安山岩の縦長剥片を素材としている。素材打面は刃部側に置かれるが、加工により折断されている。基部以外に正方向の角度のある平坦剥離を施して、周縁および刃部を作出している。平面形は刃部幅が狭く、最大幅が基部側に偏る。刃部における背面と腹面の角度が50～60°と掻器としては鋭角で刃部加工も細く、出土層位もⅢ層と浅いため、主体となるナイフ形石器石器群より時期的に新しい可能性がある。

71～78は縦長剥片を素材としている。素材となる縦長剥片は石刃とするには厚く、背面の剥離方向も一定しない。正方向の角度のある平坦な剥離により刃部が作出される。75は刃部が素材打面側に置かれているが、それ以外は素材末端側に置かれている。73、75～77には正方向の剥離による周縁加工が施されている。

79と80は接合する。一体であった時点で掻器として機能していたと考えられるが、79には割れた後の加工がみられる。

81～89は分厚い貝殻状剥片あるいは横長剥片が素材となる。刃部は85が素材側縁に、86が素材打面に設定される他は、素材末端が刃部となる。平面形は円形または寸詰まりの拇指状を呈する。

7. 掻器状石器（第115～116図・報告番号90～102）

19点の掻器状石器が出土し、内14点がBL1に分布する。石材は黒曜石が15点と多く、産地は和田鷹山群が主体となる。刃部への加工は一般的な掻器は大中小の3段階前後剥離により構成されるのに対し、掻器状石器は中あるいは小の1段階のみで構成される。また、刃部以外への周縁加工はほとんどみられない。素材には小形の貝殻状剥片が用いられる場合が多く、部分的に正方向の加工を施して、弧状の刃部が作出されるものが多い。

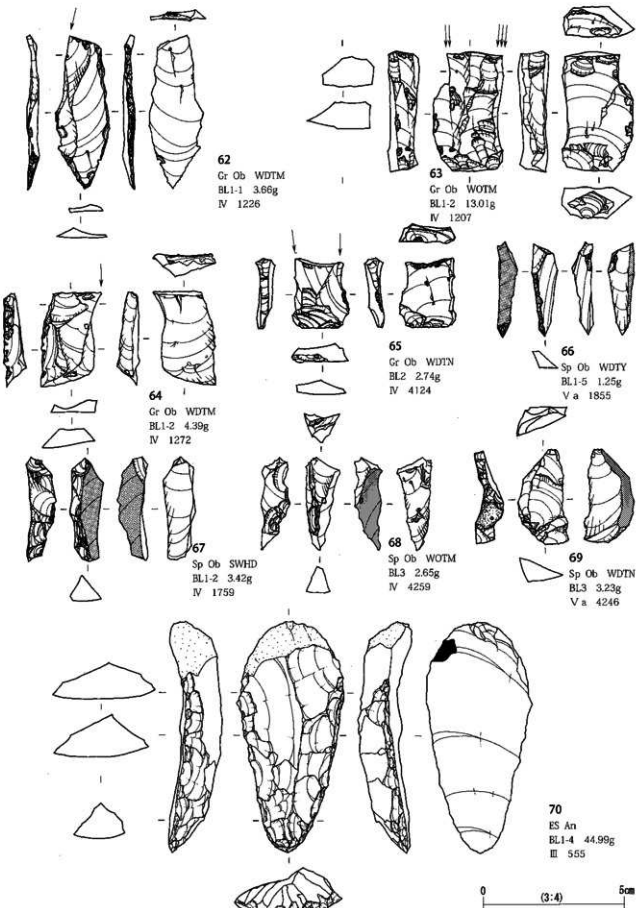
8. 厚刃掻器（第116図・報告番号103～108）

7点の厚刃掻器が出土している。7点中5点が黒曜石である。素材の折れ面や打面の切り立った面から、細かい平坦剥離を施して刃部を作出している。加工は機能部のみで周縁にはみられない。素材には貝殻状剥片が主体に用いられるが、その形状はほとんど維持されるためか、形態の斉一性は低い。

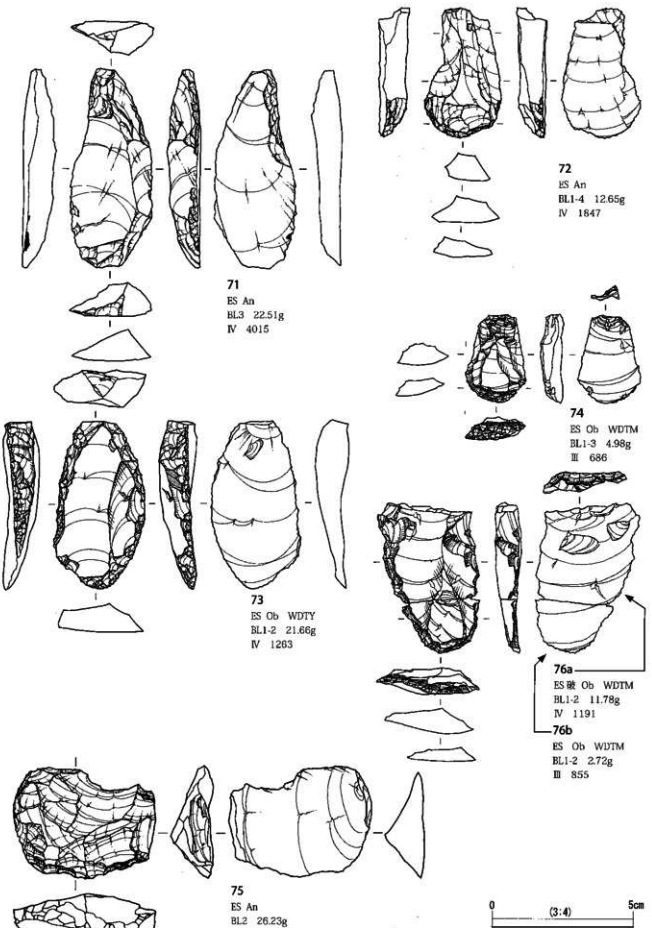
9. 削器（第117～122図・報告番号109～132）

45点の削器が出土し、内38点がBL1に分布する。石材は黒曜石が17点と最も多いが、他の器種と比べると割合が低く、無斑晶質安山岩やチャートも多い。

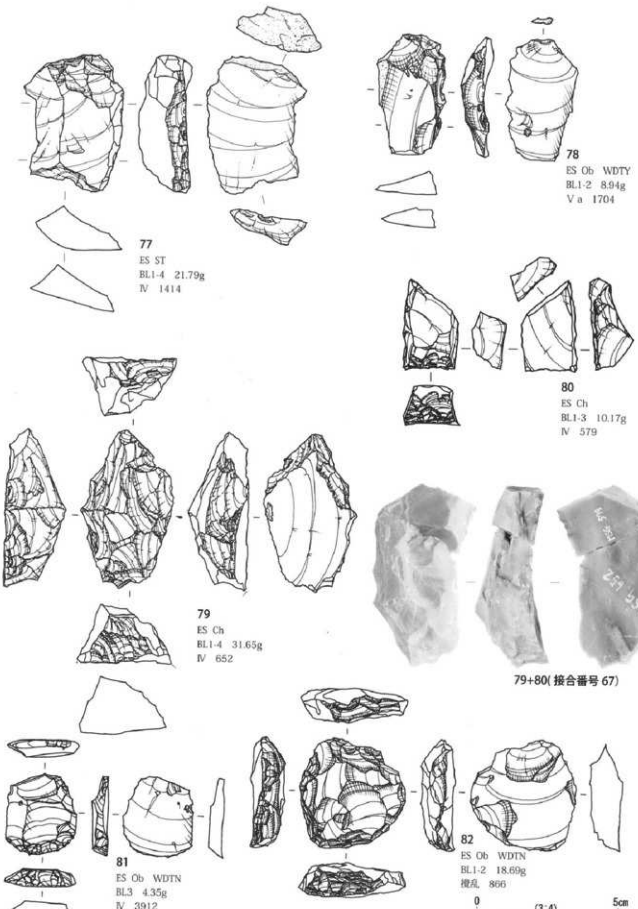
109～120は縦長剥片あるいは石刃を素材とする。素材を縦に置き、長辺となる左右側縁に正方向の



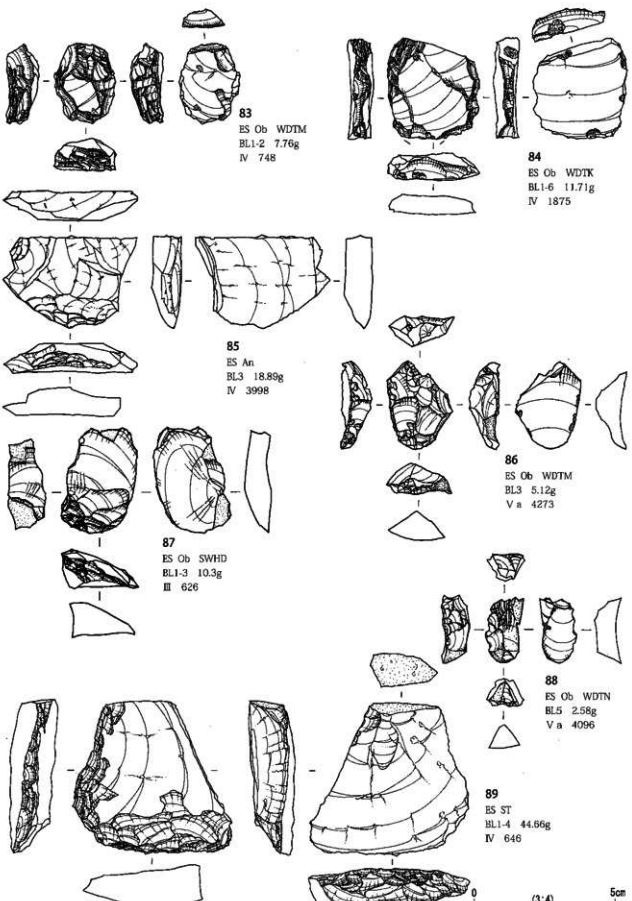
第 111 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図８（彫器３・削片・掻器１）



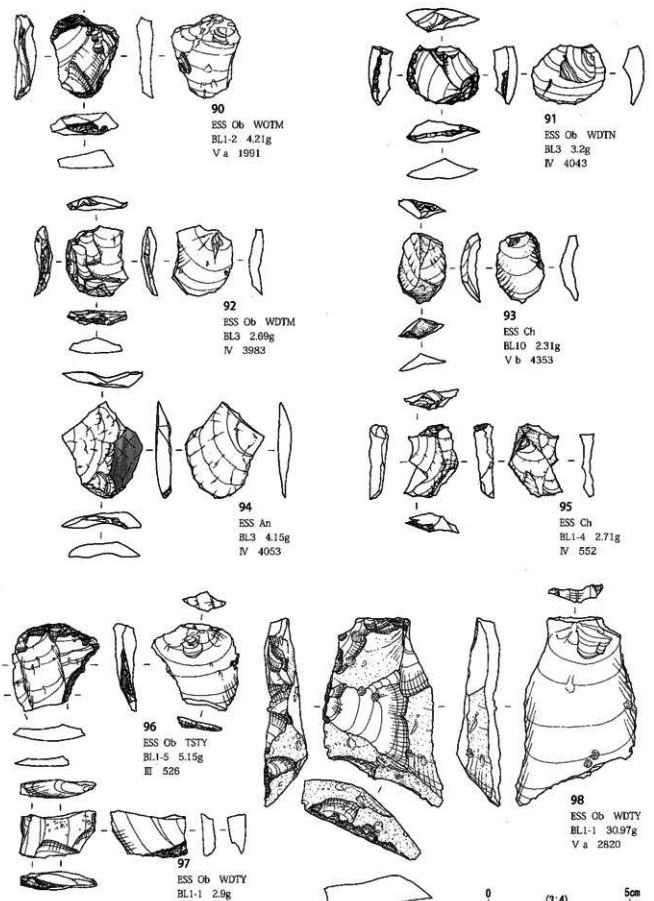
第 112 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図９（掻器２）



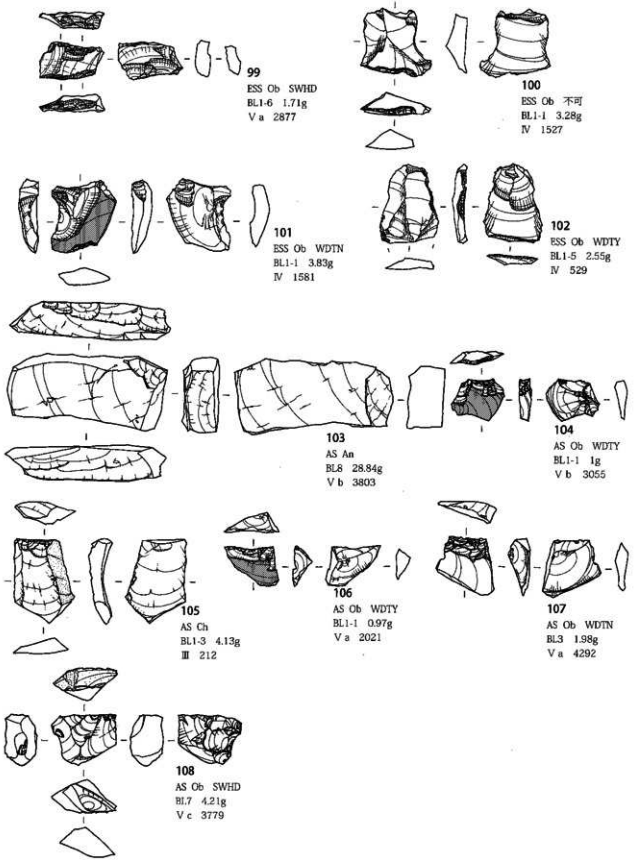
第113図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図10（掻器3）



第 114 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 11（掻器 4）



第115図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図12（掻器状石器1）



第 116 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 13（掻器状石器 2・厚刃掻器）

剝離を施して刃部を作出している。刃部の剝離には平坦、微細、角度のある平坦剝離などがみられる。刃部以外への加工はほとんどない。これらいずれもⅣ層より上位から出土しており、BL1-4の記述でふれたように、主体であるＶａ層に生活面をもつナイフ形石器石器群より、新しいⅣ～Ⅲ層に生活面が求められる石器群に属すものが多いと思われる。

121～132は貝殻状剝片や横長剝片を素材とする。加工は刃部にのみ施され、平坦剝離、微細な剝離などがみられる。大形の一群については縦長剝片を素材とする削器と同じ時期に属すものが含まれていると思われる。Ｖａ層以下から出土しているものはナイフ形石器石器群に属すと思われるが、形態的斉一性は低い。

10. 抉入削器（第123図・報告番号133～138）

13点の抉入削器が出土しており、内9点がBL1に分布する。石材は黒曜石が11点と多く、産地は和田鷹山群が主体である。

133～135は石刃や縦長剝片を素材としている。素材を縦に置き、左右側縁部分的なノッチ状の加工を施して刃部を作出している。

136～138は貝殻状剝片を素材としている。縁辺の一部にノッチ状の加工を施して、刃部を作出している。加工部位は縦長剝片を素材とするものより限定的で狭い。

11. 鋸歯縁状削器（第123～124図・報告番号139～140）

19点の鋸歯縁状削器が出土し、内14点がBL1に分布している。石材は黒曜石が10点と多い。

多様な形状の素材の一部に、平坦剝離や強い剝離を施して、鋸歯縁状の刃部が作出されている。周縁や基部への加工がないため形態的斉一性がない。

12. 揉錐器（第125図・報告番号151～155）

12点の揉錐器が出土し、10点がBL1に分布する。石材は黒曜石が8点と多い。

剝片や残核の端部1～2ヶ所にノッチ状の加工を施して、錐状の尖頭部を作出している。他の部位に加工はなく、素材も多様であることから形態的斉一性がない。

13. 楔形石器（第125～127図・報告番号156～168）

112点と多くの楔形石器が出土し、BL1に93点分布する。石材は他の器種と異なり、チャートが42点と最も多い。黒曜石も33点あり産地は和田鷹山群が主体となる。無斑晶質安山岩も27点ある。

遺跡内で確実に多くの製品が製作されている器種である。しかし、企画的な製作方法はなく、多様な形状の剝片や石核や原石を素材として、台石と敲石の間に挟んで敲いた結果、生み出されたものである。したがって、これら楔形石器が目的的に製作された器種であるか、使用の結果残されたものであるかはわからない。形態的斉一性はなく、貫ノ木遺跡にみられた石刃を素材とする楔形石器はない。

14. 石刃（第127～129図・報告番号169～183）

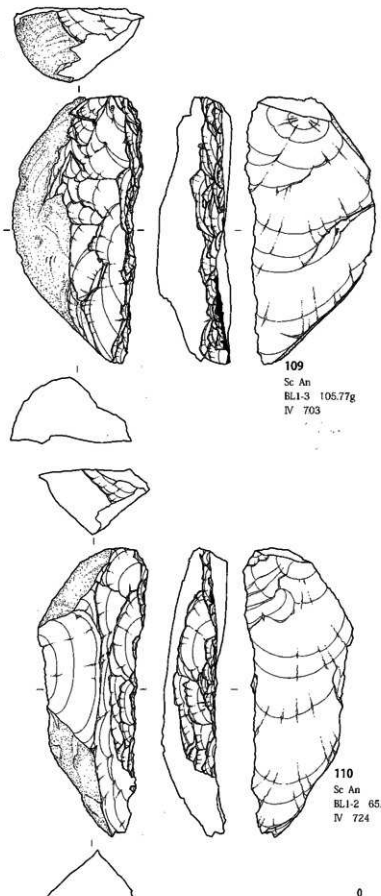
28点の石刃が出土し、20点がBL1に分布する。石材は黒曜石が16点と多く、産地は和田土屋橋西・南群が主体となる。打面調整、頭部調整、稜上調整がみられ、石刃石核から剝離されていることがわかるが、調査区内に剝離の痕跡はない。

15. 剝片（第129図・報告番号184）

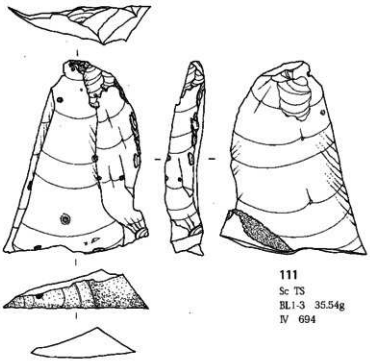
184は珪質凝灰岩の大形剝片である。石器素材目的の剝片ではなく、これを石核とするために持ちこまれた原石的な性格をもつものと思われる。

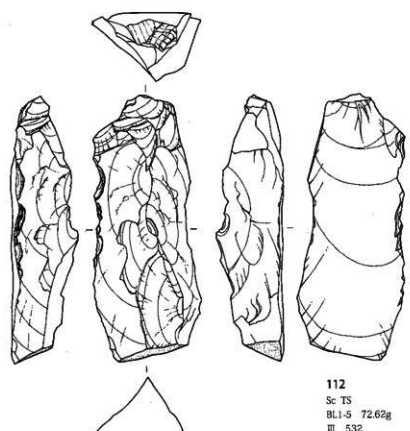
16. 石核（第130～139図・報告番号185～211）

157点の石核が出土し、BL1に118点分布している。石材はチャートが76点と最も多く、次いで黒曜石42点、無斑晶質安山岩19点となる。黒曜石の産地は和田鷹山群が28点で主体となり、ナイフ形



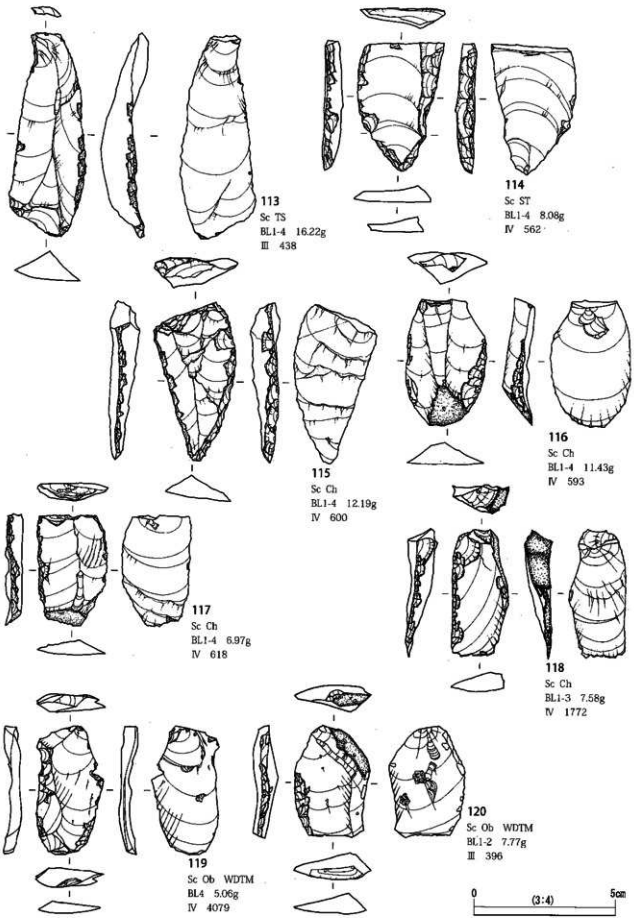
第117図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図14（削器1）



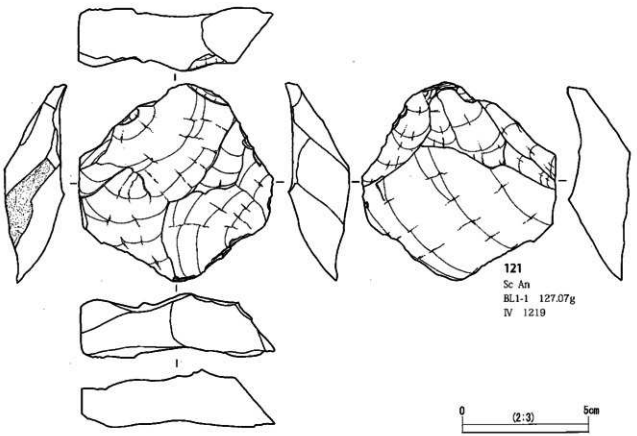


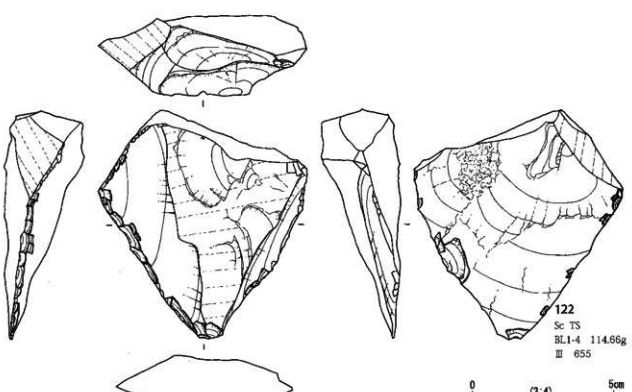
0　(3:4)　5cm

第118図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図15（削器2）

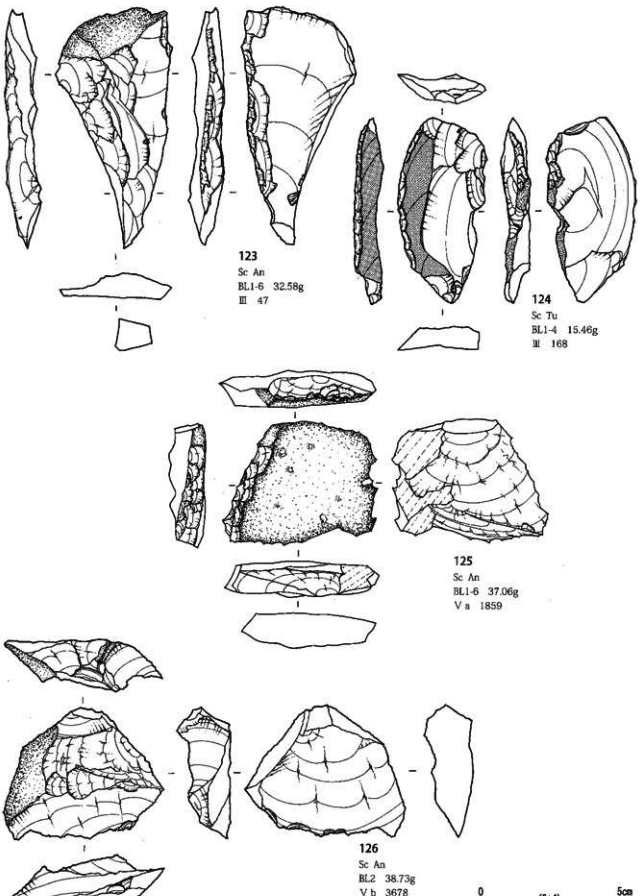


第119図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図16（削層3）

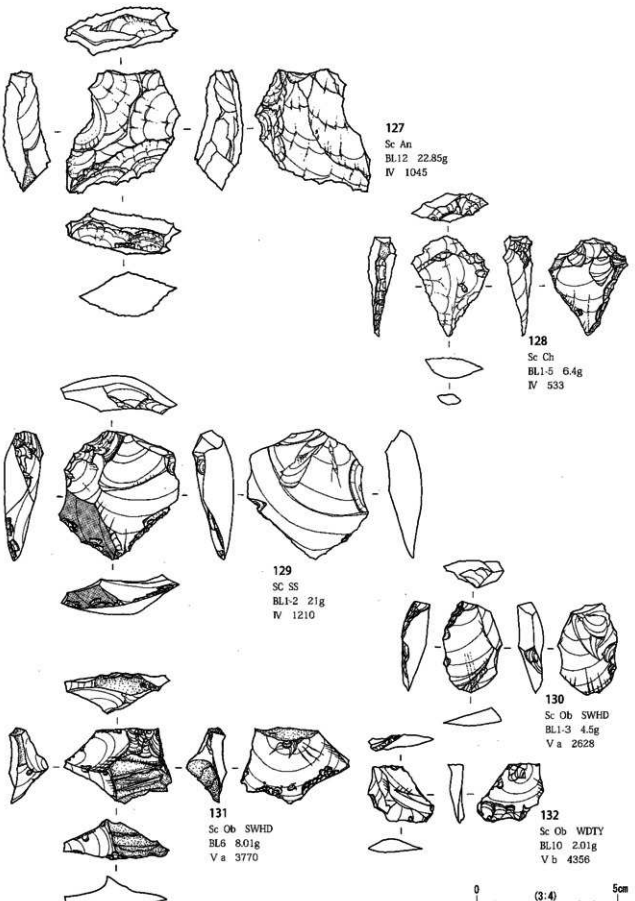




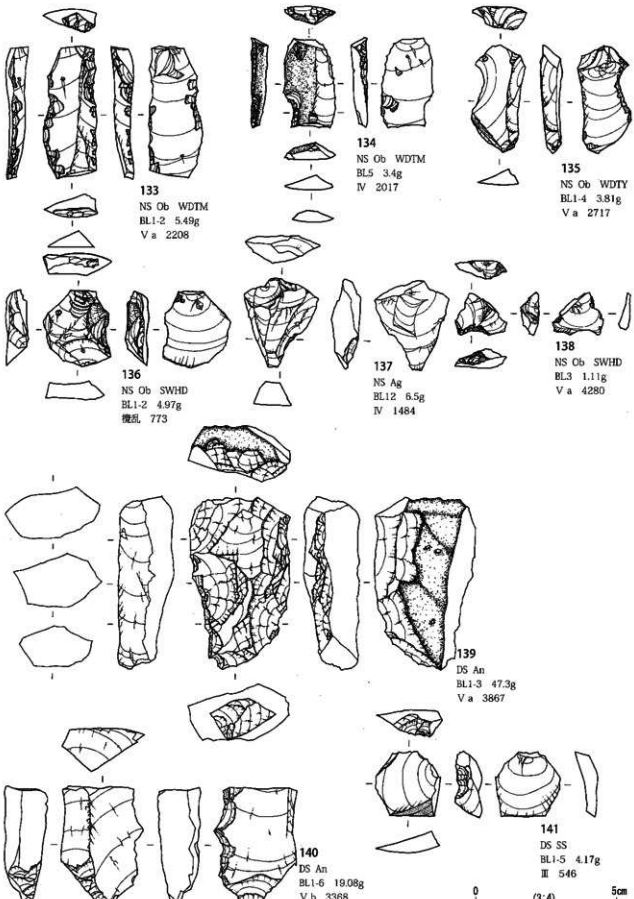
第 120 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 17（削器 4）



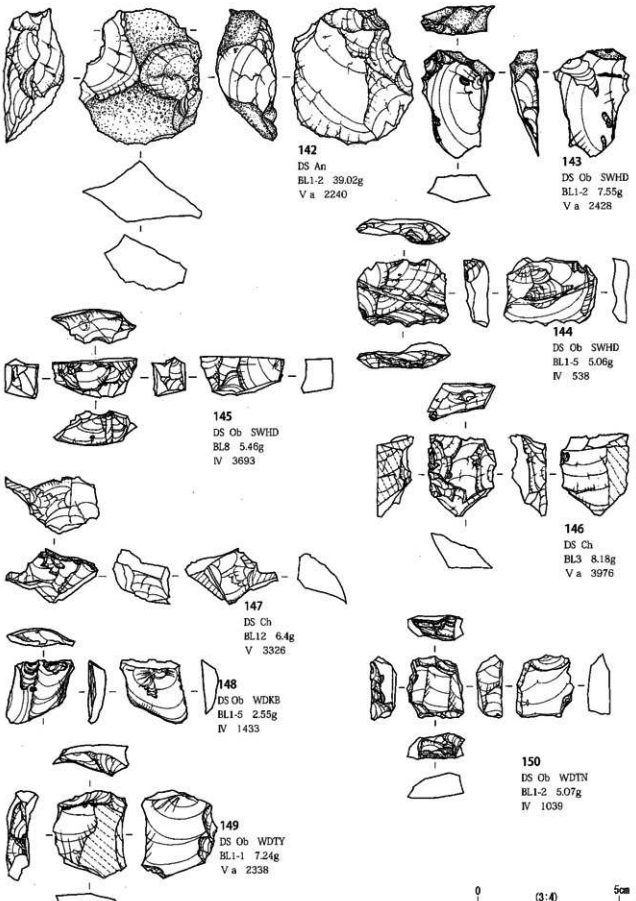
第 121 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 18（削器 5）



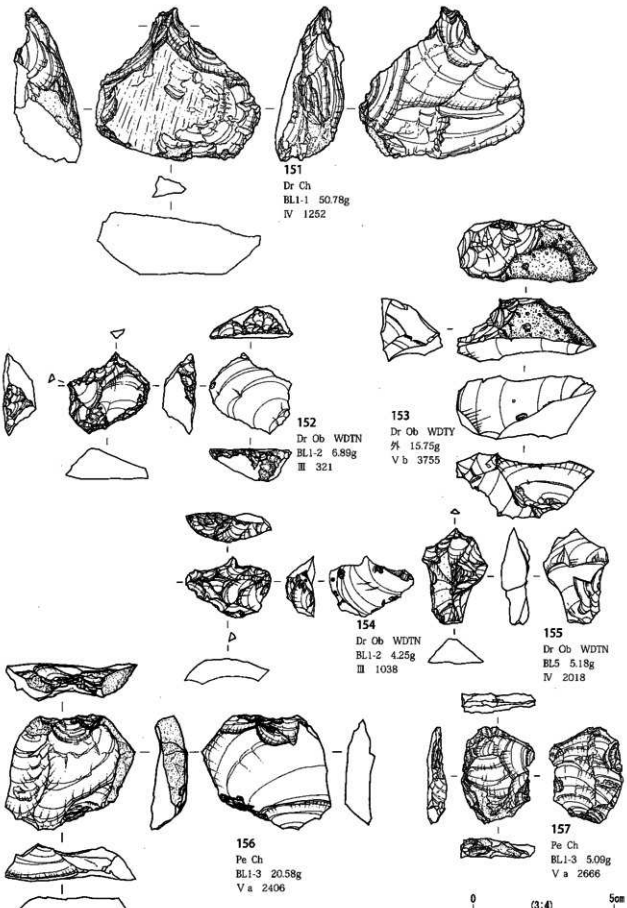
第122図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図19（削器6）



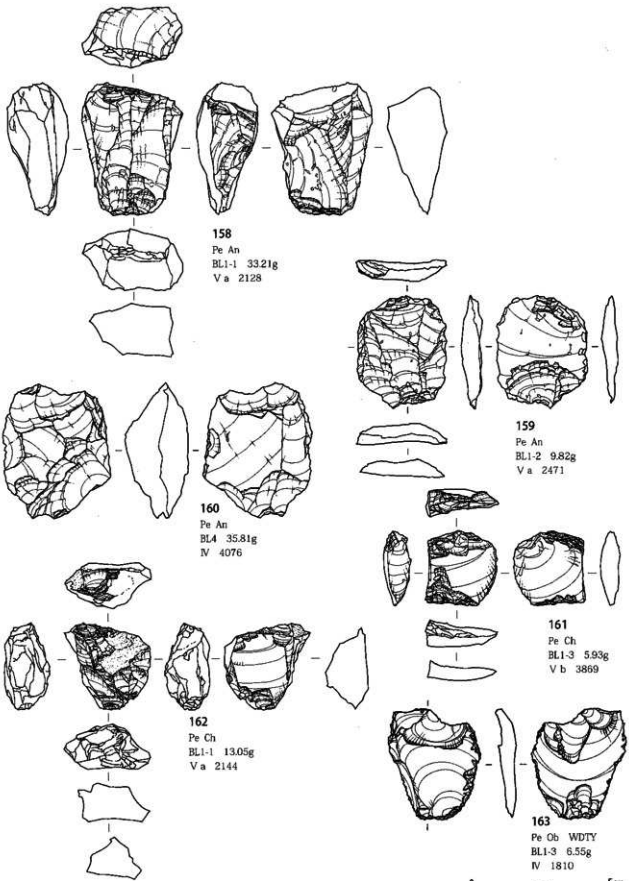
第123図　照月台遺跡出土石器時代石器実測図20（抉入削器・鋸歯縁状削器1）



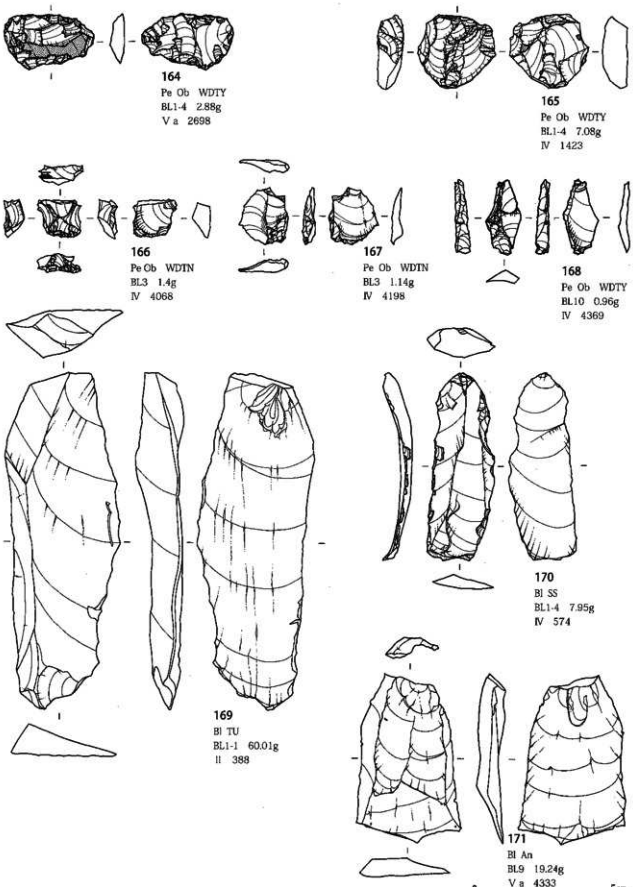
第 124 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 21（鋸歯縁状削器 2）



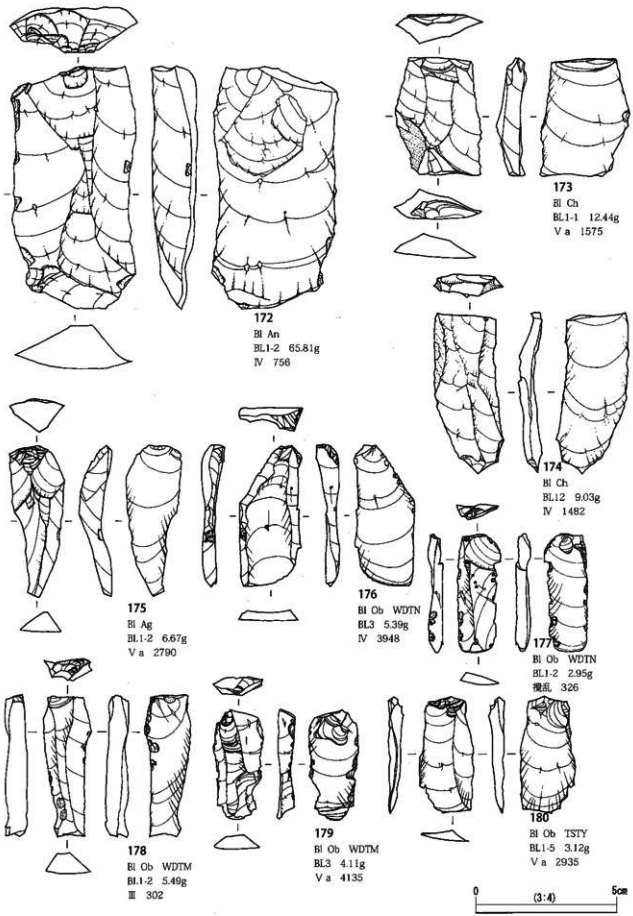
第125図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図22（揉錐器・楔形石器1）



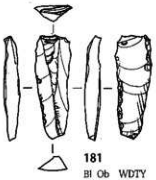
第 126 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 23（模形石器 2）



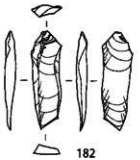
第 127 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 24（楔形石器３・石刃１）



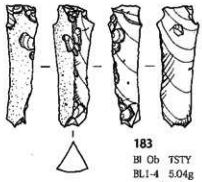
第128図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図25（石刃2）



181
Bl Ob WDTY
BL1-3 2.13g
V a 2662

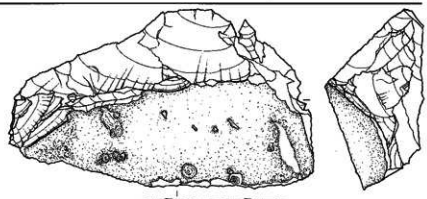


182
Bl Ob SWHD
BL1-6 1.24g
IV 502

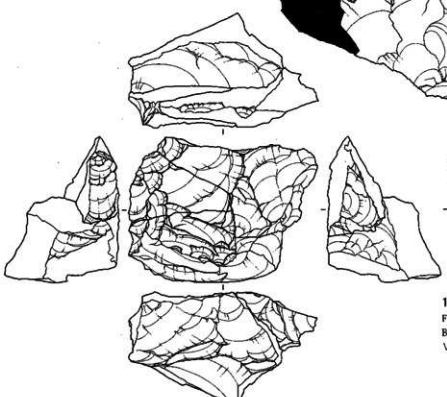


183
Bl Ob TSTY
BL1-4 5.04g
V a 2757

0 (3:4) 5cm



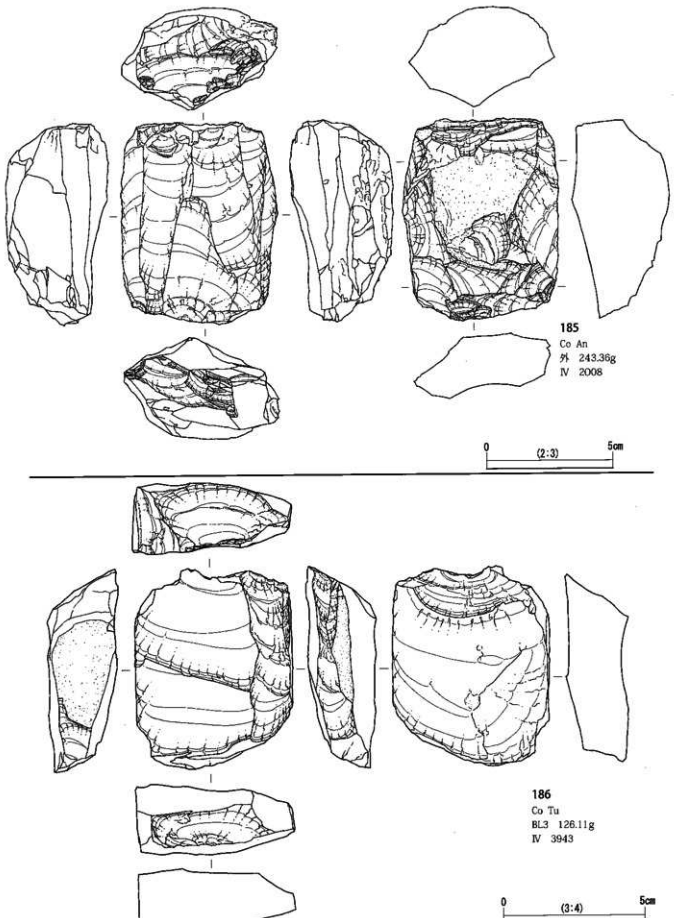
184a
Fl Rh
BL1-4 85.85g
V b 3239-a



184b
Fl Rh
BL1-4 304.53g
V b 3239-b

0 (1:2) 10cm

第 129 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 26（石刃３・剝片）



第130図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図27（石核1）

石器等で多い和田土屋橋西・南群は２点しかない。

185は無斑晶質安山岩製で、唯一の石刃石核である。作業面を正面に固定して、上下面を打面として連続して石刃を剥離した痕跡をもつ。打面調整が顕著に施されるが、頭部調整はみられない。剥離が進み、打面がかなり後退している。背には礫面が残されているものの、面的な整形が施されている。典型的な石刃石核として評価できるが、接合もなく調査区内でこの石核から剥離された石刃は認められない。

186と187は縦長剥片を目的とする石核である。単剥離打面から１～２枚の縦長剥片を剥離している。

188～190は作業面がほぼ一面に固定され、作業面の周縁が打面となる石核で、貝殻状剥片が剥離されている。分厚く大形品が目立つ。

192と193は90°の打面・作業面転移を頻繁に行うサイコロ状の石核で、貝殻状剥片が剥離されている。

194は打面と作業面を入れ替えながら剥離をすすめるチョッピングトゥール状の石核である。貝殻状剥片が剥離されている。

199～202は黒曜石の石核である。黒曜石の石核は剥片を素材とするものが多い。剥離枚数が少なく２～３点程度しか剥離の痕跡がみられないものが多い。

203～211はチャートの石核である。石核に残される礫面から予想されるチャートの原石は、鶏卵大程度で小さい。これらを両極打撃により剥離を行うものが多い。その他にはサイコロ状になるものや、半割面を打面として数枚の剥片剥離を行うものが認められる。203は極初期の段階の石核で原石の形状がほぼ維持されている。

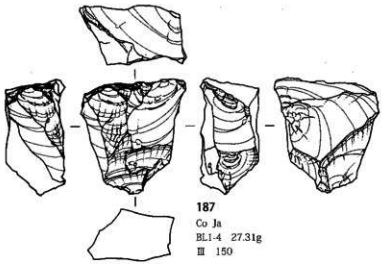
17. 斧形石器（第139～142図・報告番号212～219）

７点の斧形石器が出土している。石材は６点が蛇紋岩で、１点が凝灰岩である。調査区内から出土した蛇紋岩製の石器は39点存在する。蛇紋岩で他の器種を製作する例がないことから、これらはすべて斧形石器に関連するものと思われる。ただし、数量が少なく、母岩に戻るような接合がないことから、原石からの一次的な製作の痕跡はないと判断できる。したがって、蛇紋岩製の剥片、砕片は斧形石器の再加工時に剥離されたものと考えられる。

212は蛇紋岩製の斧形石器の基部で、９点が接合したものである。接合資料番号は156である。接合した資料の他に、明らかに同一個体の剥片、砕片類が18点存在する。長さ18cm前後の大形の斧形石器を再加工した痕跡がある。212aは折れた基部側で、折れた後の加工が認められないことから廃棄された可能性がある。刃部側の接合は調整剥片のみで、礫面が残る背面側の主体部は出土しなかったことから、製品として持ち出されたのであろうか。背面の礫面がみられるが、一般的な礫面ではなく、光沢をもった剥離面のような礫面である。研磨面は腹面刃部側のみであるが、背面の刃部付近は出土していない。研磨方向は石器主軸から若干左に傾いた方向で揃っている。

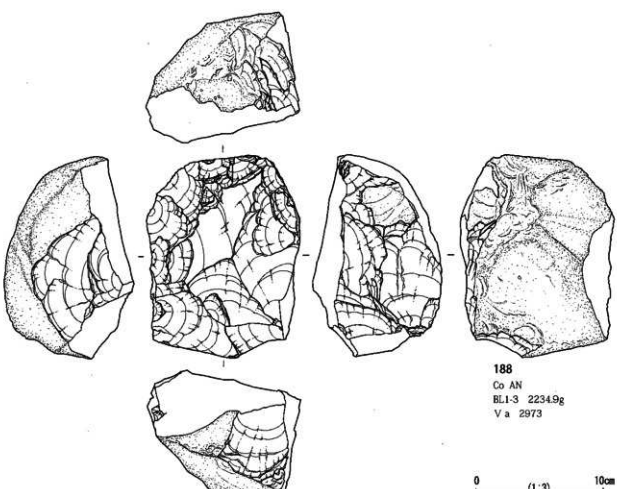
213は背面全面が礫面の蛇紋岩の剥片を素材としている。素材打面を右側縁に置かれるが、加工により除去されている。素材末端方向から１回の反方向の大きく平坦な剥離を施した後に、左右側縁に小さくやや切り立った正反方向の剥離を施している。背面の大部分が滑らかな礫面となっているが、この礫面を利用して、刃部付近にのみ研磨を施している。刃部端付近は石器主軸に平行する線条痕が確認できるが、刃部から遠ざかるにつれ線条痕が弱くなるため、礫面との境界が不明瞭である。腹面の研磨は刃部付近のみで、剥離の稜線などの凸部は内面まで研磨面が形成されている。研磨方向は石器主軸にほぼ平行する。平面形は刃部が最も幅が狭くなっており、基部は右側が節理面で欠損している。横断面形は凸レンズ状を呈する。

214は背面全面が礫面の蛇紋岩の剥片を素材としている。素材打面は右側縁に置かれるが、加工により除去されている。腹面は素材の主要剥離面が大部分を占めるが、尖端と基部方向からの２枚の平坦な



187
Co Ja
BL1-4　27.31g
Ⅲ　150

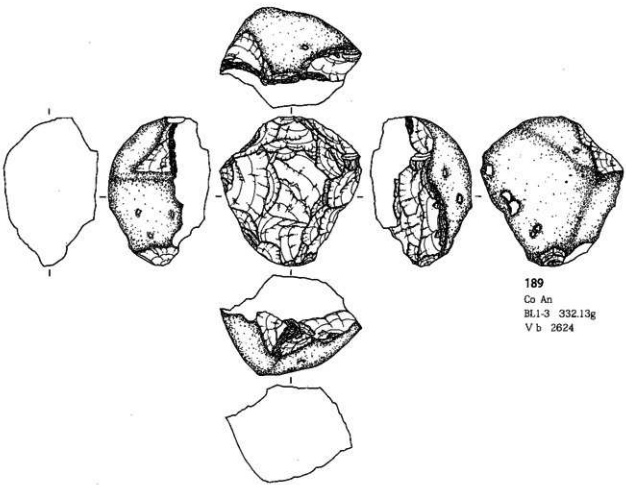
0　(3:4)　5cm

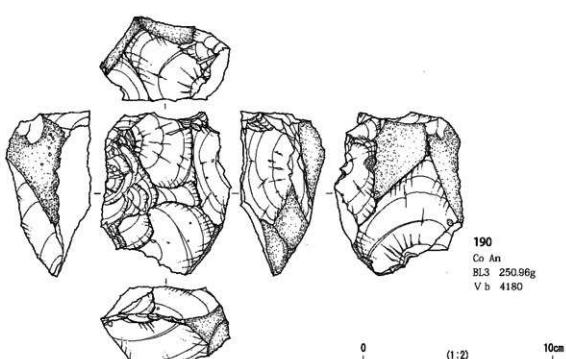


188
Co AN
BL1-3　2234.9g
Ⅴa　2973

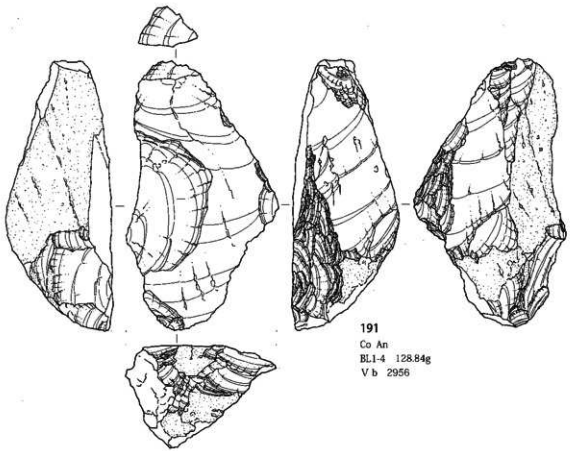
0　(1:3)　10cm

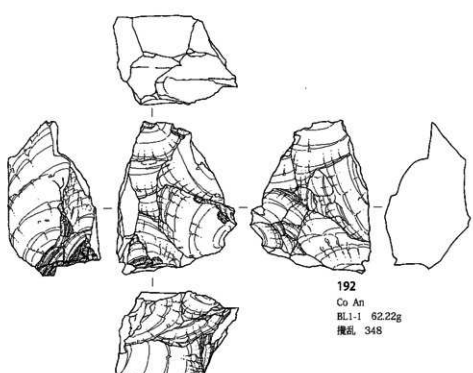
第 131 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 28（石核 2）



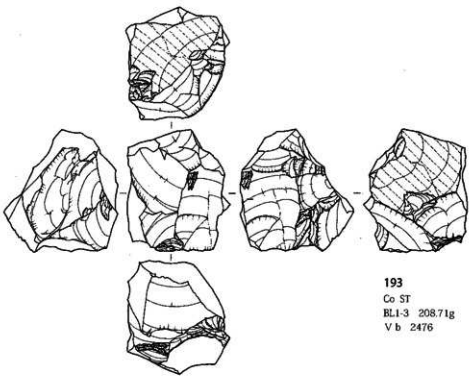


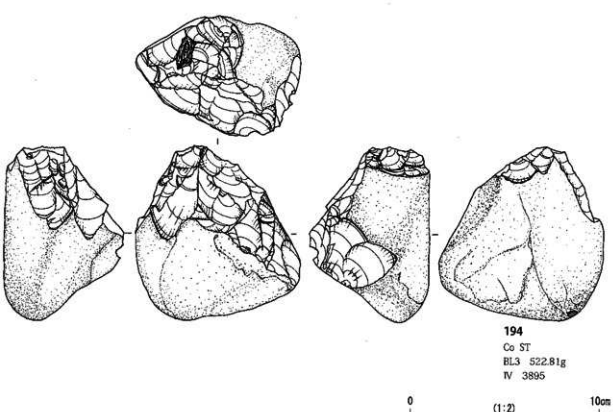
第 132 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 29（石核３）



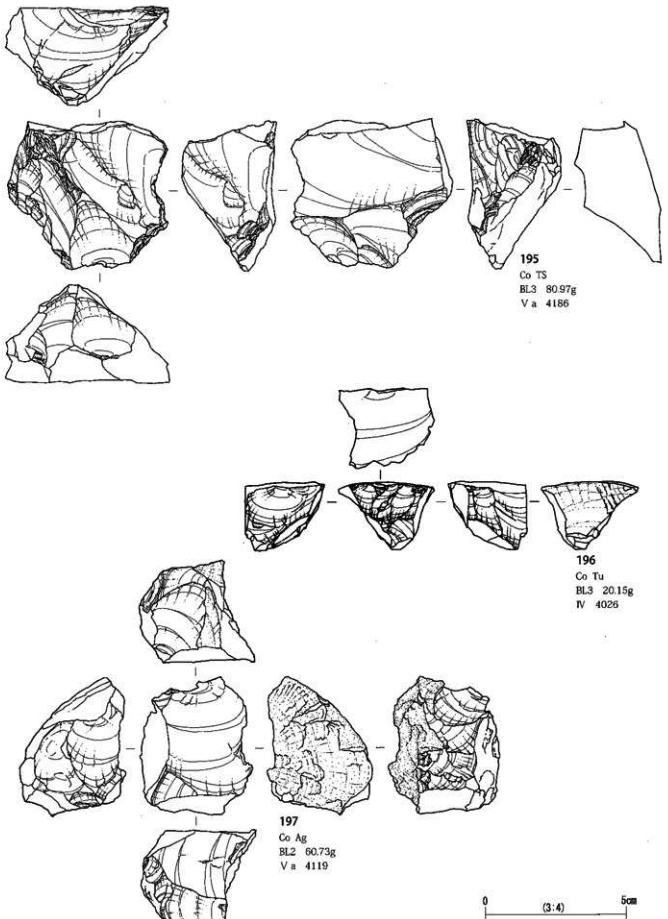


第133図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図30（石核4）

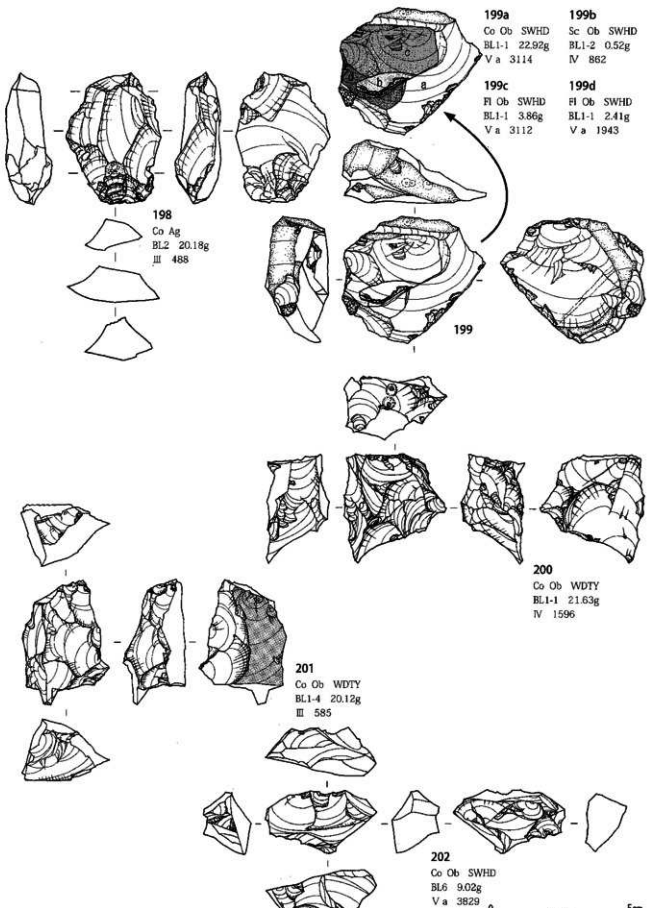




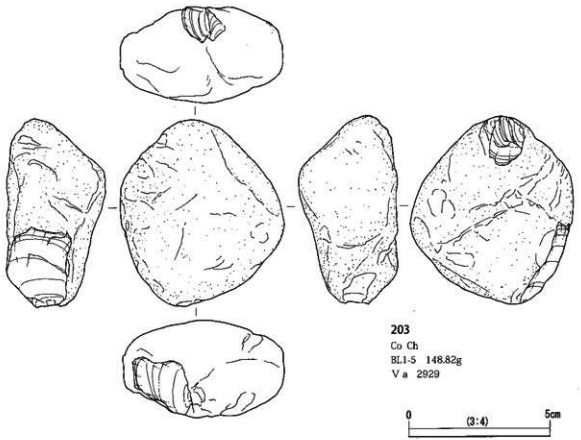
第 134 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 31（石核 5）

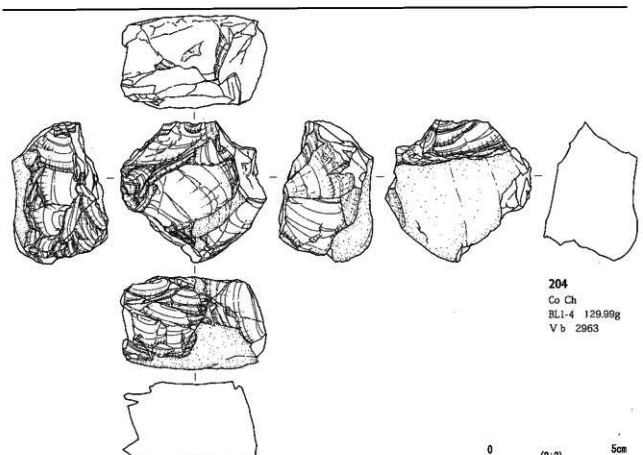


第135図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図32（石核6）

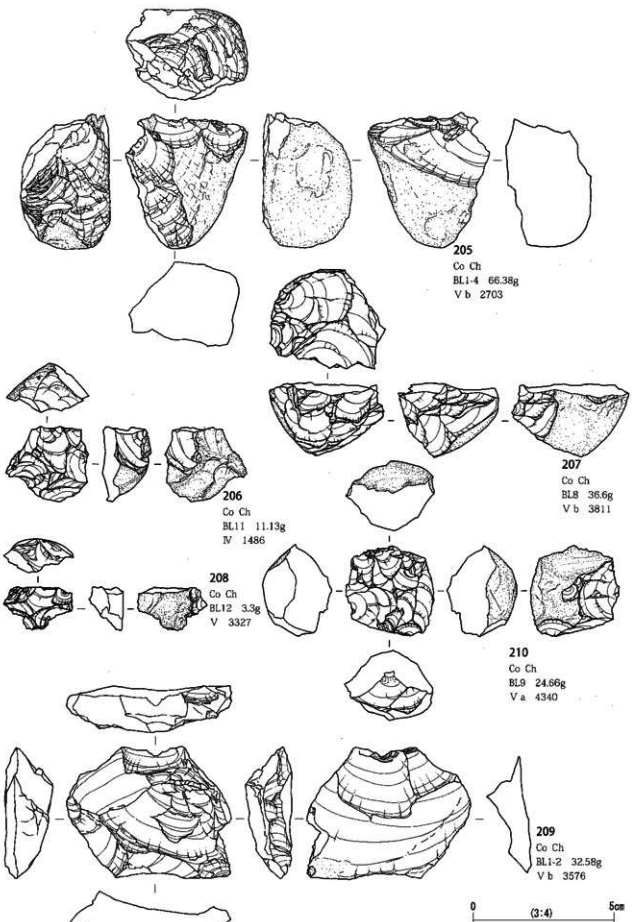


第 136 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 33（石核 7）

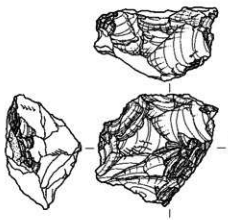




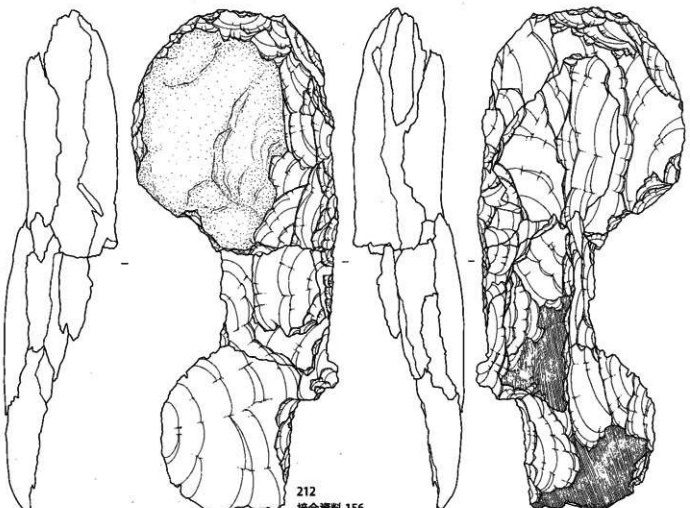
第 137 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 34（石核 8）



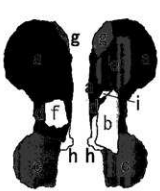
第 138 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 35（石核 9）



211
Co Ch
BL2　31.47g
V b　2839



212
接合資料 156



212a
Ax Sc
BL1-1　196.16g
V b　3125

212b
AF Se
BL1-1　18.65g
V a　2354

212c
AF Se
BL1-1　34.03g
V a　2262

212d
Ax 破 Se
BL1-1　43.87g
V a　2125

212e
Fl Se
BL1-1　32.1g
V a　2146

212f
Fl Se
BL1-1　7.01g
Ⅳ　1545

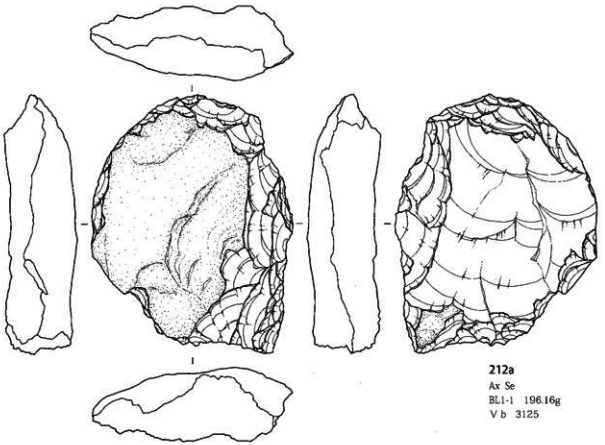
212g
Fl Se
BL1-1　6.04g
V a　1604

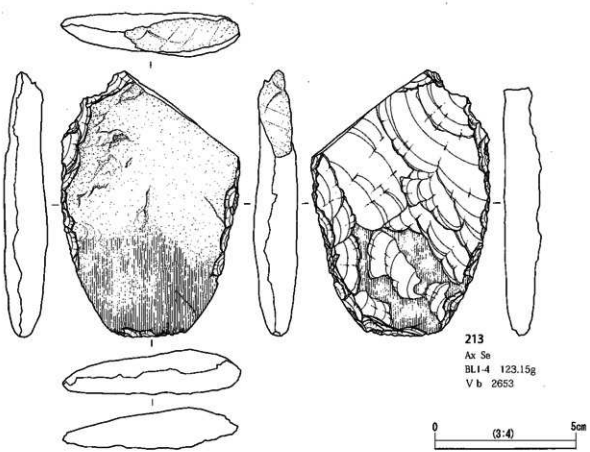
212h
Fl Se
BL1-1　5.58g
V a　3218

212i
Fl Se
BL1-1　0.97g
V a　2130

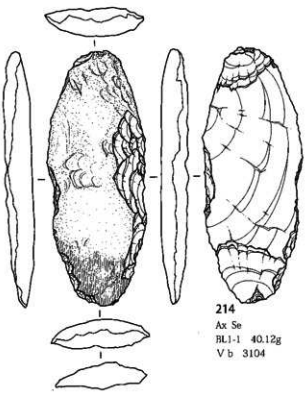
0　(3:4)　5cm

第 139 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 36（石核 10・斧形石器 1）

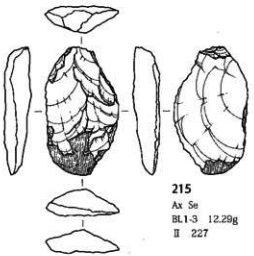




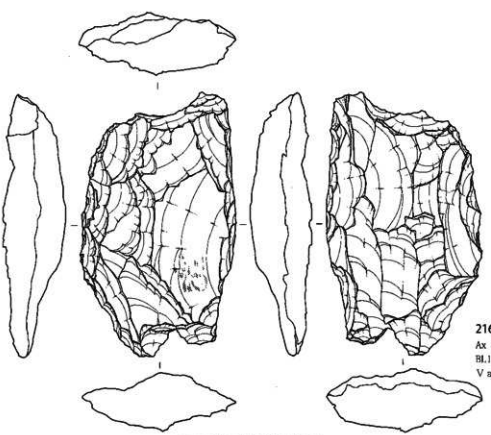
第140図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図37（斧形石器2）



214
Ax Se
BL1-1　40.12g
V b　3104



215
Ax Se
BL1-3　12.29g
Ⅱ　227



216
Ax Se
BL1 I　115.4g
V a　3690

※アミは方向不明の研磨面を示す。

0　(3:4)　5cm

第 141 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 38（斧形イ器 3）

剝離がみられる。右側縁は正方向の平坦剝離が、左側縁は正反方向の微細剝離が施されているが、加工度は低い。研磨は背面刃部付近にのみ施され、研磨方向は石器主軸にほぼ平行する。平面形は最大幅がほぼ中央で、刃部と基部が丸い、細長いわらじ形を呈し、横断面形は凸レンズ状を呈する。

215は蛇紋岩の剝片を素材としているが、礫面はみられない。素材打面は左側縁に置かれるが、線状の打面のため面としては残っていない。側縁にはわずかに微細な剝離がみられる。刃部の表裏には研磨が施され、研磨方向は石器主軸にほぼ平行する。平面形は最大幅がほぼ中央に位置し、左側縁より右側縁の張りが大きく、刃部は丸い。横断面形は凸レンズ状を呈す。

216は蛇紋岩の剝片を素材としているようで、礫面はみられない。背面にわずかに研磨痕が残されるが、主要研磨部である刃部が欠損している。基部も欠損しているが、平面形は胴張りのわらじ形を呈すると思われる。

217は蛇紋岩製の斧形石器の刃部である。基部側が大きく欠損しており、刃部端も失われている。背面に礫面および研磨面がみられる。

218は唯一凝灰岩製の斧形石器の基部と思われる。石材が例外的で、基部のみで全体形状もわからないことから斧形石器ではない可能性もある。

219は研磨面および礫面を有する斧形石器の剝片である。再加工時に剝離されたものであろうか。

18. 敲石（第143～145図・報告番号220～227）

10点の敲石が出土している。8点が砂岩製である。

220は大形で扁平な棒状の敲石で、やや粗い砂岩製である。上下端に敲打痕が残されている。また、側面にも部分的に敲打痕がみられる。図の表面は非常に滑らかで平坦であり磨られた可能性が高いと思われるが、決定的ではない。

221は大形棒状の敲石で砂岩製。

222と223は大形でやや扁平な棒状敲石で、砂岩製である。上下端部に敲打痕がみられる。側縁にも敲打痕がみられ、特に222の左側縁は敲打による面が形成されている。この敲打面は縄文時代の押型文土器に伴う特殊磨石の磨面に似ているが、磨痕はまったくない。また、背部および腹部中央に線状敲打痕が集中する部位がみられる。

224は扁平で楕円形の敲石で、砂岩製である。上下端部に敲打痕がみられることから敲石としたが、腹部と背部中央には線状敲打痕が集中して、凹んでいることから凹石との理解も可能である。

225は扁平で楕円形の敲石で砂岩製である。明瞭な敲打痕は少ない。

226および227は礫面の平坦面中に虫が這った跡のような線状の敲打痕が集中してみられる。敲打部ではないが剝離の痕跡がみられる。

19. その他の礫石器（第146図・報告番号228～230）

その他の礫石器には磨石、台石、礫器がある。

228は台石である。敲打痕や磨痕など明瞭な人為的痕跡はみられないが、大形でまな板のような形状で、礫面があきらかな河川礫状を呈していたため、人為的に遺跡に持ち込まれたと認識し、台石とした。

229は磨石である。こぶしに収まる大きさの円礫を素材としている。

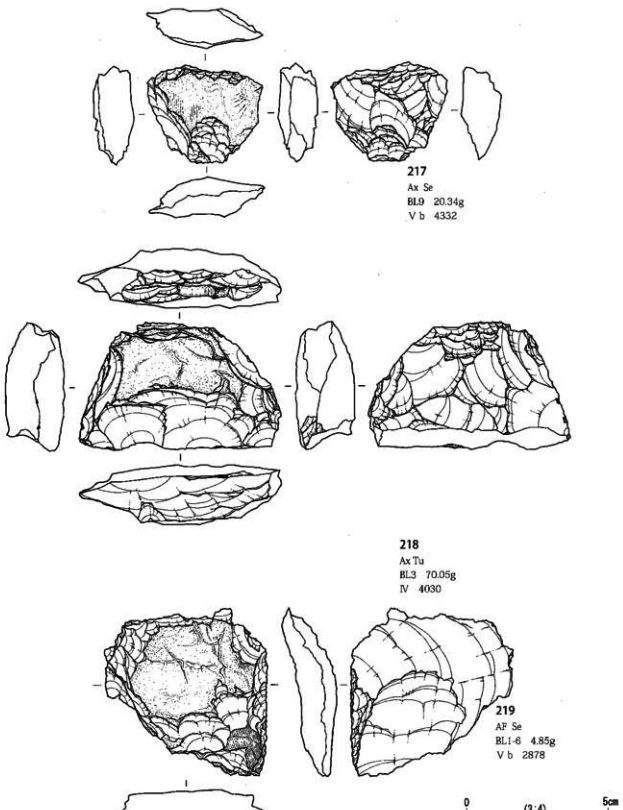
230は礫器としたもので、玄武岩の円礫の折れ面より数回の剝離を行っている。

20. その他の石器（第146図・報告番号231～235）

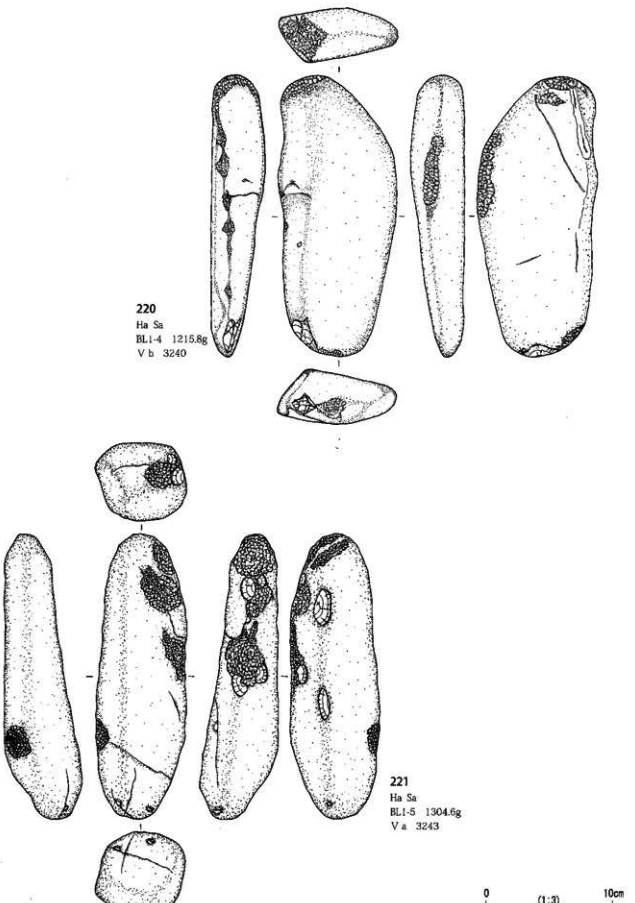
その他に、槍先形尖頭器1点（234）、細石刃3点（232～233・細石刃破片1点含む）があるが、明らかに主体となるナイフ形石器石器群より新しい時期に属するもので、縄文時代の石器の可能性もある。単独で入り込んだものと思われる。

註1：時代が確定できないため、各種組成表に含まれない

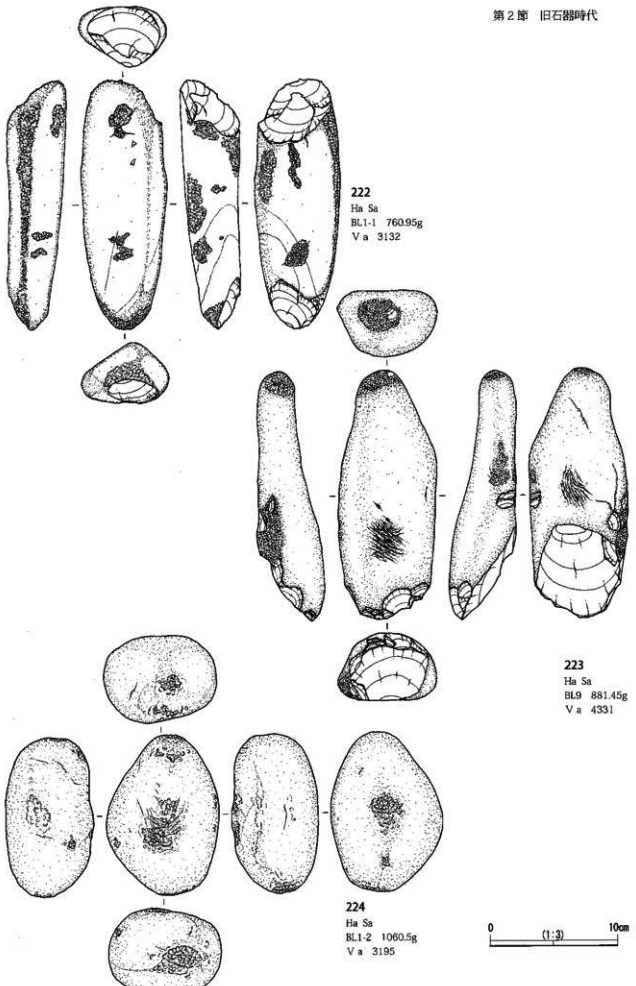
235は黒曜石の産地が秋出県の男鹿金ヶ崎群推定された2次加工のある剥片である[※1]。下段調査区Ⅰ層一括遺物だが、形態的に旧石器時代の可能性が高いと思われる。



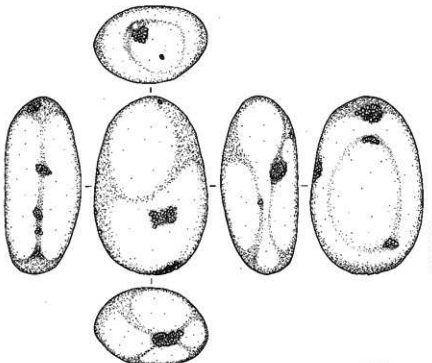
第142図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図39（斧形石器4）



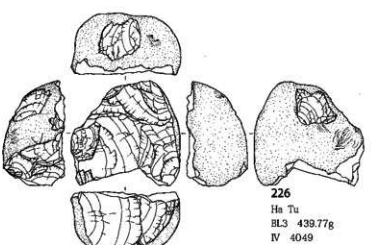
第143図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図40（敲石1）



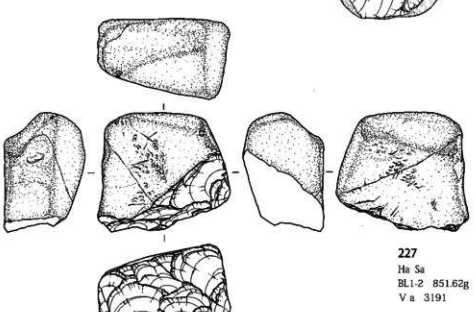
第 144 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 41（敲石 2）



225
Ha Sa
BL1-3　1101.2g
V b　3226



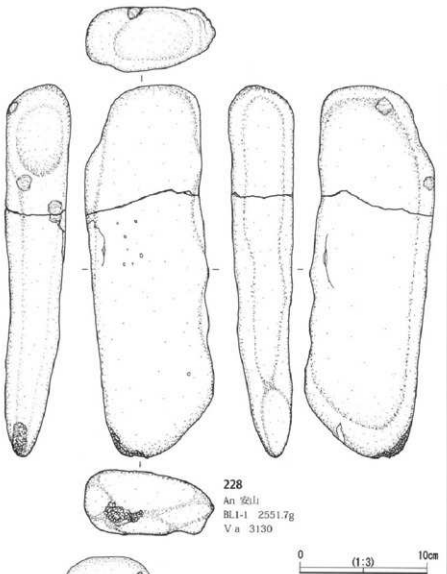
226
Ha Tu
BL3　439.77g
Ⅳ　4049



227
Ha Sa
BL1-2　851.62g
V a　3191

0　(1:3)　10cm

第 145 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 42（敲石 3）



228
An 安山
BL1-1 2551.7g
V a 3130

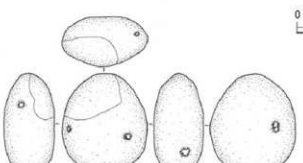
0 (1:3) 10cm

231
MB Ob SWHD
BL1-5 1.11g
II 133

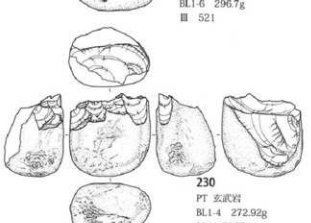
232
MB Ob WDTY
BL1-3 0.91g
III 624

233a
MB礫 Ob WDTY
BL1-4 0.31g
III 182

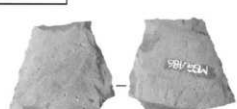
233b
MB Ob WDTY
BL1-5 0.41g
II 109



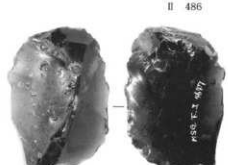
229
GS 安山岩
BL1-6 296.7g
III 521



230
PT 玄武岩
BL1-4 272.92g
V a 2967



234
Po An
BL1-1 12.26g
II 486



235
RF Ob OGKS
頁岩 33.38g
I 4647

0 (3:4) 5cm

第 146 図　照月台遺跡旧石器時代石器実測図 43（台石・磨石・礫器・細石刃他）

(2) 個体別資料

個体分類は砕片と敲石等の礫石器以外のすべての器種 3506 点を対象として行った[註1]。個体分類の基準について添付 CD-ROM 中の ¥ 照月台遺跡 ¥EXCEL¥ 照月台個体分類基準表 .XLS ファイルに示した。また、個々の石器の個体番号は ¥ 照月台遺跡 ¥EXCEL¥ 照月台旧石器時代石器属性表 .XLS ファイル中の個体番号列に示した。

3,450 点が 412 種の個体に分類された。3,450 点からはずれた 56 点は焼けや風化が原因で個体分類ができず、個体番号が 9999 となっている。第 1 章第 4 節の方法を原則として個体番号を付したが、作業手順上ごく一部に 1000 未満の番号でも 1 点しかないもの、1001 以上の番号でも複数あるものが存在する。また、黒曜石で産地推定が可能だったが、風化が激しく個体分類ができなかったものを 9001 とした。

黒曜石については産地推定後に個体分類を行ったため、産地単位で分類した。そのため、異なる産地で同一の個体番号がないのが原則となっている。ただし、異なる産地同士で接合した資料も含まれるため、同一個体番号中に複数の産地が存在する。

複数遺物を有する個体別のブロック分布状況について、添付 CD-ROM 中の ¥ 照月台遺跡 ¥EXCEL¥ 照月台個体別ブロック分布状況 .XLS ファイルに示した。各個体にはある程度のまとまりが捉えられる。しかし、明らかな空間的まとまりは見出せず、全体的には拡散しているといえようか。

(3) 接合資料

1. 接合資料の分布

接合作業を行った結果、156 組 320 点の石器が接合した。接合資料の分布を第 147 図に示す。

BL1 - 1 ～ BL1 - 4 の接合線の密度が高い。同範囲には弧状に遺物密度が高い部分が存在するが、それと平行する接合線が多くみられる。このようなあり方は環状ブロック群的である。今回の調査区幅では断定することはできないが、これらが環状ブロック群の一部である可能性を考えておく必要はあろう。

2. 接合資料

2 点の接合が多いが、最多で 16 点接合した資料がある。しかし、原石形状まで復元できるものや、剥片剥離工程を表す良好な資料は少なかった。接合した石器に付された接合番号は ¥ 照月台遺跡 ¥EXCEL¥ 照月台旧石器時代石器属性表 .XLS ファイル中の接合番号列に示した。

主な接合資料を抽出し以下に記述する。

接合資料 1（第 148 図）

諏訪星ヶ台群の黒曜石の接合資料である。剥片素材の石核より削器を含む 3 点が剥離されている。剥片の切り立った側縁を打面、剥片の腹面を作業面として貝殻状剥片を剥離している。

接合資料 2（第 148 図）

諏訪星ヶ台群の黒曜石の接合資料である。中～大形の貝殻状剥片 7 点の接合資料である。その内大形の剥片は石核として利用され、9 点の剥片が剥離されている。これら剥片と石核の素材と同じに剥離された剥片との法量の差はほとんどなく、共に楔形石器や貝殻状刃器として利用されている。

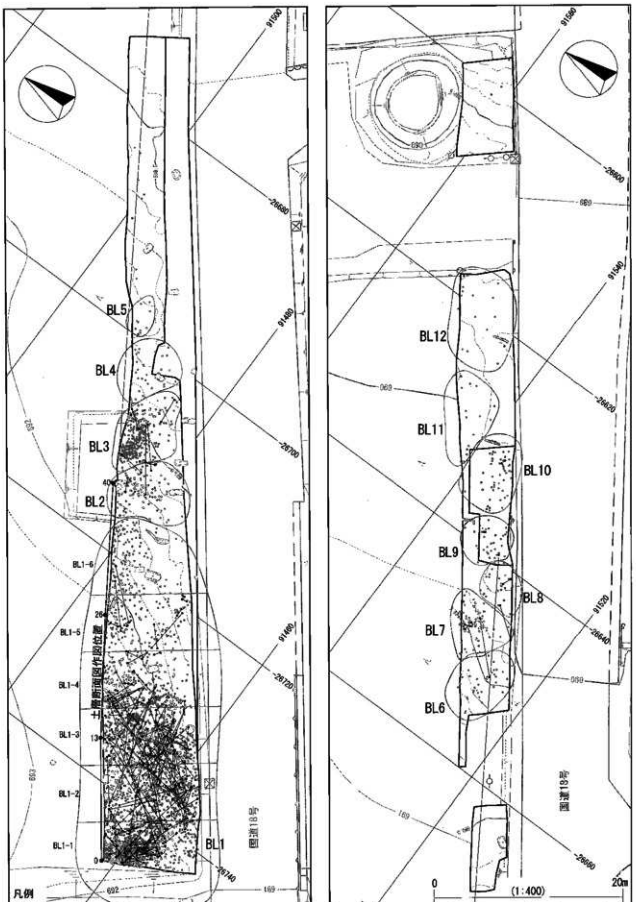
接合資料 16（第 148 図）

和田鷹山群の赤味を帯びた黒曜石の接合資料である。作業面が表面にほぼ固定され、側縁を打面として貝殻状剥片が剥離されている。

接合資料 24（第 148 図）

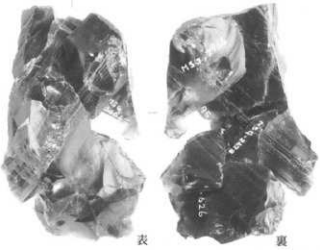
蓼科冷山群の黒曜石の接合資料である。稜上調整が施されている石刃を 3 つに折り取り、2 点を彫器として利用している。

註 1：作業上の都合で数点の例外あり。

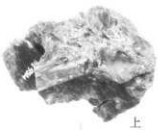


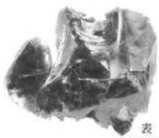
第 147 図　照月台遺跡接合資料分布図

接合資料 1



接合資料 2





接合資料 16

接合資料 24

0　(3:4)　5cm

接合資料 1

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	861	Sc	Ob	2	BL1-2	Ⅳ一括	0.52	199b	SWHD	上	表
2	3112	Fl	Ob	2	BL1-1	Ⅴa	3.86	199c	SWHD	上	表
3	1943	Fl	Ob	2	BL1-1	Ⅴa	2.41	199d	SWHD	上	表
4	3114	Co	Ob	2	BL1-1	Ⅴa	22.92	199a	SWHD		

接合資料 2

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	3627	Fl	Ob	2	BL1-3	Ⅴb	2.13		SWHD	右	表
2	3567	Fl	Ob	2	BL1-2	Ⅴb	0.79		SWHD	下	表
3	242	SB	Ob	2	BL1-3	Ⅲ	3.15		SWHD	裏	表
4	1719	SB	Ob	2	BL1-3	Ⅳ一括	0.82		SWHD	裏	表
5	626	ES	Ob	2	BL1-3	Ⅲ	10.3	87	SWHD	左	裏
6	3258	RF	Ob	2	BL1-2	Ⅴb	2.14		SWHD	下	表
7	1745	UF	Ob	2	BL1-2	Ⅴa	2.3		SWHD	左	裏
8	3868	RF	Ob	2	BL1-3	Ⅴa	1.33		SWHD	左	裏
9	2478	Pe	Ob	2	BL1-3	Ⅴa	3.44		SWHD	左	裏
10	735	Fl	Ob	2	BL1-2	Ⅳ一括	0.99		SWHD	左	裏
11	3636	Co	Ob	2	BL1-3	Ⅴb	10.56		SWHD	左	表
12	738	Pe	Ob	2	BL1-2	攪乱	2.79		SWHD	左	表
13	236	UF	Ob	2	BL1-3	Ⅲ	10.98		SWHD	上	表
14	3375	SB	Ob	2	BL1-3	Ⅴb	18.6		SWHD	右	表
15	2966	SB	Ob	2	BL1-3	Ⅴb	6.84		SWHD	上	表
16	3664	Fl	Ob	2	BL1-4	Ⅴb	1.08		SWHD	右	表

接合資料 16

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	1571	Fl	Ob	40	BL1-1	Ⅴa	2.88		WDTY	上	正
2	831	Fl	Ob	40	BL1-1	Ⅳ一括	2.98		WDTY	右	裏
3	2349	Fl	Ob	40	BL1-1	Ⅴa	3.38		WDTY	左	表
4	3488	Co	Ob	40	BL1-1	Ⅴb	34.3		WDTY		

接合資料 24

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	2756	Fl	Ob	76	BL1-5	Ⅴa	0.21		TSTY	上	表
2	1430	Gr	Ob	76	BL1-4	Ⅳ一括	2.94		TSTY	上	表
3	607	Fl	Ob	76	BL1-4	Ⅳ一括	0.2		TSTY	上	左
4	1426	Gr	Ob	76	BL1-4	Ⅳ一括	4.53		TSTY	上	表
5	2757	Bl	Ob	76	BL1-4	Ⅴa	5.04	183	TSTY	上	表

第 148 図　照月台遺跡の石器接合資料 1

接合資料31（第149図）

チャートの接合資料である。鶏卵大の円礫から両極打撃による剥離を行っている。そのため、ネガ状のバルブや平坦な剥離面がみられ、上下に打点が残る剥片もある。したがって、イレギュラーな剥離が多く、同時に複数剥離される場合も十分考えられることから、便宜的に設定した剥離順序はあまり意味をもたない。薄手の貝殻状剥片が剥離されている。

接合資料36（第149図）

チャートの接合資料である。鶏卵大の円礫から両極打撃による剥離を行っている。接合資料31同様、割れ方は不規則である。

接合資料40（第150図）

流紋岩質で白色の珪質凝灰岩の接合資料である。接合資料31・36と異なり、打面作業面が固定されている。接合したのはすべて剥片で、同一の打面・作業面から貝殻状剥片が剥離されている。

接合資料82（第151図）

無斑晶質安山岩の削器と微細剥離のある剥片の接合である。頻繁に90°単位の打面、作業面の単位を繰り返して貝殻状剥片を剥離している。

接合資料89（第150図）

凝灰岩の接合資料である。表面に開始部に潰れが目立つ剥離が多数みられる。これらの剥離は報告番号218の斧形石器に共通している。

接合資料124（第150図）

無斑晶質安山岩の接合資料である。扁平な亜円礫から横長剥片を剥離している。

接合資料131（第151図）

無斑晶質安山岩の接合資料である。大形の石核から大形の剥片が複数剥離されている。表面に作業面が固定され、上下左右を打面として剥離が行われている。

(4) 剥片剥離技術

検出された石器群にみられる剥片剥離技術の特徴は以下の3者に大別できる。

1つは石刃を代表とする縦長剥片剥離である。石刃石核がほとんどなく、石刃および縦長剥片の接合資料が得られなかったことから、調査区内での剥離の痕跡はみられない。そのため、他の場所で製作されたものが持ち込まれていると考えられる。石刃には打面調整、頭部調整、稜上調整が認められる。石材は黒曜石が多く、特に和田土屋橋西・南群の産地が主体となっている。

2つめは貝殻状剥片剥離である。貝殻状剥片は形状・大きさとも様々で、目的形状の規制が低い。石核にも、大形剥片を素材として、作業面を素材の背面あるいは腹面の広い面に固定する板状石核、90°単位の打面作業面転移を繰り返すサイコロ状の石核、打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングトゥール状の石核の3者が存在する。これら3者の石核も剥離が進み小形化すると、みなサイコロ状になる。貝殻状剥片を素材とする石器には台形石器、貝殻状刃器や削器類があるが、調査区内で製作されているのは、貝殻状刃器、および削器類である。

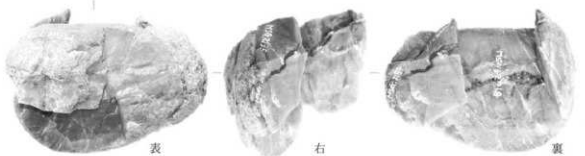
3つ目は鶏卵大のチャートの円礫から両極打撃により、楔状の剥片および楔形石器の剥離である。両極で剥離が進むため、剥片の形状は多様である。とにかく打ち割って使えるものだけを使用するといった印象を与えさせられる。遺跡内で最も多く残される剥離の痕跡である。

接合資料 31

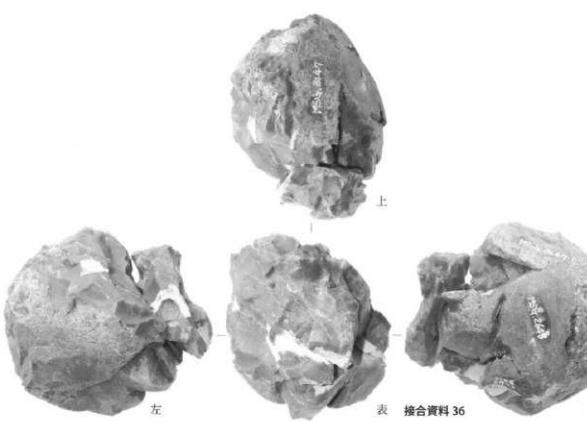
剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	2707	Fl	Ch	202	BL1-4	Ⅴb	17.26		左	表
2	2718	Fl	Ch	202	BL1-4	Ⅴa	23.79		左	表
3	2683	Fl	Ch	202	BL1-3	Ⅴa	13.17		表	左
4	1144	Fl	Ch	202	BL1-1	Ⅳ一括	5.42		下	表
5	2151	Ch	Ch	202	BL1-1	Ⅴa	0.67		下	表
6	2135	Pe	Ch	202	BL1-1	Ⅴa	9.16		下	表

接合資料 36

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	2642	Fl	Ch	206	BL1-3	Ⅴa	8.95		上	表
2	2657	Fl	Ch	206	BL1-3	Ⅴa	12.42		下	表
3	1709	Fl	Ch	206	BL1-2	Ⅴa	6.13		表	左
4	1280	Fl	Ch	206	BL1-2	Ⅳ一括	2.87		表	左
5	2648	Fl	Ch	206	BL1-3	Ⅴa	12.81		表	左
6	1291	Fl	Ch	206	BL1-2	Ⅳ一括	2.55		表	左
7	2773	Fl	Ch	206	BL1-2	Ⅴa	3.17		表	左
8	2447	Co	Ch	206	BL1-2	Ⅴa	168.89			



接合資料 31



第 149 図　照月台遺跡の石器接合資料２

接合資料 40

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	1687	Fl	Ch	212	BL1-3	Va	12.09		上	表
2	765	Fl	Ch	212	BL1-2	攪乱	12		上	表
3	2213	Fl	Ch	212	BL1-2	Va	16.18		上	表
4	1782	Fl	Ch	212	BL1-3	Ⅳ一括	3.91		上	表
5	1326	Fl	Ch	212	BL1-2	Ⅳ一括	1.37		上	表
6	2259	Fl	Ch	212	BL1-1	Vb	1.93		上	表
7	2383	Fl	Ch	212	BL1-3	Va	8.7		上	表
8	1688	Fl	Ch	212	BL1-3	Va	5.7		上	表

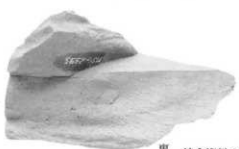
上

接合資料 89

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	2251	Fl	Tu	441	BL1-1	Va	72.36		上	表
2	2395	Fl	Tu	441	BL1-3	Va	16.81		表	上

下　**接合資料 40**

表



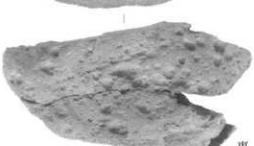
裏　**接合資料 89**

接合資料 124

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	1246	Fl	An	307	BL1-2	攪乱	76.62		上	表
2	1760	Fl	An	307	BL1-2	Ⅳ一括	13.86		表	上
3	2477	Fl	An	307	BL1-3	Vb	60.64			

上

表



裏

接合資料 124

第 150 図　照月台遺跡の石器接合資料 3

接合資料 82

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	2455	Fl	ST	401	BL1-2	V b	5.9		右	表
2	2714	Fl	ST	401	BL1-4	V b	54.09		上	表
3	2474	Fl	ST	401	BL1-3	V a	18.73		右	表
4	2609	Fl	ST	401	BL1-3	V a	20.76		左	下
5	4104	Fl	ST	401	BL1-3	V a	7.04		左	下
6	2476	Co	ST	401	BL1-3	V b	208.71	193		

接合資料 131

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	打面	作業面
1	2416	Fl	An	322	BL1-3	V a	78.77		上	表
2	2497	Fl	An	322	BL1-2	V a	45.82		上	表
3	2973	Co	An	322	BL1-3	V a	2234.9	188		

第 151 図　照月台遺跡の石器接合資料 4

第3節　縄文時代

1　縄文時代の概要

(1) 遺物の分布

縄文土器は上段調査区と下段調査区の両方に分布する。下段調査区はトレンチ調査のみで、面的調査が行われていないが、縄文時代前期を中心とする土器が複数個体出土している。

上段調査区では面的調査が行われ、多くはないが点で取り上げられている。1個体が潰れて出土する事例はなく、いずれも破片が単体で分布する。第152図に上段調査区の文様別の土器片と、遺構の分布図を示した。土器分布域は上段調査区の南西側に偏るが密度は低い。また、陥し穴も大部分が同一空間に分布している。文様別に分布域が分かれることはなく入り乱れて存在する。

文様分類とそれぞれの分布の特色を以下に記す。

1. 押型文土器

押型文土器でも新しい時期の楕円文が中心となる。

2. 無文土器

尖底の無文土器が主体となる。

3. 沈線文土器

只殻を用いた沈線文土器である。

4. 条痕文土器

早期後半の厚手で尖底の繊維を多く含む土器である。数量的には最も多いが、集中することはない。

5. 縄文土器

前期の竹管文土器や、羽状縄文土器が主体となるが、わずかに表裏縄文土器も混じる。

(2) 遺物の出土層位

ほとんどがⅡ層からⅢ層の間で出土している。文様による層位差はほとんどない。

2　縄文時代の遺構

陥し穴33基、集石2基が検出されたが、住居跡などはなかった。

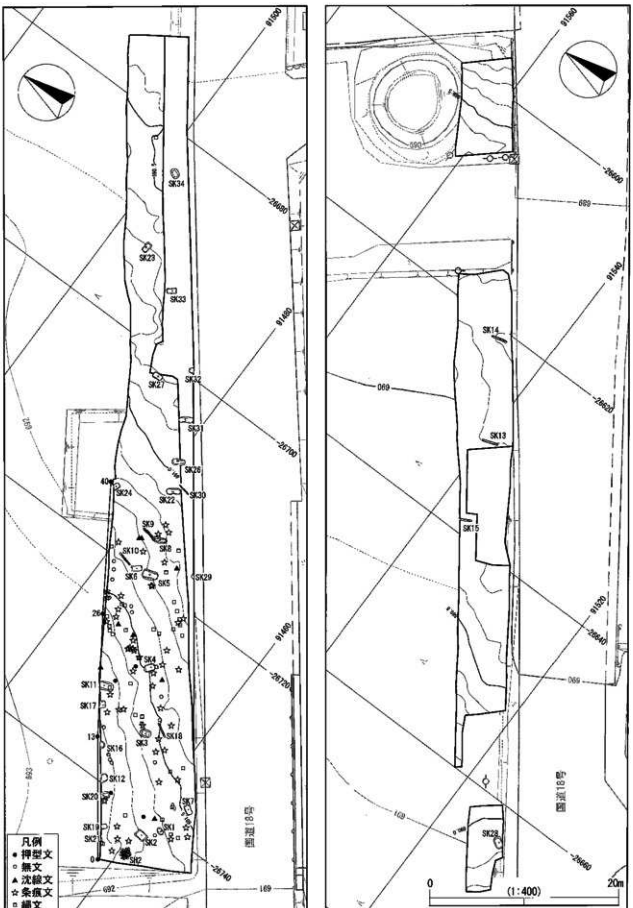
(1) 土坑（第153図）

陥し穴から共伴が明確な遺物が出土しないことから、時期を決定できない。遺跡内および周囲の縄文時代の遺跡の時期から、草創期末から前期の間に入る可能性が高い。

33基の陥し穴を4形態に分類した。なお、都合上、図化は各形態の代表的なもののみとする。また、断面については、第74図の調査区壁の断面図中を参照していただきたい。いずれも自然埋没と考えられる。

1. 第1形態

SK2～4・6・7・12・17・20・23・24・27・28・32～34の15基が該当する。検出面での大きさは長軸120cm・短軸80cm前後、底部が長軸100cm・短軸75cm前後、検出面からの掘りこみは80cm前後の規模をもつ。底部の平面形状は長方形あるいは隅丸長方形を呈し、中央に1ヶ所の逆茂木痕がみられる。等高線に平行して、複数列の配列をなすようだが、やや不規則であり、複数時期が混在している可能性がある。



※調査区内の等高線はVa層上面で測定したものだが、縄文時代でも大差はないと思われる。
第 152 図　照月台遺跡縄文時代遺構・遺物分布図

2. 第2形態

SK5・8・11・22・26・31の6基が該当する。検出面で長軸160cm・短軸70cm前後、底部で長軸140cm・短軸40cm前後で、検出面からの深さが70cm前後の規模をもつ。底部平面形は細長い楕円形を呈し、長軸がややくびれるものが含まれる。底部中央には1ヶ所の逆茂木がみられる。等高線とは斜め軸に1列に配列しており、同時性が高い。SK8は第3形態のSK9に切られていることから、第3形態より古いと思われる。

3. 第3形態

SK9・10・13～15・30の6基が該当する。検出面で長軸170cm・短軸15cm前後と非常に細長く、底部は「V」字状を呈す。検出面からの深さ70cm前後で、底部に逆茂木はない。長軸は等高線にほぼ平行し、等高線と直交軸に2列の配列がみられる。規則的な配列からその同時性は高いと思われる。前記したように切り合い関係から、第2形態より新しい時期に構築されたと思われる。

4. 第4形態

SK1・16の2基が該当する。検出面で長軸85cm・短軸55cm前後、底部で長軸65cm・短軸40cm前後で、検出面の深さが、80cm前後の規模をもつ。底部は楕円形を呈し、底部中央に1ヶ所の逆茂木をもつ。第1形態より平面的に小規模になるものを本形態としたが、数も少ないことから、第1形態に含まれる可能性も考えられる。

(2) 集石（第154図）

1.SH1

X=91437.5,Y=-26781付近を中心として、直径約45cmの円形状の広がりをもつ。礫の重なる厚みは約11cmで、礫上面は北側に緩やかに傾斜する。下段調査区第2トレンチに位置しており、周囲に遺構はない。共伴する遺物がないため時期決定が難しいが、Ⅲ層で出土していることから縄文時代に属すと思われる。

約30点の扁平な角礫で構成され、多くに焼けと思われる赤化がみられた。掘り込み等の施設は検出されなかった。

2.SH2

X=91459,Y=-26745.5付近を中心として直径約130cmの円形状の広がりをもつ。Ⅱ層下面で検出され、Ⅲ層までの浅い掘りこみがみられるが明瞭ではない。出土層位から縄文時代と判断できるが、共伴遺物がないことから細かい時期はわからない。亜円礫～角礫132点で構成され、多くに焼けと思われる赤化がみられる。上部に現代の立ち木があったため、部分的に動いている礫が含まれる可能性がある。

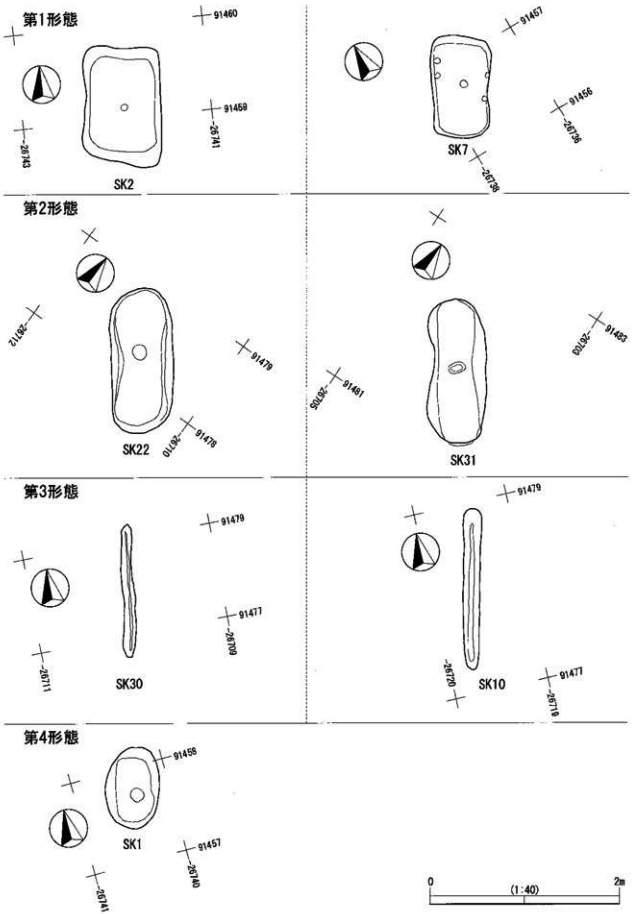
3　縄文時代の遺物

(1) 土器

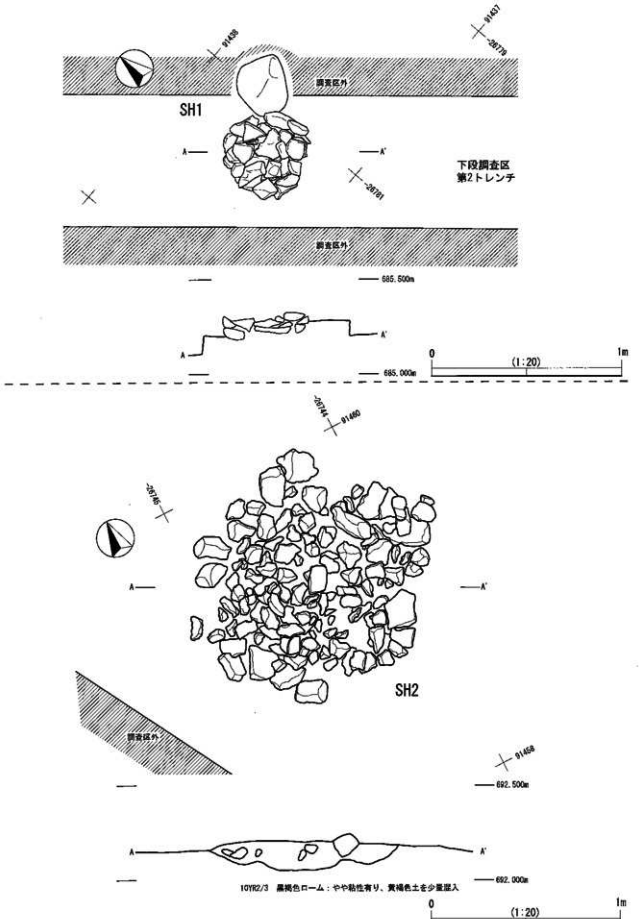
上段調査区から縄文土器が114片が出土した。その内訳は、押型文5片、無文16片、沈線文9片、条痕文49片、縄文35片[註1]となっている。上段調査区から出土した土器片は単点測量を実施し、文様別の分布を第152図に示した。

下段調査区から123片の縄文土器が出土した。その内訳は押型文11片、条痕文20片、竹管文10片、沈線文11片、縄文41片、無文20片、不明4片となっている。下段調査区から出土した縄文土器片は一括で取り上げが行われており、座標値をもたない。

註1：縄文時代前期が主体で、わずかに表裏縄文土器が含まれている。



第 153 図　照月台遺跡縄文時代の土坑



第 154 図　照月台遺跡縄文時代の集石

1. 表裏縄文（第 155 図・報告番号 241 ～ 242）

241 と 242 は表裏縄文土器とした。内面に施文が認められないが、胎土や原体の状況から表裏縄文土器に類するものと判断した。242 の文様は磨耗で読み取れないが、241 は「RL」の単節縄文が用いられている。

胎土には石英および長石が含まれ、繊維はみられない。

2. 押型文（第 155 図・報告番号 245 ～ 246）

243 は山形文が施文されている。横方向の帯状施文の後に縦方向の帯状施文を行っている。また、口唇部は平らに整形され、山形文が施文されている。胎土はやや赤味を帯び、細かい長石や雲母が含まれている。また、細かい繊維も含まれているようだ。

244 と 245 は菱目文が帯状に施文されている。

246 は楕円文が施文されている。楕円が円に近くやや異質である。口唇部にも施文があるが、原体や施文方向がはっきりしない。

3. 沈線文（第 155 図・報告番号 247 ～ 251）

247 と 249 は同一個体であろうか。外面は平行沈線の間に貝殻腹縁が施文され、口縁にも貝殻腹縁がみられる。内外面ともに良く磨かれており、薄く焼きが良い。

248・250・251 は内外面が磨かれているものの、劣化がすすみ表面がざらついている。平行沈線の間に貝殻腹縁が施文される。個体は異なるものであろうか。

4. 無文（第 155 図・報告番号 252）

252 は口径約 13cm と狭く、底部はみつかっていないが、尖底になると思われる。胎土に石英、長石がみられ、繊維は含まれない。

5. 条痕文（第 155 図・報告番号 253 ～ 260）

253 は口縁部である。はっきりしないが、外面に縄文が施文されているようだ。厚手で繊維が多いため条痕文土器に含めた。

254 には補修孔がみられる。

255 は口縁部である。口縁外面には 2 段の刺突がみられる。口縁からやや離れた内面には縦方向の条痕が認められる。

256・257 は外面に細く細かい条痕がみられる。厚手で繊維を多く含む。

258 は内外面に条痕がみられる。256・257 より条痕が粗い。

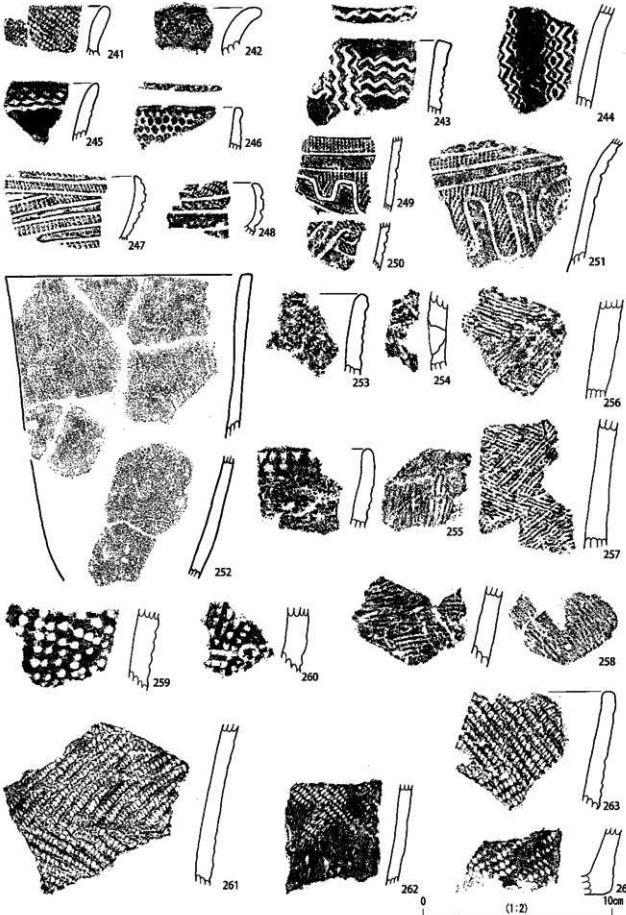
259 は外面に蜂の巣状の刺突が施されている。内面は磨かれている。厚手で胎土に繊維を多く含む。

260 は外面に沈線および、棒状工具による押し引きがみられる。厚手で繊維を多く含む。また、雲母が多く含まれている。

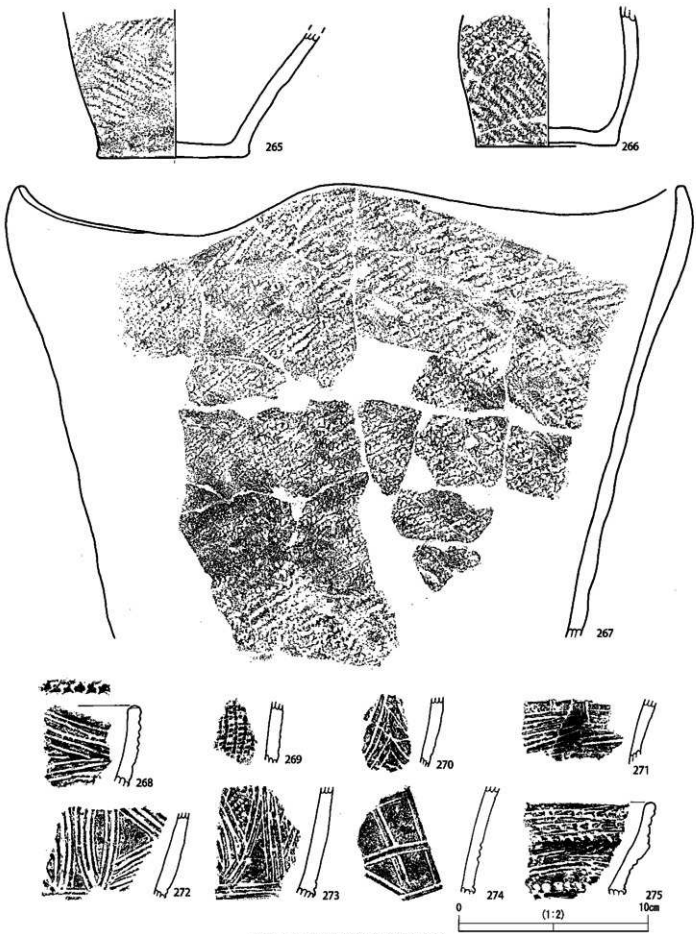
6. 羽状縄文および前期の縄文（第 155 ～ 156 図・報告番号 261 ～ 267）

261・263・265・266 は単節の縄文原体により、羽状の縄文が施文されている。265 と 266 は底部で、底径 7cm 強の大きさである。内面には横方向の擦痕が多数みられる。胎土には輝石や長石がみられ、繊維も含まれる。

267 は下段調査区第 5 トレンチからまとまって出土した。口径約 36cm で、4 単位の波状を呈する。底部は出土しなかったが、同部から口縁にむかって、緩やかに外向し、口縁で内湾する。幅 5cm 前後の単節で「LR」の縄文原体を横方向に施文しているが、段の間隔が空き帯状となる。内面全体に横方向の擦痕が施される。胎土には長石と思われる白色粒が多くみられ、繊維が含まれている。



第155図　照月台遺跡縄文時代土器1



第 156 図　照月台遺跡縄文時代土器 2

7. 竹管文（第156図・報告番号268～275）

268は波状口縁の破片で、口唇部には竹管が押されている。胎土には長石とみられる白色粒が含まれる。

269には竹管による押し引きと、刺突が交互に施文されている。

270・272・273は縦方向に弧状を呈しながら並ぶ、竹管による平行沈線が特徴的にみられる。内面がみがかれているがものがあり、胎土には長石と思われる白色粒が目立つ。

274は竹管による平行沈線が格子目状に施文されている。

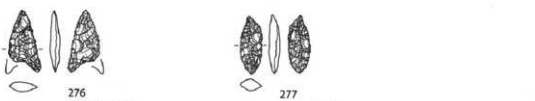
275は横方向の施文を基本とする。口縁下2cmに隆帯を貼りつけ縄文を施文した後に、竹管による横方向の平行沈線および、刺突が施されている。

(2) 石器（第157図）

縄文時代の石器としたものは、石鏃1点、石錐1点、スクレイパー1点、凹石1点の計4点である。

276は石鏃である。和田鷹山群の黒曜石を素材とする。全面が面的な2次加工で覆われているため、素材形状は不明。基部の抉りが明瞭で、左の脚部が欠損している。

277は石錐である。和田鷹山群の黒曜石を素材としている。全体が面的な2次剝離で覆われているため、素材形状は不明。平面形は小形の柳葉形を呈する。尖端が欠損している。



第157図　照月台遺跡縄文時代石器

下段調査区作業風景（南西より、奥が上段調査区）

第4節　古代以降

1　古代以降の遺構

古代以降では道跡と思われる遺構が検出されたのみである。

(1) 道状遺構

1.SC1～11（第158図）

Ⅱ層上面付近で、幅30～140cmの帯状の堅緻部が面的に検出され、SCとして調査した。堅緻部の厚さは3cm程度で、表面は光沢をもち踏み固められた状態である。11のSCは2～3条平行しており、北国街道である現国道18号線に平行する。また、遺構名は付けていないが、国道東側の試掘ピット1ヶ所からも同様の堅緻面が検出されている。

数条が平行する原因は時期により、道部が微妙にずれていたためであろう。掘りこみをもたないため、共伴する遺物がわからなく時期判断が難しいが、照月台遺跡内での現国道18号線付近は、古代以降、高田平野と長野盆地を結ぶ街道が通っていたことから、本遺構もそれに関連するものと思われる。時期的には古代から近代のどこかに収まろう。

2　古代以降の遺物

(1) 土器・陶磁器・石版（第159図）

古代から近世までの土器、陶磁器、石版の破片が表土およびⅡ層中から若干数検出されている。須恵器、や擂鉢、動物形土製品が含まれる。いずれも単独出土で、遺構との関係は不明である。

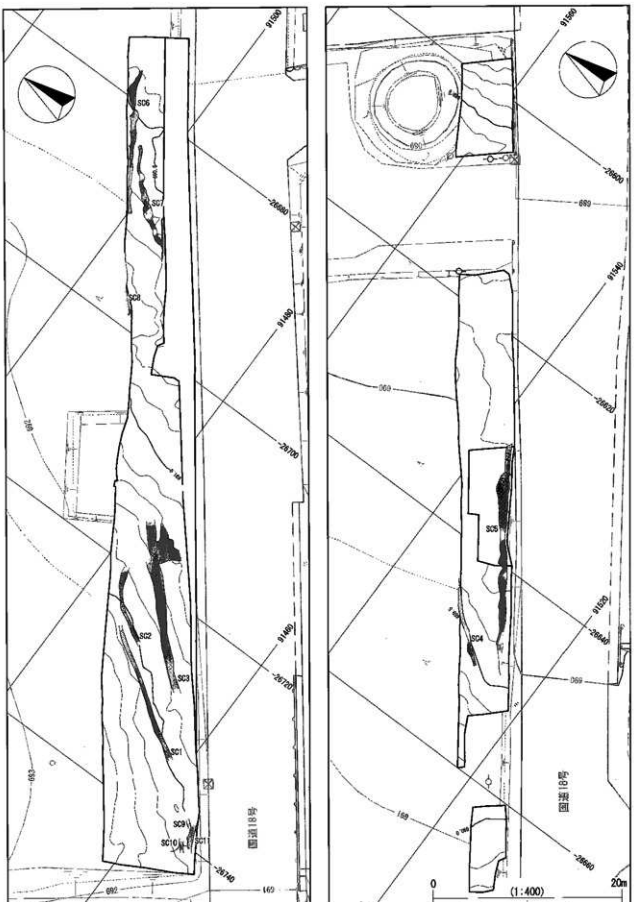
(2) 銭貨（第159図）

寛永通宝2点、元豊通宝1点が出土した。

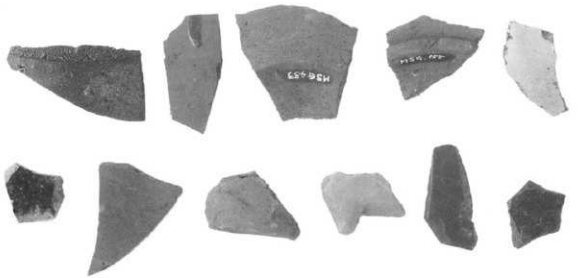
(3) 鉄製品（第159図）

釘2点に板状の鉄製品の破片1点が出土した。

妙高山（仲町遺跡より望む：2003年12月24日撮影）



第158図　照月台遺跡SC分布図



古代以降の遺物　土器・陶磁器・石版（表）

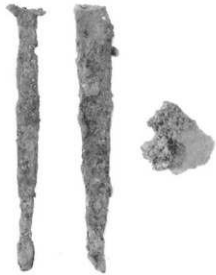
古代以降の遺物　土器・陶磁器・石版（裏）

0　(2:3)　5cm

古代以降の遺物　銭貨（表）

古代以降の遺物　銭貨（裏）

0　(1:1)　5cm



古代以降の遺物　釘・板状鉄製品

第 159 図　照月台遺跡古代以降の遺物

第4章　分析と観察

第1節　自然科学分析

今回の調査で実施した自然科学分析と、分析委託先を以下に示す。

1. 放射性炭素年代測定：㈱パレオ・ラボ
2. 放射性炭素年代測定：名古屋大学年代測定総合研究センター　中村俊夫
3. 黒曜石産地推定：沼津工業高等専門学校　望月明彦
4. 土坑に関する自然科学分析調査(放射性炭素年代測定、炭化材同定、土壌理化学分析、植物珪酸体分析)：㈱パリノサーヴェイ
5. 残存脂肪分析：㈱ズコーシャ

なお、それぞれの報告は添付CD-ROMの¥自然科学分析フォルダ内の自然科学分析.pdfファイルにそのまま載せた。

以下に、分析ごとに成果と課題の検討を行う。

1　放射性炭素年代測定1

パレオ・ラボ社に委託した分析を本項で扱う。

(1) 分析の目的

貫ノ木遺跡で出土した土器の中から整理作業中に、隆起線文土器の可能性があるものがみつかったが、型式学的に縄文時代早期に属す可能性の指摘もあったことから、その年代を探るために放射性炭素年代測定を実施した。

(2) 分析委託先

㈱パレオ・ラボ社に委託した。ターゲット作成までの試料調整および、測定値の計算は同社にて行われたが、測定は核燃料サイクル開発機構で実施された。

(3) 分析の対象とサンプリング方法

土器片の内面に付着した炭化物2点を分析の対象とした。対象となった土器片は掘り出した後にビニール袋にて保管、その後洗浄を経てホワイトカラーおよびニスにより注記が実施されている。また、接合も行われているため、割れ口にはセメダインも付着している。接合後は新聞紙上や脱脂綿の上に乗せられた状態で、常温で保管されていた。

サンプリングは、発掘後の付着物や土器胎土が混じりこまないように、パレオ・ラボ社の藤根久氏によって実施された。サンプリングの対象となった土器片を第160図に示す。写真はサンプリング後に撮影したものである。互いに接合する2片の口縁部破片の内面よりサンプリングされている。

第160図　放射性炭素年代測定土器片

(4) 分析結果の概要

分析の結果を第15表に示す。未較正で、13010±110年（yrBP±1σ）と12870±110年（yrBP±1σ）の数値がでている。較正年代値の1σ暦年代範囲はcal BC 14,065-13,345（100%）と、cal

測定番号（測定法）	試料データ	CO_2 収量 (mg)	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
					暦年代較正値	1 σ 暦年代範囲
PLD-1844 (AMS)	土器内面炭質付着物 III層 No.53800	4.02	-25.0	13,010 ± 110	cal BC 13,695	cal BC 14,065 - 13,345 (100%)
PLD-1845 (AMS)	土器内面炭質付着物 III層 No.53799	4.14	-24.8	12,870 ± 110	cal BC 13,555	cal BC 13,880 - 13,215 (81.5%) cal BC 12,725 - 12,520 (18.5%)

各試料の同位体分別効果の補正値（基準値 -25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値 (yrBP) の算出は、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3(CALIB 3.0 の改訂版）を使用した。

第 15 表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

BC13,880-13,215（81.5%）・cal BC12,725-12,520（18.5%）の結果が得られた。

(5) 分析結果の考古学的解釈

分析結果の評価については、名古屋大学中村俊夫氏に委託した放射性炭素年代測定の結果と合わせて次項に記載する。

2　放射性炭素年代測定 2

(1) 分析の目的

パレオ・ラボ社に委託した放射性炭素年代測定の結果、非常に古い年代が推定された。この年代は日本列島における土器の初源にせまる年代であった。しかし、得られた年代は矛盾がないとはいえ 2 例のみだったことから、その数量を増し信頼度を増すために再度、放射性炭素年代測定を行うことにした。

(2) 分析委託先

㈱古環境研究所を通じて、名古屋大学年代測定総合研究センターの中村俊夫氏に依頼した。

(3) 分析の対象とサンプリング法

分析の対象は、パレオ・ラボ社で分析を行った土器と同一個体であり、同一破片も含まれる。対象となった土器片は掘り出した後にビニール袋にて保管、その後洗浄を経てホワイトカラーおよびニスにより注記が実施されている。また、接合も行われているため、割れ口にはセメダインも付着している。接合後は新聞紙上や脱脂綿の上に乗せられた状態で、常温で保管されていた。

その後サンプリングを実施するため、すべての土器片をアルミホイルに包み、名古屋大学年代測定総合研究センターに持ち込み、中村俊夫氏にその中から分析対象として良好な試料 10 点の選択を依頼した。付着炭化物の量が少なかったことから試料数は 7 点となった。サンプリングは名古屋大学年代測定総合研究センタータンデトロン加速器質量年代測定実験室内で行われた。

(4) 分析結果の概要

第 16 表に分析の結果を示す。Sample No. は本報告で使用する遺跡記号および、遺物番号（注記番号）に対応する。以下中村俊夫氏の報告の概要を示す。

塩酸による加熱洗浄、水酸化ナトリウムによる洗浄、塩酸による加熱洗浄の 3 段階の前処理を行っている。そのため、No.4・6・7 は測定に耐えうる量が少なく、測定不可能となった。また、ほかより 1000 年近い年代値が出ている No.5 は Co^2 収量が 0.32 と少なく、$\delta^{13}C$ 値も -42.4‰とほかとは大きく異なることから、信頼できる年代でないと判断される。

No.1 ～ 3 の 3 点は Co^2 収量も多く $\delta^{13}C$ 値も -22.8 ～ -25.8‰で、年代値も近似しあうことから、信頼できる数値と評価できる。

No.	Lab.No.	Sample No.	Remarks	採取日	備考	前処理	CO_2 収量 (mg)	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C age (BP)
1	NUTA2-6883	MKN-53785	土器内面から採取	2003/11/23		AAA 処理	1.59	-22.8	12360 ± 50
2	NUTA2-6884	MKN-53786	土器内面から採取	2003/11/23		AAA 処理	3.24	-24.6	12490 ± 50
3	NUTA2-6885	MKN-53793	土器内面から採取	2003/11/24		AAA 処理	2.18	-25.8	12350 ± 50
4		MKN-53797	土器内面から採取	2003/11/24		AAA 処理	0.21	n.m.	n.m.
5	NUTA2-6886	MKN-53799	土器内面から採取	2003/11/24		AAA 処理	0.32	-42.4	11460 ± 70
6		MKN-53748	土器内面から採取	2003/11/24		AAA 処理	0.22	n.m.	n.m.
7		MKN-53786	土器表面から採取	2003/11/24	極微量，胎土混じり	AAA 処理	0.09	n.m.	n.m.

注

1.AAA 処理とは，塩酸による加熱洗浄，水酸化ナトリウムによる洗浄，塩酸による加熱洗浄の３段階の処理を行ったことを示す．

2.No.4,No.6,No.7 の試料は，CO_2 の回収量が 0.22mg 以下と少量であったため，測定を止めた．

3.No.5 については，0.32mg の炭素を二酸化炭素として回収したので，測定を行ったが，結果的に，信頼できる年代値は得られなかった．この試料について得た，$\delta^{13}C$ 値は，-42.4‰と，通常の値から大きくかけ離れている．^{14}C 年代も他の３点に比べて約 1000 年若い．

第 16 表　放射性炭素年代測定結果

(5) 分析結果の考古学的解釈

パレオラボ社に委託して実施した ^{14}C 年代も含めた較正年代を第 17 表に示す。年代の算出は（株）古環境研究所に依頼した。較正年代の算出にあたっては CALB4.4 と、CalPal A2004 を併用した。

すべての土器片は報告番号 301（第 65 図）に示した接合関係をもつ同一個体の破片で、X=91128,Y=-27003 付近で直径 1m 以内の範囲からまとまって出土している（第 65 図）。そのため、年代は同じになるはずの分析対象である。

名古屋大学年代学年代測定総合研究センタータンデトロン加速器質年代測定実験室で前処理・測定を行った試料（以下 NUTA 試料とする。）と（株）パレオラボが前処理をして核燃料サイクル開発機構で測定した試料（以下、パレオ試料とする。）の間で年代差が認められる。

NUTA 試料では信頼がおける No.1 ～ 3 の試料間での 1 σ を含めた年代幅は 12,540-12,300BP で 240 年の差があり、パレオ試料では 13,120-12,760BP で 360 年の幅がある。パレオ試料の 1 σ 内での最新の数値は 12,760BP で、NUTA 試料の最古の数値 12,540BP とは 220 年の空白が生じる。また、パレオ試料の最古 13120BP と NUTA 試料最新の 12,300Bp とは 820 年もの年代の開きがある。同じ年代が得られるはずであることから、820 年の誤差があると判断できる。較正年代では Calib4.4 で BC14055-12175 の 1880 年、CalPal A2004 で BC14435-12136 の 2299 年と誤差が広がる。

1 点の誤差の 50 年 100 年程度であれば、考古学的相対関係を知る上で十分な精度の誤差であるのに対し、複数遺物での約 800 年、較正年代の約 2000 年の誤差はあまりにも大きすぎる。

No.	Lab.No.	Sample No.	Radiocarbon Age (BP)	Calib4.4		CalPal A2004
				1 σ (68%range)	2 σ (95%range)	1 σ (68%range)
1	NUTA2-6883	MKN-53785	12360 ± 50	BC 13089-12649 BC 12468-12178	BC 13477-12573 BC 12513-12165	BC 12854-12148
2	NUTA2-6884	MKN-53786	12490 ± 50	BC 13381-13221 BC 12930-12316	BC 13503-12229	BC 12965-12281
3	NUTA2-6885	MKN-53793	12350 ± 50	BC 13086-12657 BC 12463-12175	BC 13480-12578 BC 12507-12161	BC 12846-12136
5	NUTA2-6886	MKN-53799	11460 ± 70	BC 11544-11346 BC 11320-11234	BC 11861-11691 BC 11576-11203	BC 11379-11153
	PLD-1844	MKN-53800	13010 ± 110	BC 14055-13345		BC 14435-13407
	PLD-1845	MKN-53799	12870 ± 110	BC 13880-13215 BC 12725-12520		BC 14150-13134

第 17 表　放射性炭素年代測定の較正年代

今回は同一資料に対して異なる分析機関に年代測定を依頼した結果、分析機関による差が明らかとなった。どうしてこのような差が生じるのであろうか。考えられる要因を名古屋大学の中村俊夫氏と(株)パレオラボの藤根久氏の意見をうかがった。

両氏の見解は測定そのものには問題はなく、試料が微量なことから前処理の差が表われたとのことで一致している。

中村氏によれば、NUTA試料はアルカリ洗浄による処理を施していることから、精度の高い前処理を実施したのでNUTA試料の測定値は信頼おけるとされる。

パレオ試料はアルカリ洗浄を行ってなく、その分NUTA試料より精度が劣る可能性があることを藤根氏は指摘する。しかし、パレオ試料の Co^2 収量はNUTA試料より多く、その点では条件がよいといえる。また、藤根氏によると付着炭化物採取時に土器胎土が混じると年代が古くなる点も指摘されている。今回はNUTA試料、パレオ試料共に前処理実施者が直接サンプリングを行っているため、その点は十分に認識されている。

また、脱脂綿や新聞紙上に置いたり、接合作業を行ったりと発掘調査時点からのセンターの試料の保管状況にも誤差を生じさせる要因が存在する。

実年代に近づくには発掘調査で出土した時点での遺物の取り上げ、その後の保管、そして異物混入のないサンプリングと前処理が必要となる。しかし、現実はこれらの条件を整えるのは非常に難しい。分析対象を選択するのは、遺物の洗浄が終わってからであり、出土時点の土が付いている状態で分析対象と判断することはほとんどできない。個々状況が異なる試料から同質の炭化物をサンプリングするのも難しいであろう。前処理には職人的な技術が必要であろう。また、異なる機関でまったく同じ前処理を行うことも困難と思われる。

以上のように、クリアすべき課題は多く、完全な試料の抽出も不可能を思われる。しかし、少しでも完全な試料に近づける努力は必要である。

今回はまったく同じ試料を別機関に測定を委託した。その結果、測定機関による差の存在が明らかとなった。この差は測定そのものではなく、遺物が出土してから前処理に至るまでの差と考えられる。異なる機関や同一機関でも時期が違えば前処理の方法や技術の差があり、それは年代値の誤差となる。土器出現期に限らず、分析にあたっては常にこの誤差があることを認識する必要がある。

3　黒曜石産地推定

(1) 分析の目的

多くの石器石材は複数の産地のどこから採集してきたものか、科学的に証明することができない。そのような中で黒曜石は科学分析による産地推定が可能である。黒曜石の産地は長野県和田峠周辺でひとくくりにされる場合が多かったが、蛍光X線分析装置を用いた産地推定では、長野県の産地は4エリア、14産地群の分類が可能である。

これまで、センターによる発掘調査で検出された、法量的に分析が不可能な砕片等を除くすべてを対象とする、蛍光X線装置を用いた産地推定を実施し、その数は12,000点を超えている（長野県埋蔵文化財センター他 2000a・2000b・2000c・2000e・2002）。その結果、石器群により、産地群の組成が異なること。また、類似する石器群同士の産地組成に共通性が高いことなどがわかりつつある。さらに、すべてが長野県内産と思われていた中に、わずかではあるが秋田県や青森県等の県外産の黒曜石が含まれていることなどが確認されている。

このように同一遺跡群内の複数にわたる遺跡を対象とした産地推定は、遺跡群内の集団関係および黒曜

石原産地との関係を探る上で重要な資料となる。また、これまでの経過を踏まえ資料の積み上げが必要との判断から本報告においても、蛍光X線分析装置を用いた産地推定を実施した。

(2) 分析委託先

沼津工業高等専門学校の望月明彦氏に委託した。

(3) 分析の対象とサンプリング方法

貫ノ木遺跡 1,322 点、照月台遺跡 1,347 点の合計 2,669 点を分析の対象とした[註1]。法量的に分析困難な砕片を除くすべての黒曜石製石器を原則として、分析の対象とした。試料調整は超音波洗浄機およびメラミンフォーム製スポンジによる汚れの除去のみで、完全非破壊となっている。

(4) 分析結果の概要

分析結果については本文中に盛り込み事実記載を行っている。

貫ノ木・照月台遺跡の産地判別図を写真図版 PL16 に示した。

貫ノ木遺跡の遺構別産地組成を第 7 表に、推定産地別平面分布図を第 13・14 図に示した。

照月台遺跡の遺構別産地組成を第 13 表に、推定産地別平面分布図を第 85 図に示した。

また、望月明彦氏が作成した産地ごとの器種およびブロックの組成を添付 CD-ROM の ¥ 自然科学分析 ¥ 貫ノ木・照月台遺跡出土の黒曜石製石器の推定産地フォルダ内の器種ブロック組成 .xls ファイルに収納した。

(5) 分析結果の考古学的解釈

今回の成果としては、和田十屋橋西群および和田土屋橋南群の黒曜石が多く検出されたことにある。この産地群はこれまで分析を実施した遺跡での数が非常に少なく、ブロックや石器群としてのまとまりで捉えられる例がなかった。今回の分析では、貫ノ木遺跡では主要産地として、照月台遺跡でも黒曜石の 20% 近くを占めていた。また、これに関連して検出例が少ない和田高松沢群に代表される「男女倉産」の黒曜石も多くみられた。これら原石は男女倉遺跡群の立地する男女倉谷内の川原で同時に採集が可能であることから、男女倉谷から採集された黒曜石が持ち込まれたと考えることができる。貫ノ木遺跡と照月台遺跡の距離も近く、石器型式的にも類似性がみられるが、検出例の少ない産地群の黒曜石が共通して多く組成することは、その結びつきをより強いものとしている。

照月台遺跡では、土屋橋西群・土屋橋南群の黒曜石はナイフ形石器、掻器、石刃等の石刃を主体とする器種におもにに用いられ、台形石器、掻器状石器など貝殻状剥片や横長剥片が素材となる器種には和田鷹山群がおもに用いられていることもわかった。照月台遺跡の遺物分布状況から両者を別石器群と捉えることは難しい。そのため、別の入り方をした黒曜石が共存していると判断できる。異なる集団が持ちこんだと解釈できようか。

また、照月台遺跡では下段調査区一括取り上げで、時期が明確ではないが、秋田県男鹿半島に所在する男鹿金ヶ崎群に推定された石器がある（第 161 図）。器種は 2 次加工のある剥片で、定形的なものではないが、彫器等の素材となる幅広の縦長剥片であることから、旧石器時代に属す可能性が高いと思われる。

4　土坑に関する自然科学分析調査

(1) 分析の目的

照月台遺跡で検出された旧石器時代の土坑は、形状や規模から墓坑や陥し穴の可能性が考えられた。墓坑であれば、リン酸カルシウム分が残存することが考えられることから、土壌理化学分析を実施した。また、残存する植物質を調べるため植物珪酸体分析を行った。

また、遺跡から検出された炭化物の樹種を知るために樹種同定を、年代を知るために放射性炭素年代測

註 1：第 7 表および第 13 表は旧石器時代のみを対象としている。総分析数には旧石器時代のほか、縄文時代や時期のわからない遺物が含まれている。

定を実施した。

(2) 分析委託先

㈱パリノサーヴェイ社に業務を委託した。

(3) 分析の対象とサンプリング方法

21試料の樹種同定と3試料の放射性炭素年代測定の対象は小形の炭化物である。これらは、遺物に混ざって検出され、位置の測量も行われている。取り上げ時の状況などの記録は残されていない。分析の対象となった炭化物の分布を第163図に示す。

SK25の覆土のサンプリング位置を第162図に示す。サンプリングは移植ゴテで行い、アルミホイルで包んだうえで、ビニール袋で保管した。

(4) 分析結果の概要

1. 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定の結果を第18表に示す。この測定は㈱パリノサーヴェイ社から㈱地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社で、AMS法により測定されている。

2. 樹種同定

樹種同定結果を第19表に示す。

3. 土壌理化学分析

土坑覆土および土坑外の地山の土壌間の差は特に認められず、動物遺体等が埋納されていたとはいえない状況である。

4. 植物珪酸体分析

クマザサ属を含むタケ亜科が検出されているが、土坑内外の差はない。

(5) 分析結果の考古学的解釈

1. 放射性炭素年代測定

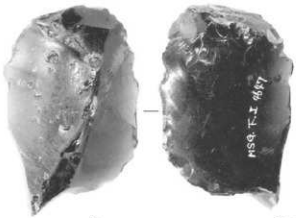
分析はⅣ層・Ⅴa層・Ⅴb層のそれぞれから検出された3点が対象となった。結果はそれぞれの試料が包含されていた地層にほぼ対応する年代がそれぞれ結果として得られている。これら炭化物が人為的に残されたものと仮定すると、最低3時期の人間活動の痕跡が遺跡に残されていることとなる。しかし、検出されている石器群の状況は、多くが1時期に収まるものと考えられ分析結果と矛盾が生じる。

日向林B遺跡でも炭化物の年代が、ほぼ出土層位の年代と一致した結果が得られている（長野県埋蔵文化財センター2000a）。日向林B遺跡ではごく一部に日向林Ⅲ石器文化とした異なる時期の石器群があるものの、大部分が日向林Ⅰ石器文化に属している。日向林Ⅰ石器文化は環状ブロック群であり、接合作業によりきわめて高い同時性が考古学的に証明されており、放射性炭素年代値との矛盾が生じている。石器分布域と炭化物分布域はほぼ一致することが発掘調査で確認されていることから、考古学的には、炭化物と石器群との同時性も高いと考えられている。

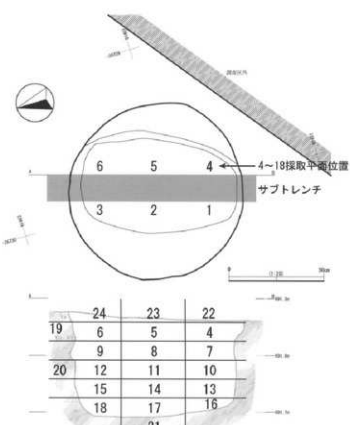
照月台遺跡では調査区幅が狭いこともあり、石器分布域と炭化物分布域の関係をつかめなかった。分析点数の少なさもあり、分析対象となった炭化物が石器群を残した人々の活動痕跡であると断言できない状況といえよう。

2. 樹種同定

複数の樹種が確認されているが、第163図の平面分布図では、調査区南端近くの集中以外は、同一樹種が集中あるいは単独で分布している。コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定されている5点の炭化物は、1ヶ所に集中していることから1個体の可能性が高いと思われる。したがって、21試料の樹種を分析したものの、個体数は10前後になると思われる。



第161図　男鹿金ケ崎群の黒曜石製石器



第162図　科学分析サンプリング位置

第163図　照月台遺跡科学分析炭化材分布図

出土層位	試料の性状（樹種）	測定年代値 (y.B.P.)	δ 13 C (13/C12)	補正年代値 (y.B.P.)	測定番号 (Lab. No.)
IV 層	炭化材（サクラ属）	24,330 ± 200	-24.8‰	24,330 ± 200	Beta-140929
Va 層	炭化材（バラ科ナシ亜科）	27,020 ± 260	-25.6‰	27,010 ± 260	Beta-140927
Vb 層	炭化材（広葉樹）	29,290 ± 310	-25.3‰	29,290 ± 310	Beta-140928

(1) 年代値は、1950 年を基点とした年数
(2) 補正年代値は、同位体効果（δ 13C）の補正を行った値
(3) 放射性炭素の半減期は、LIBBY の 5,568 年を使用した

第 18 表　基本土層出土炭化材の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）結果

個体的な視点でみると調査区南端の集中以外については同一種が集中して分布することから、たまたまその場にあった立ち木が炭化した可能性も考えられる。

調査区南端の集中については、複数樹種が密集し、石器集中範囲とも重なることから人為的に集められた可能性が考えられる。

3. 土壌理化学分析

土坑内外の差が見出せなかったことから、評価が難しい。「墓坑であるとはいえない」との結果だが、墓坑の可能性がなくなった訳ではない。

4. 植物珪酸体分析

土坑内外の差がなく、土坑自体の評価にはつながらないが、クマザサ属は林床下に生育可能な植物であり、周囲に森林があったと考えられる点は評価できよう。

番号	層位	樹種	備考
50	III	広葉樹	
51	III	広葉樹	
261	III	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
265	III	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
266	III	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
267	III	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
269	III	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
273	III	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
2093	Va	カエデ属	
2281	Va	広葉樹（散孔材）	
2470	Va	バラ科ナシ亜科	年代測定
2519	Vb	広葉樹	年代測定
3402	Vb	トネリコ属	
3406	Vc	サクラ属	
3407	Vc	サクラ属	
3438	Vc	サクラ属	
3452	Vc	サクラ属	
3467	Vc	サクラ属	
4018	IV	サクラ属	年代測定
4224	Va	サクラ属	
SK18	覆土	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

第 19 表　基本土層などの出土炭化材の樹種同定結果

5　残存脂肪分析

(1) 分析の目的

旧石器時代の土坑 SK25 が墓坑であるとすれば、ヒトの脂肪酸が検出されるはずである。その有無を調べるために残存脂肪分析を実施した。

(2) 分析委託先

㈱ズコーシャを通じ、帯広地区産大学の中野益男氏に委託した。

(3) 分析の対象とサンプリング方法

土坑内の覆土を対象とした。サンプリングは手で触れぬように、移植ゴテで土壌を採取し、アルミホイルで包んで高温にならない場所で保管、分析先に送付した。

(4) 分析結果の概要

報告書の総括において「土坑内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪のステロール分析の結果、試料中には哺乳動物由来のコプロスタノールが土坑内試料 No.2 と No.4 にわずかに多いのみで、他のステロール類はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめにしか含まれておらず、ほとんど特徴がないことがわかった. 残存する脂肪の脂肪酸分析と脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、試料中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料と類似することがわかった。試料中に残存する脂肪酸がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料と類似していることと、ステロール分析で試料 No.2 と No.4 に哺乳動物由来のコプロスタノールがごくわずかに多く、この No.2，No.4 の分布比が 0.6 以上か 0.6 に近いことを考えると、この土坑にはヒトが埋葬されていた可能性が考えられる。」

とされている。

(5) 分析結果の考古学的解釈

報告書では土坑にヒトが埋葬されていた可能性が考えられるとされているが、ステロール分析では動物に由来するステロール類はほとんどない。矛盾が生じており結論の説得性に欠ける。

土壌理化学分析の結果で墓と考える要素が検出されていないこと、また、考古学的に副葬品としての遺物がまったくないことを考慮すると、現時点で旧石器時代の土坑ＳＫ25を墓坑と判断することはできないと結論付けられる。

第２節　石器の微細剥離痕および線状痕の観察

1　観察の方法

観察には以下の機器を用いた。

デジタルマイクロスコープ：キーエンス社　高精細デジタルマイクロスコープVH-6300

レンズ：キーエンス社　VH-Z25（25～175倍ズームレンズ）

その他にテレビモニターをデジタルマイクロスコープに接続して観察を行った。また、JPEG型式で画像の保存も行っている。

デジタルマイクロスコープの利点として、操作が簡単でモニターを見ながら複数人で確認しながら観察できる点にある。また、被写界深度が深い点もあげられよう。

欠点としてはズームレンズが最小25倍と最大175倍以外は厳密な倍率を設定することができないことにある。画像中に付したスケールはズームレンズと連動していないために、最小または最大の倍率時以外は若干の誤差が生じる。また、この倍率は15インチのモニター画面上の倍率であり、ビデオプリンターおよびJPEGファイルへ出力されるものの倍率ではない。本書で用いた倍率は出力したものに写っている、スケールを読み実際の倍率に換算して表記した。

観察した石器の置き方は原則として実測図と同じ向きで置いてあるが、ピント調節のために石器を起こしたりしているため若干ずれている。

発掘後に超音波洗浄器を用いて洗浄を行った。その後注記、産地分析作業を実施した後に観察をした。そのため、記載には注記番号を用いている。接合、個体分類作業は観察後に実施した。左右側縁の記載は裏面の観察でも表面からみたものである。

2　貫ノ木遺跡

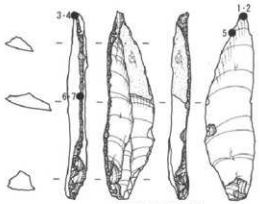
(1) ナイフ形石器の微細剥離痕と線状痕

1.50923（第164図・報告番号13）

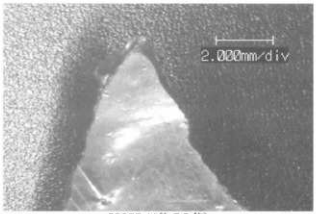
1は尖端腹面である。全体的に傷が多いため器体内面が白く曇ってみえる。そのため、線状痕や微細剥離痕は自然に付いた可能性も考えなければならない。しかし、方向性が一定しない器体内面の線状痕に対して、尖端や刃部縁辺の線状痕の方向には規則性が認められる。

2は同一部位の拡大である。左右の縁辺に平行する線状痕が多数確認でき、尖端で交差している。これらの線状痕により縁辺が磨耗している。

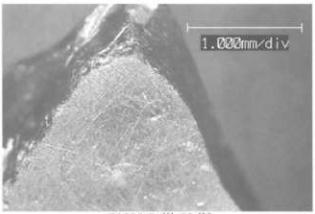
3は左側縁先端で、4はその拡大である。尖端方向からの樋状の剥離内部に剥離軸と同一方向の線状痕が高い密度でみられる。



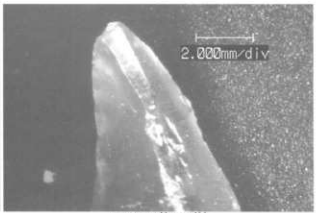
50923の観察部位



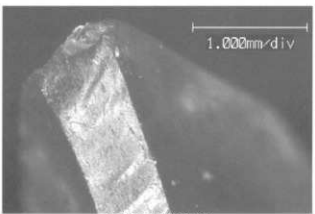
50923-1(約7.5倍)



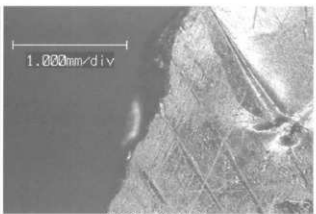
50923-2（約30倍）



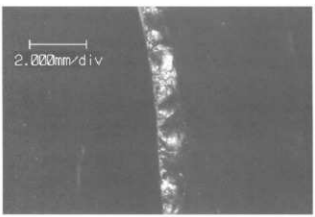
50923-3(約7.5倍)



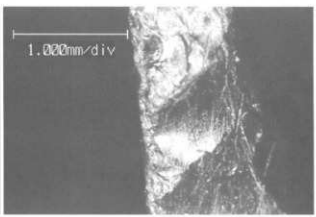
50923-4（約30倍）



50923-5（約30倍）



50923-6（約7.5倍）



50923-7（約30倍）

第164図　貝ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕1（ナイフ形石器1）

５は尖端から約 7mm の右側縁腹面である。画像左上から右下への強いフィッシャーがみられるが、それを磨り消す縁辺に平行する線状痕が多数みられる。

６は左側縁ほぼ中央の剥離痕である。左側縁全体に２次剥離痕がみられるが、この部分の剥離は最も小さく、加工か使用痕かの判断が難しい。剥離の収束部はフェザータイプが多い。７が拡大像で、剥離内部に側縁に平行する多数の線状痕が確認できる。また、潰れたようにみえる開始部は線状痕による磨耗であることがわかる。

以上、刃部に想定される部位には共通して縁辺に平行する線状痕が背腹両面の縁辺に集中してみられる。線状痕の方向は刃部の運動方向を表していると考えられることから、切截の用途が予想される。線状痕は背面と腹面にほぼ同じ密度でみられることから、使用時の刃は立っていたと考えられる。６の画像で指摘した使用痕の可能性がある剥離は背面側に偏っており、線状痕のありかたとは異なる。剥離より線状痕のほうが新しいことから、途中で用途が変わったか、あるいは剥離は意図的なものと考えられる。

2.52134（第 165 図・報告番号 14）

刃部に想定される左側縁上半部の背面に平坦な剥離が存在する。１は尖端腹面である。刃部に平行する密度の高い線状痕により表面が曇ってみえる。２は拡大したもので、左側縁に平行する左上-右下方向の線状痕が無数にみられる。

３は左側縁の尖端２次剥離部分である。拡大したものが４で縁辺に平行する顕著な線状痕が確認できる。５は４のやや下部で同様に刃部に平行する線状痕がみられる。線状痕の密度が高いため微細剥離痕が磨り消されている。

６・７は左側縁腹面で、背面同様に刃部に平行する線状痕が多数認められる。

3.51161（第 166 図・報告番号 3）

１は左側縁刃部中程の腹面で、２が同一部分の背面である。共に縁辺に平行する線状痕とベントタイプの開始部、フェザータイプの収束部をもつ微細剥離痕が認められる。線状痕は微細剥離痕内部まで達している。

4.50972（第 166 図・報告番号 27）

１は左側縁刃部中程の背面で、２が同一部分の腹面である。共に縁辺に平行する線状痕が顕著に認められる。微細剥離痕が両面にみられるが、開始部にコーンタイプが目立つ。

線状痕は前者３点のナイフ形石器と共通して切截の用途が予想される。微細剥離痕の開始部の違いは対象物の差が表れていると考えられる。

5.50085（第 166 ～ 167 図・報告番号 40）

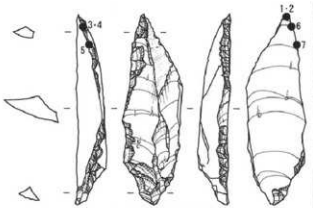
１は尖端腹面で、２は尖端直下の右側縁腹面、３は右側縁中央部付近の腹面である。左右の縁辺に平行する顕著な線状痕がみられ、尖端付近で交差している。縁辺端部近くは線状痕により磨耗しており、微細剥離痕を磨り消している。微細剥離痕の開始部はベント・コーンの両者がみられ、収束部はフェザータイプが多い。

４は右側縁先端で、２次加工と思われる剥離内部に縁辺に直交する線状痕が入り込んでいる様子がうかがえる。

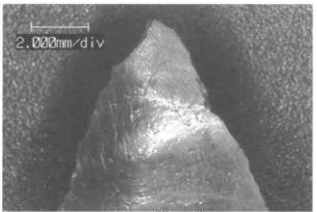
(2)　彫器の微細剥離痕と線状痕

1.50111（第 167 図・報告番号 65）

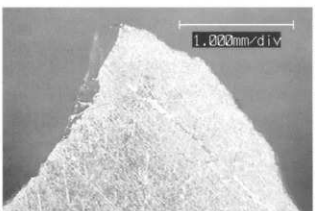
１は彫刀面尖端付近である。全体的に傷が多く器体表面が曇ってみえる。２は拡大したものだが、縁辺に平行する線状痕の方向性がみられるものの、他方向の線状痕も多く全体的にはばらついている。３は２の下部であるが、同様の線状痕に微細剥離痕がみられる。微細剥離痕の開始部はベントタイプ、収束部は



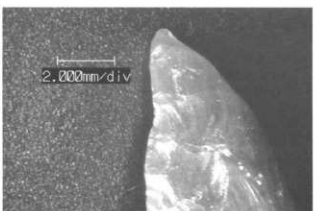
52134の観察部位



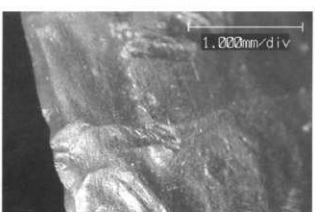
52134-1（約7.5倍）



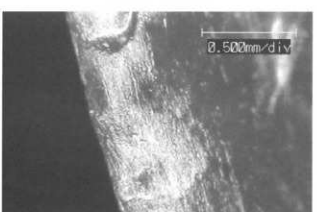
52134-2（約30倍）



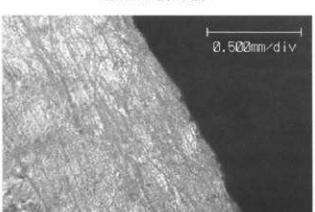
52134-3（約7.5倍）



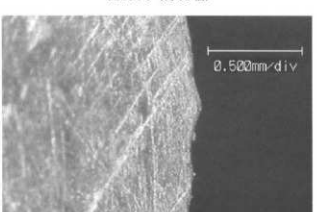
52134-4（約30倍）



52134-5（約50倍）

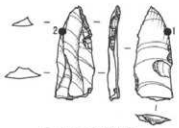


52134-6（約30倍）

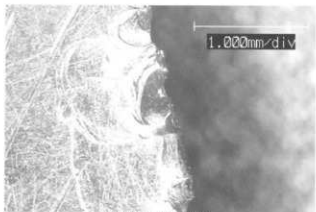


52134-7（約50倍）

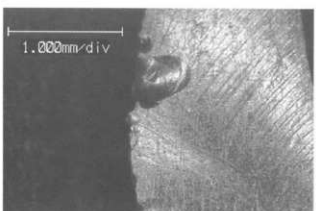
第165図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕2（ナイフ形石器2）



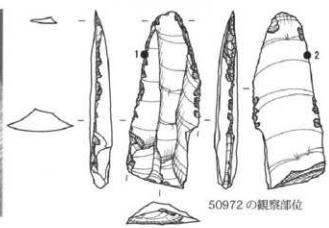
51161 の観察部位



51161-1（約 30 倍）

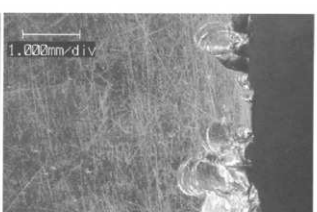


51161-2（約 30 倍）

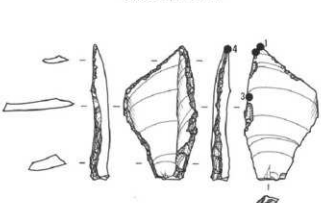


50972 の観察部位

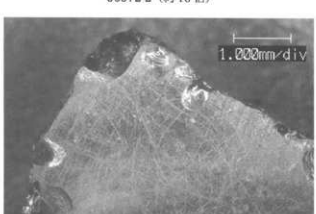
50972-1(約 15 倍)



50972-2（約 15 倍）

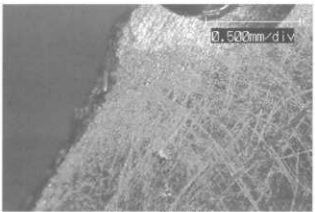


50085 の観察部位

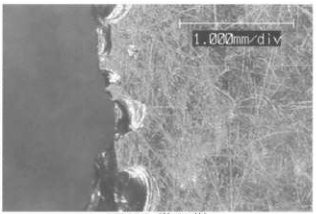


50085-1（約 15 倍）

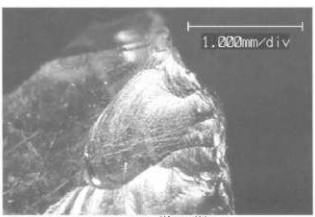
第 166 図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 3（ナイフ形石器 3）



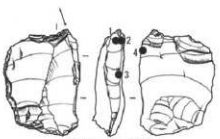
50085-2（約50倍）



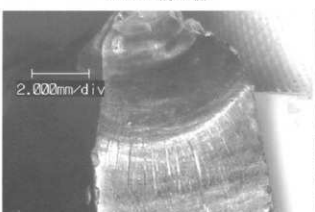
50085-3（約30倍）



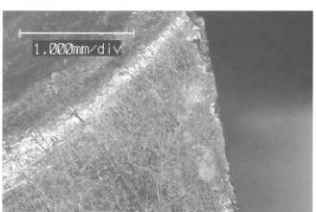
50085-4（約30倍）



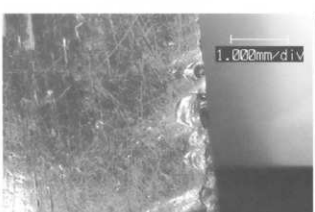
50111の観察部位



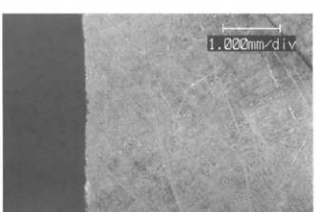
50111-1（約7.5倍）



50111-2（約30倍）



50111-3（約15倍）



50111-4（約15倍）

第167図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕4（ナイフ形石器4・彫器1）

フェザータイプが多い。

４は彫刀面の腹面側で、フィッシャーと同一方向で解りづらいが、非常に多くの線状痕がある。縁辺に斜交する線状痕がまとまっている。

2.50304（第 168 図・報告番号 72）

１は彫刀面尖端の腹面で２は拡大したものである。線状痕の密度が非常に高く、縁辺が磨耗している様子がわかる。線状痕は多方向みられ斉一性が低い。上縁辺に直交するものが多い。

3.53033（第 168 図・報告番号 75）

１は彫刀面尖端で２が拡大したものである。樋状剝離打面部縁辺に直行から斜交する線状痕がまとまってみられる。彫刀面と樋状剝離打面部のエッジはこの線状痕により磨耗しているようだ。

３は尖端付近の腹面で４が拡大したものである。４では繞けと思われる細状の模様がみられ、それを切るように彫刀面の縁辺に直交から斜交する線状痕がみられる。この方向は彫刀面で確認できた線状痕の方向に連なるものである。

4.50514（第 169 図・報告番号 69）

１は尖端付近の背面で２が拡大したものである。彫刀面との境の縁辺から 0.5mm 前後の幅で、縁辺に直交から斜交する線状痕が確認できる。また、尖端付近の稜部には顕著な線状痕により、面ができている部分がみられる。この線状痕の方向は石器の主軸に対して直交方向である。

３は彫刀面尖端で４はさらに拡大したものである。全体的に傷が多いが、彫刀面の尖端付近には彫刀面の樋状剝離軸に平行する、長さ 0.25mm 前後の短い線状痕がみられる。

5.50917（第 169 図・報告番号 58）

１は尖端付近の背面で２が拡大したものである。全体的に傷が多いが彫刀面に平行する線状痕と、斜交する線状痕に方向のまとまりが認められる。背面の稜は直交する線状痕により磨耗している。

３は尖端付近の腹面で４が拡大したものである。彫刀面との縁辺から直交からやや傾く細かい線状痕がまとまってみられる。５は尖端下の右側縁腹面で４と同一方向の線状痕がまとまってみられる。

６は基部腹面で縁辺に直行する強い線状痕がみられる。装着痕であろうか。

6.51182（第 170 図・報告番号 56）

１は尖端腹面で２は拡大した画像である。樋状剝離打面に直交する強く長い線状痕と、彫刀面に直交からやや傾いた短く密度の高い２種の線状痕がみられる。３は２よりやや下部の彫刀面との側縁の腹面側だが、画像右上－左下方向の強く長い線状痕と、彫刀面との側縁に直交から２方向にやや傾く線状痕がみられる。

４は彫刀面である。樋状剝離軸と同一方向の強く長い線状痕がみられる。

(4) 掻器の微細剝離痕と線状痕

1.50140（第 171 図・報告番号 100）

１は刃部尖端付近の腹面である。全体的に傷が多いが刃部縁辺付近が特に顕著で白く曇っているようにみえる。

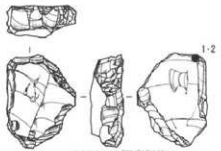
２は１の画像内の右側縁辺を拡大したものである。他方向の線状痕があるが、縁辺に直交する線状痕の方向性にまとまりが認められる。

３は刃部と左側縁との境付近の腹面である。縁辺に平行する方向の線状痕が密にみられる。

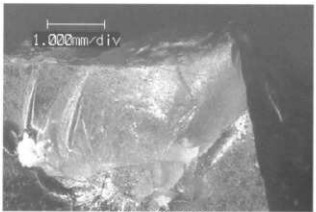
４は３に隣接する基部側である。縁辺に平行する細かい線状痕が局所的に高い密度でみられる。

５は腹面のバルブの高まりの部分である。画像上左上－右下方向の線状痕のまとまりが確認される。

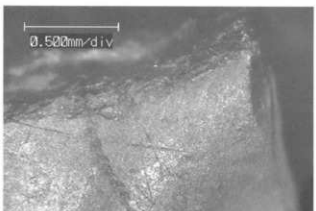
６は右側縁と刃部の境付近の腹面である。縁辺に直交する線状痕のまとまりが確認できる。



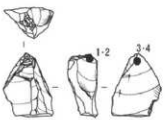
50304 の観察部位



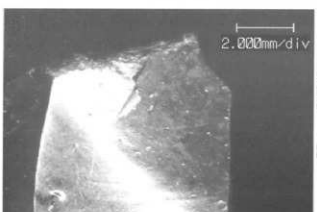
50304-1（約 15 倍）



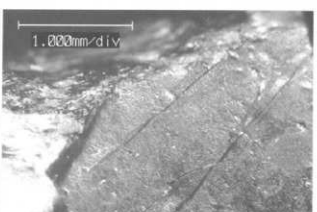
50304-2（約 50 倍）



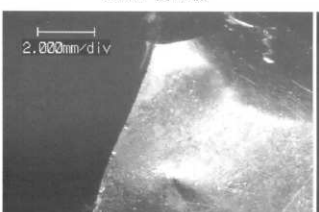
53033 の観察部位



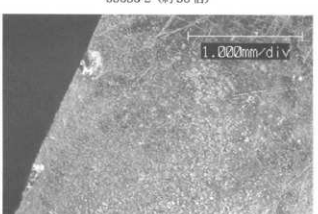
53033-1（約 7.5 倍）



53033-2（約 30 倍）

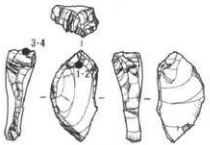


53033-3（約 7.5 倍）

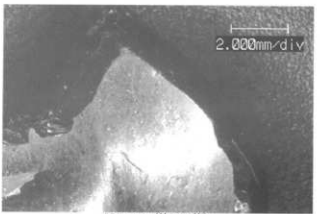


53033-4（約 30 倍）

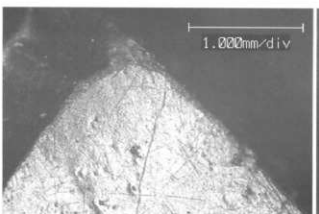
第 168 図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 5（彫器 2）



50514 の観察部位

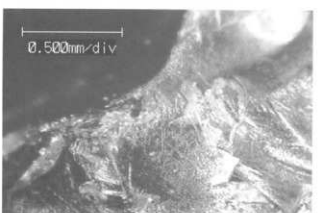


50514-1（約 7.5 倍）

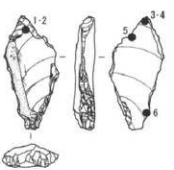


50514-2（約 50 倍）

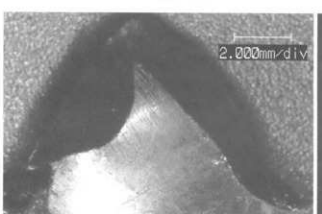
50514-3（約 7.5 倍）



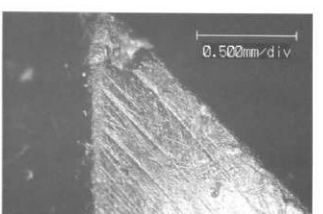
50514-4（約 50 倍）



50917 の観察部位

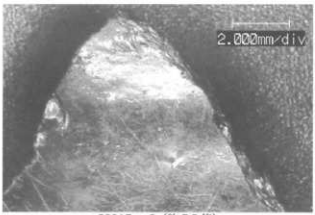


50917-1（約 7.5 倍）

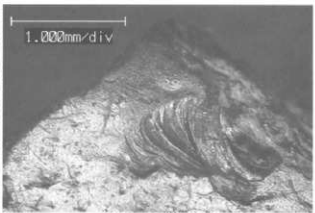


50917-2（約 50 倍）

第 169 図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 6（彫器 3）

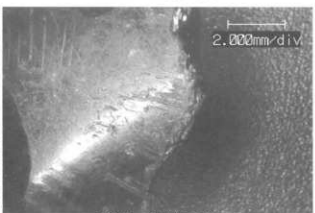


50917－3（約7.5倍）

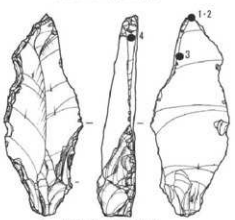


50917－4（約30倍）

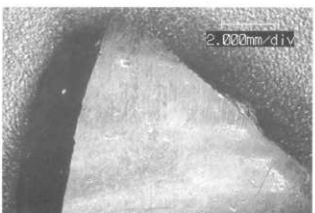
50917-5（約15倍）



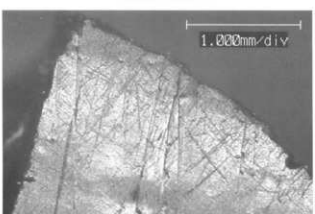
50917－6（約7.5倍）



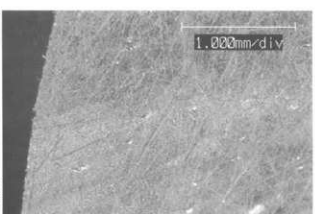
51182の観察部位



51182-1（約7.5倍）

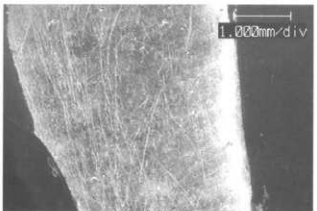


51182-2（約30倍）



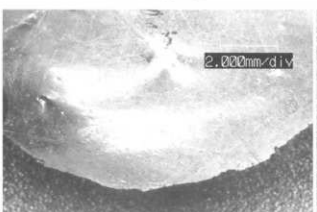
51182-3（約30倍）

第170図　貝ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕7（彫器4）

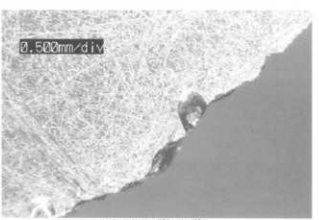


51182-4（約15倍）

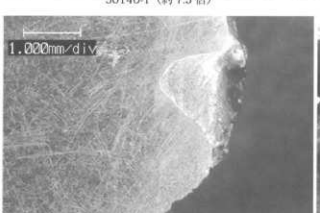
50140の観察部位



50140-1（約7.5倍）



50140-2（約50倍）



50140-3（約15倍）

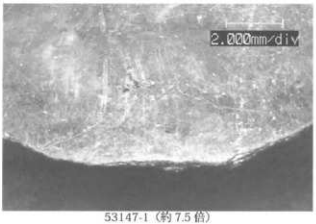
50140-4（約7.5倍）

50140-5（約15倍）

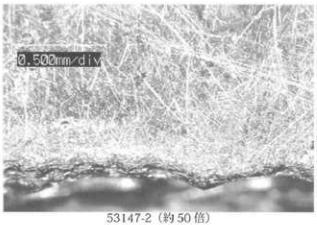
50140-6（約30倍）

第171図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕8（彫器5・掻器1）

53147の観察部位



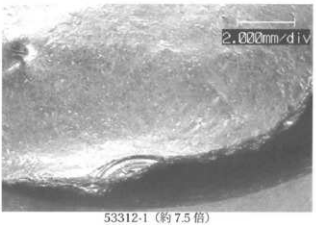
53147-1（約7.5倍）



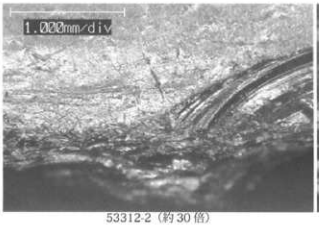
53147-2（約50倍）

53147-3（約30倍）

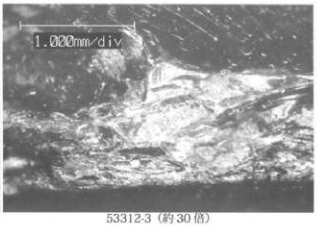
53312の観察部位



53312-1（約7.5倍）

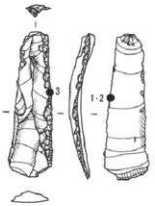


53312-2（約30倍）

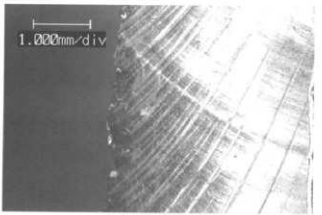


53312-3（約30倍）

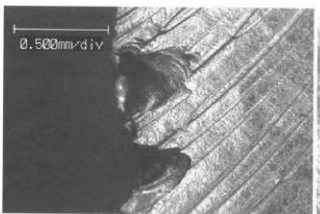
第172図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕9（掻器2）



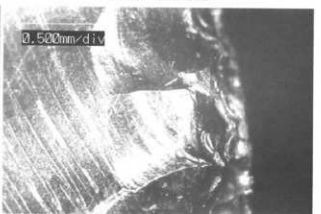
51569 の観察部位



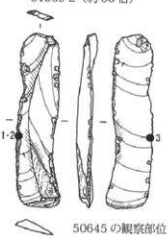
51569-1（約 15 倍）



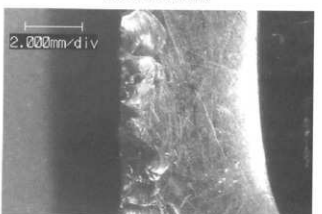
51569-2（約 50 倍）



51569-3（約 50 倍）



50645 の観察部位



50645-1（約 7.5 倍）

50645-2（約 50 倍）

50645-3（約 30 倍）

第 173 図　貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 10（削器 1）

この掻器の線状痕は刃部では縁辺に対して直交からやや傾き、側縁では縁辺に平行している。

2.53147（第 172 図・報告番号 98）

1 は刃部尖端付近の腹面である。全体的に傷が多いが、刃部に直交する線状縁と、白く曇った縁辺が確認できる。2 は拡大したもので、刃部に直交する細かく密度の高い線状痕により磨耗した縁辺が確認できる。

3 は同一部の背面側で磨耗した縁辺がみられる。細かくてわかりづらいが、磨耗部には縁辺に直交からやや左に傾く線状痕がみえる。

3.53312（第 172 図・報告番号 101）

1 は刃部尖端付近の腹面で 2 が拡大したものである。刃部に直交する線状縁がみられる。

3 は同一部の背面側で、磨耗した縁辺と縁辺に直交する線状痕がみえる。

(5) 剥器の微細剥離痕と線状痕

1.51569（第 173 図・報告番号 123）

1 は刃部中央付近の腹面側である。画像右上－左下方向のフィッシャーが目立つが、それに直交するように細かい線状痕が多数みられる。この方向は刃部に対して斜めとなる。2 はほぼ同一部分の拡大したもので、線状痕が良くわかり微細剥離痕の内部まで入り込んでいる。

3 はほぼ同一部分の背面側で、刃部に対して斜交する線状痕が、剥離痕内部から外にかけて観察できる。

2.50645（第 173 図・報告番号 124）

1 は刃部中央付近の背面で 2 が拡大したものである。刃部に平行する線状痕が密にみられ、縁辺は磨耗している。

3 はほぼ同一部分の腹面である。刃部に平行する線状痕と、ベントタイプの開始部、フェザータイプの収束部をもつ微細剥離痕がみられる。

3　照月台遺跡

(1) ナイフ形石器の微細剥離痕と線状痕

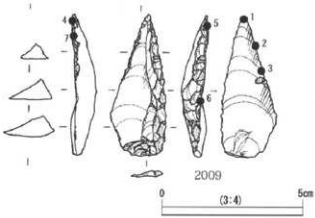
1.2009（第 174 図・報告番号 8）

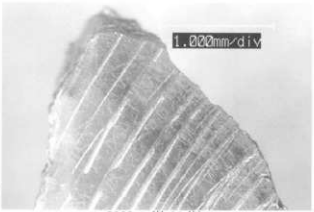
1 はナイフ形石器の腹部の尖端である。画像左側縁が背で、右側縁が刃部となっている。右上から左下へ向かう線はフィッシャーである。刃部にほぼ平行する細かい線状痕が多くみられる。全体的に線状痕が多いが、これだけ方向が揃えば刃部の運動方向と判断できよう。2 と 3 は刃部の別の部位である。尖端同様に刃部に平行する線状痕が多数確認できる。刃部縁辺からの微細剥離痕もみられ、開始部は潰れ、収束部はステップしているものが認められる。刃部縁辺および微細剥離の稜等の凸部は磨耗して光沢をもっている。

刃部背面のほぼ全体に 2 次加工か使用痕か判断つけ難い剥離痕がみられる。この剥離により刃部の角度が 70° 前後と鈍角になっている。2009-4 は尖端付近の刃部背面である。0.2mm 前後の奥行きの微小な剥離と、1mm ～ 2mm 前後の奥行きの 2 種の剥離が見られる。0.2mm 前後の奥行きをもつ。7 は刃部背面の剥離を拡大したものである。0.2mm 前後の微小な剥離の収束部はステップタイプのものが多い。1mm ～ 2mm の奥行きをもつ剥離の収束部はフェザータイプが多く、剥離内部には刃部と平行する線状痕がみられる。

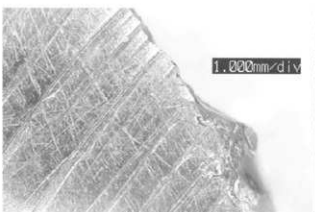
5 と 6 は石器右側縁のプランティングである。剥離の大きさが不揃いで、収束部はフェザータイプとステップタイプが入り乱れており、刃部側の剥離と異なることがわかる。

遺物番号 2009 のナイフ形石器の刃部には、表裏に刃部と平行する線状痕がみられることから、この線

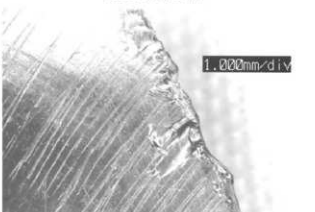




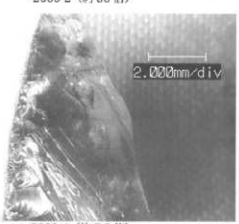
2009-1（約 30 倍）



2009-2（約 30 倍）



2009-3（約 15 倍）



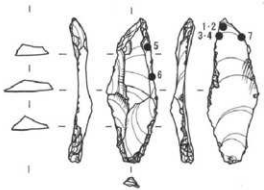
2009-4（約 7.5 倍）

2009-5（約 7.5 倍）

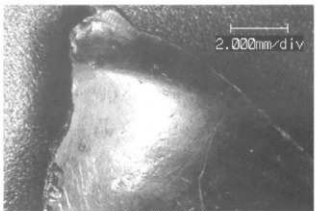
2009-6（約 7.5 倍）

2009-7（約 30 倍）

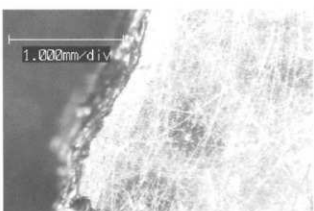
第 174 図　照月台遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 1（ナイフ形石器 1）



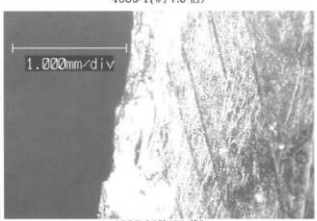
4085 の観察部位



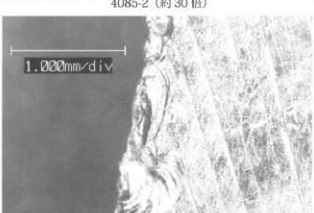
4085-1(約 7.5 倍)



4085-2（約 30 倍）

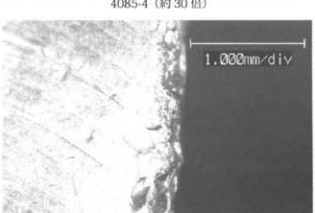


4085-3(約 30 倍)

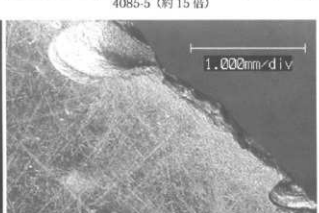


4085-4（約 30 倍）

4085-5（約 15 倍）



4085-6（約 30 倍）



4085-7（約 30 倍）

第 175 図　照月台遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 2（ナイフ形石器 2）

状痕が刃部の運動方向を示していると考えられる。微細剥離痕が背面側に偏ることから、腹面側からの力のほうが強かったと思われる。刃部背面に見られる2次剥離とプランティングの剥離とは明らかに異なることから、刃付けのための剥離あるいは使用痕と考えられる。微細剥離痕の収束部にはステップタイプが多いことから、対象物は比較的硬いものであった可能性が考えられる。

2.4085（第175図・報告番号2）

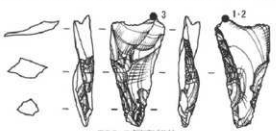
1はナイフ形石器の尖端腹面である。右側縁尖端にわずかな加工が施されているが、左右両側とも刃部としての機能をもつと思われる。2は尖端の狭い加工部位の腹面である。縁辺に平行する線状痕が多数みられる。また、縁辺に直交する線状痕もみられる。3と4は2より下の部分で、背面尖端からの加工が途切れる部分の腹面である。両者は同じ部分で光を当てる角度を変えてある。刃部縁辺に平行する線状痕が顕著にみられる。また、刃部縁辺に直行する線状痕も確認できる。開始部が潰れ収束部がステップタイプの微細剥離痕がみられ、剥離内部に線状痕が入り込む様子も確認できる。

5と6は同一刃部の別の部位である。同様に刃部側縁に平行する線状痕と、開始部が潰れ、収束部にステップタイプの微細剥離痕が目立つ。7は反対側の刃部腹面である。微細剥離痕内部に入り込む刃部縁辺に平行する顕著な線状痕がみられる。また、刃部縁辺に直交する線状痕も確認できる。刃部縁辺は潰れており、微細剥離痕の収束部はステップタイプがみられる。

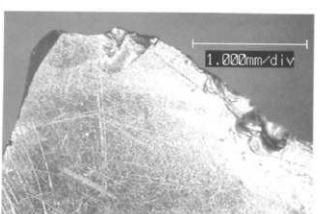
(2) 台形石器の微細剥離痕と線状痕

1.796（第176図・報告番号24）

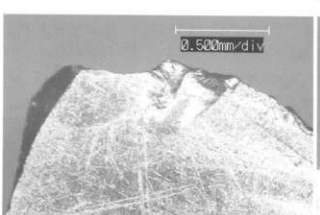
1は刃部右端肩部の腹面で、2が同一部の拡大、4が同一部の背面である。刃部に平行する線状痕が並ぶ状態が観察される。線状痕は刃部内面からそのまま側縁方向に抜けており、側縁では特に密となる。刃部縁辺に磨耗がみられる。ベントタイプの開始部、フェザータイプの収束部をもつ微細剥離痕が背原両面にほぼ均等にみられ、線状痕は剥離内部に入り込む。



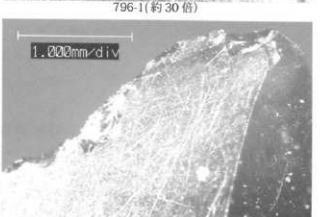
796の観察部位



796-1（約30倍）



796-2（約50倍）



796-3（約30倍）

第176図　照月台遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕3（台形石器1）

第５章　成果と課題

第１節　旧石器時代石器群の位置付け

１　貫ノ木遺跡 H5 地点のナイフ形石器石器群

(1) 該当するブロック

BL5001 ～ 5020 のすべてのブロックが本石器群に属すると認定した。ただし、BL5006 のようにⅢ層を中心に分布する黒曜石の原石の一群は、明らかに本石器群と時期が異なる。また、単独で紛れ込んだ石器の区別が難しいことから、器種および石材に共通性がみられない単独品は本石器群から除外する。

(2) 平面分布の検討

等高線に平行する細長い調査区のため、山側と谷側の調査区外に大きく分布域が広がることが予想される。

斜面下部で出土した石器の多くはⅣ～Ⅵ層の再堆積層に包含されており、平面分布、垂直分布から２次的に動いていると判断される。第 61 図の接合資料の分布では、細長い調査区長軸に平行する接合線が目立つ。斜面の崩落等による２次的移動の距離が長い場合は接合が少なく、短い場合は等高線に直交する接合線が多くなると考えられる。今回の場合はある程度の接合数はあるが、等高線に直交する接合線は少なく、石器自体の磨耗がほとんどないことから、斜面下部で検出された石器の２次的移動距離は短いと予想した。ただし、垂直分布の上下差は大きいため、確実な２次的移動があるものとして認識する必要がある。

BL5006・5008・5012(第 21・22・26 図) 等の斜面上部に位置するブロックは、ゆるやかな斜面に位置し、２次的な移動が否定できないが、同種石材のまとまりや遺物の垂直分布の状況から、移動距離は非常に短いと思われる。

調査区幅が狭いことから、全体の分布の形状がわからないが、環状ブロック群はないようだ。

(3) 垂直分布の検討と推定される生活面

調査区内の堆積状況は良好とはいえない。特に斜面下部は上部から崩落してきたⅣ～Ⅵ層の再堆積層がみられる。同層内に分布する遺物の上下幅は大きいことから、これら遺物は斜面上部から２次的に移動したものと判断できる。

斜面上部は堆積がやや薄いものの、野尻湖遺跡群標準層序に準ずる区分が可能であった。

第 17 ～ 31 図に各ブロックの垂直分布を示した。Ⅳ～Ⅵの再堆積層が確認されたのは BL5003 東半分・5010・5011・5013 東半分・5015 東半分・5015・5017・5019 である (以下、再堆積部とする。)。同層中で検出される石器の垂直分布の上下幅は大きい。第 25 図の BL5010、第 27 図の BL5013 にその特徴がよく表われている。

斜面上部のブロックの土層堆積状況および、遺物の垂直分布はどうだろうか。BL5001・5002・5003 西半分・5004 ～ 5009・5012・5013 西半分・5015 西半分・5016・5018・5020 の大部分でⅣ層、Ⅴa 層、Ⅴb 層、Ⅵ層の区分が可能であった (以下、プライマリー堆積部とする。)。垂直分布では上下幅がやや大きいが、一般的な上下への分散の範疇に含まれる (矢島他 1976)。

BL5006(第 21 図) では、本石器群から除外した黒曜石原石を主体とする石器群が、本石器群と平面的

に重なって分布している。垂直分布では黒曜石原石を主体とする石器群はⅢ層、本石器群はⅤａ～Ⅴｂ層を主体として分布することが、視覚的に確認できる。ここから、プライマリー堆積部では、平面的な２次移動はなく、石器群で捉えた場合の層位差は時間差を示すと判断できる。

つまり、プライマリー堆積部で、器種や石材の共通性および平面的層位的な分布まとまりが捉えられる場合、同時期に残された石器群として評価することができ、出土層位は石器群の残された時間を示すものと判断できる。

プライマリー堆積部に分布する石器は黒曜石を主要石材としているが、推定されている産地群の共通性がみられる。器種組成も同時期と判断して矛盾はなく、出土層位の共通性もあることから、１つの石器群として捉えることとした。また、プライマリー堆積部と再堆積層部の石材、器種組成も一致することから、BL5001～BL5020に分布するほとんどの石器が、本石器群に属すと判断した。

プライマリー堆積部での出土層位はⅣ層が主体となるブロックが多い。しかし、ほとんどのブロックでⅤａ層および、Ⅴｂ層に包含される石器が多くみられる。旧石器時代の遺物垂直分布事例では、想定される生活面より上方に多く遺物が出土するが、下方になると極端に遺物数が減る。この現象はこれまでの野尻湖遺跡群の発掘調査でも確認されている。Ⅳ層の上半部に生活面が想定されるブロックでは、Ⅳ層下半部になると遺物数は減り、Ⅴａ層以下になるとほとんど遺物がなくなる。今回調査区は斜面に位置するため、通常より多くの遺物が上層へ浮き上がっていると思われる。また、生活面がⅤａ層付近にあるとすれば、Ⅴｂ層に遺物が分布することに矛盾はないことから、生活面はⅤａ層を中心として、Ⅳ層下部からⅤｂ層の上部のどこかにあると考えられる。Ⅴａ層はAT降灰層準であることから、AT降灰に前後する時期の石器群と判断した。

(4) 器種組成の概要

組成はナイフ形石器、台形石器、貝殻状刃器、彫器、掻器、削器、楔形石器、石刃、斧形石器に機能部位のみ加工が施される削器類や揉錐器となる。

ナイフ形石器は基部加工が主体となる。石刃素材で基部以外に尖端にも加工が施され左右対称形を呈する。基部は素材打面が残され平たくなるものが多い。片側側縁の基部と尖端の加工部位が逆なり、２側縁加工になるものが含まれるが、これらは素材の剥離軸と石器の主軸が一致していること、全体に加工が施される側縁の中央部の加工は漸移的に弱くなることから、「茂呂型ナイフ形石器」に類するものではなく、広範囲に加工が施された「基部加工のナイフ形石器」として位置付けるべきであろう。「基部加工のナイフ形石器」には寸詰まりの縦長剥片を素材とするペン先形を呈するナイフ形石器が含まれる。

台形石器には素材打面を基部下側に置くものと、側縁に置く２種がみられる。前者の基部への加工はペン先形のナイフ形石器と共通している。縦長剥片を素材とする台形石器には、ナイフ形石器との中間的な形態が存在する。加工はブランティングが中心となるが、ナイフ形石器より平坦な傾向がある。

貝殻状刃器を目的とする剥片剥離が少なく、貝殻状刃器自体の数量も少ない。別の目的の剥片剥離作業中に得られた貝殻状剥片のうち、利用可能な縁辺をもつものを貝殻状刃器として利用したと思われる。

彫器は、石刃あるいは縦長剥片を素材としている。ナイフ形石器と形状が酷似する一群が特徴的に存在するほか、彫刀面が素材長軸に平行するもの、斜交するものがみられるが、形態的な幅をもち型式名を冠するまでの斉一性がない。ブランティング等の加工による樋状剥離打面の作出が認められる。

掻器には石刃素材の縦長の形状を呈する一群と、寸詰まりの縦長剥片や貝殻状剥片を素材の拇指状を呈する一群が存在する。鈍角で平坦な加工により、丸い平面形の刃部が作出されている。縦長を呈するものには、ナイフ形石器に類する基部をもつものが含まれている。また、刃部加工の頻度が低い掻器状石器と認定した石器との中間的な石器も存在する。

削器には石刃素材と、貝殻状剝片等の素材が用いられるが、加工部位は刃部だけで基部の作出はない。

石刃は使用の痕跡が少なく、石器の素材として持ち込まれたことが想定される。打面調整が確認できる石刃が多く含まれている。

斧形石器は蛇紋岩製で刃部に研磨が施される。数量は少ないが大・中・小の大きさがみられる。素材には片面に礫面をもつ剝片が用いられており、その滑らかな礫面に進なって刃部への研磨が施されている。研磨痕は石器長軸にほぼ平行している。側縁および基部への加工は粗く側面からみる表裏の稜線は波打っている。これらの特徴は、野尻湖第Ⅰ期の斧形石器に共通する。

(5) 石材組成の概要

黒曜石が主体となり無斑晶質安山岩、珪質凝灰岩などがみられる。黒曜石の産地は野尻湖遺跡群でのまとまった検出例のない和田土屋橋西群、同南群が主体となる。また、男女倉産の和田高松沢群も一定量含まれている。産地群の組成は各ブロックで共通することから、多くのブロックが同一石器群の範疇に含まれることを示す材料となる。

(6) 剝片剝離作業の痕跡と遺跡の性格

主要となるナイフ形石器、掻器、削器等の完成品は石刃素材であるのに対して、遺跡内に残されている剝片剝離の痕跡に石刃製作はほとんどない。確認できる目的的剝片の形状は貝殻状剝片で、これを素材とする器種は削器等の機能部位のみに加工が施される石器である。したがってナイフ形石器等の石刃素材製品の多くは、別の場所で製作されたものが持ち込まれていると判断できる。

(7) 石器文化の設定

本石器群はナイフ形石器を特徴とするナイフ形石器石器群として位置付けられる。また、器種組成には1時期の人々が持っていた道具の組み合わせを見出すことができるため、石器文化として評価できる。

貫ノ木遺跡 H1～H4 地点での石器文化の呼称は、Ⅰ石器文化が台形石器・斧形石器に代表される文化、Ⅱ石器文化がナイフ形石器に代表される文化、Ⅲ石器文化が槍先形尖頭器に象徴される文化といった内容を軸に決められている（第 179～181 図参照）。本石器群はナイフ形石器が主体となることから「貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化」と呼称する。代表的な石器を第 177 図に示す。

また、ナイフ形石器の形態、確実な彫器・掻器の存在から、AT 降灰以前～AT 降灰直後に位置付けられ、野尻湖遺跡群編年の第Ⅱ期に属す（谷・大竹 2003）。

2　照月台遺跡 BP 地点のナイフ形石器石器群

(1) 該当するブロック

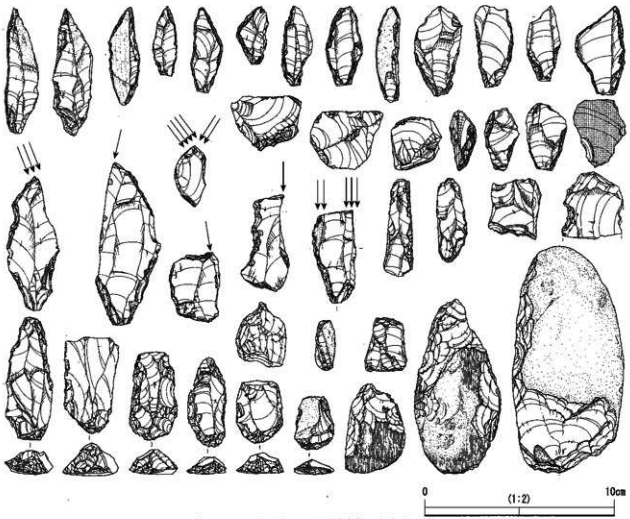
BL1～3で器種組成、石材組成、出土層位に共通性がみられる。また、BL4 と BL5 は遺物が少ないが、石材や出土層位が共通することから同一石器群と判断した。したがって BL1～5 が該当するブロックとなる。

BL1 内部に位置する SH3・4 はⅣ層上部に集中して分布する。また、BL1-5(第 92 図）の北隅にみられる礫集中はⅢ層に集中している。これら礫群および礫集中は、Ⅴa 層に集中して分布する本石器群とは明らかに時期が異なることから、本石器群から除外する。

BL6～12 も同一石器群に含まれる可能性が考えられるが、石刃を素材とする器種が少ないなど異なる点がみられることから、本石器群に含めない。

(2) 平面分布の検討

調査区際まで遺物密度が高いことから、遺物分布域は調査区外に大きく広がると思われる。調査区は平坦で、遺物の分布状況に 2 次的移動は認められない。



第 177 図　貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化のおもな石器

BL1 は遺物密度が高く、平面的にも広い大規模なブロックである。南半部の遺物高密度範囲は弧状を呈す。第 147 図では高い接合頻度が確認されることから環状ブロック群の一部の可能性が考えられる。しかし、環状ブロック群だとすれば３分の２以上が調査区外に広がることが予想される。調査区外の状況をみないと環状ブロック群との判断はできない。

(3) 垂直分布の検討と推定される生活面

土層の堆積は良好であることから、出土層位は時期を考える上で重要な鍵となる。本石器群に属す石器はＶａ層に最も多く分布するため、生活面はＶａ層中にあると判断する。

また、BL1-3 の端に位置する土坑 SK25 では覆土全体に AT が混じることが肉眼で観察される。土坑埋没時の地表に多くの AT が存在したと解釈できる。そのため、この土坑は AT 降灰直後に埋まったと判断できる。土坑から遺物が検出されなかったことから、石器群との関係は確定的ではないが、BL1 の縁辺部に位置する点や、層位的な一致から石器群と同一の人々が残した土坑と考えられる。そうなると、石器群の時期も AT 降灰直後に位置付けられる。

(4) 器種の概要

他の時期の遺物群の重なりが確認されていることから、数量が少ない器種は本石器群に属さない可能性がある。数量的に安定する組成はナイフ形石器、台形石器、貝殻状刃器、彫器、掻器、削器、楔形石器、石刃、斧形石器となる。

ナイフ形石器には基部加工と２側縁加工がある。基部加工のナイフ形石器は打面が残され基部が平た

く整形される形態が主体で、貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化と強い共通性をもつ。また、剝片尖頭器のような基部両側に抉りをもつナイフ形石器も含まれている（報告番号 1）。２側縁加工のナイフ形石器は正反方向からのプランティングが施されている。素材は加工により断ち切られ、変形度は大きい。

台形石器は貝殻状剝片を素材とし、素材打面を側縁に置くものが主体となっている。加工にはプランティングと平坦な剝離がある。平面形状は台形が主体だが、左右の側縁がノッチ状を呈するものが特徴的に含まれる。

貝殻状刃器は貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化同様に数量が少ない。貝殻状刃器を目的的に製作していた痕跡はなく、別目的の剝片剝離でたまたま得られた鋭い縁辺をもつ剝片を利用したものが遺跡に残されたと考える。

彫器は樋状剝離打面が作出される明らかな彫器だが、基部への加工がほとんどなく明瞭な目的形状がない。

掻器は石刃素材で縦長の形状を呈する一群と、寸詰まりの縦長剝片や貝殻状剝片を素材として、拇指状を呈する一群がみられる。この様相は貫ノ木遺跡と一致しているが、形状のばらつきが大きい。

削器、抉入削器、鋸歯縁状削器等は機能部位のみに加工が施されている。素材には貝殻状剝片がおもに用いられ、石刃素材は少ない。そのため、形状は多様となる。

楔形石器は数量が多い。特にチャートを石材とするものが目立つ。また、楔形石器による傷が多くみられる敲石とした石器（報告番号 223・224・226・227）が特徴的に存在する。

斧形石器は蛇紋岩製で刃部に研磨が施されている。数量は少ないものの大・中・小のバリエーションがみられる。刃部加工や研磨、周縁調整は貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化に共通する特徴をもつ。

(5) 石材の概要

黒曜石が４割程度で最も多いが、チャートと無斑晶質安山岩も２割以上の数量がある。この３種の石材の集中の中心はずれるが、分布域は重なっている。

黒曜石の産地は和田鷹山群が最も多く、次いで諏訪星ヶ台群、和田土屋橋西群となる。産地群別の集中域はそれぞれ異なる。和田土屋橋西・南群は黒曜石全体の 30％弱にあたり、野尻湖遺跡群では多いといえる。同産地群が主体となる貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化との深い関わりが予想される。

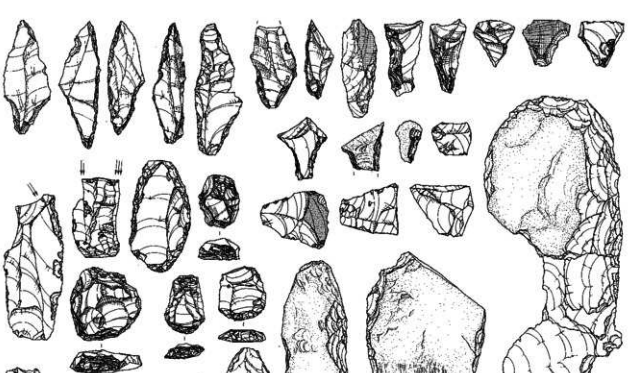
器種によって黒曜石産地群が異なる傾向がみられる。ナイフ形石器、掻器等の石刃素材の石器および石刃そのものは和田土屋橋西・南群が主体となり、台形石器、貝殻状刃器などの貝殻状剝片が主体となる石器は和田鷹山群が主体として用いられている。なお、石材による差もみられ、無斑晶質安山岩は製品となる率が低く、楔形石器にチャートが多用されている。黒曜石の産地群、石材の差を時期や集団の違いとして捉える考えもあるが、これらが密集する位置はずれるが分布域が重なる点、指標となるナイフ形石器や台形石器、掻器などの石器はこれらに関係なく分布する点、出土層位に差がない点から同一石器群とした。

(6) 剝片剝離作業の痕跡と遺跡の性格

剝片、砕片および石核が多く残され、接合も多数あることから遺跡内に多くの剝片剝離作業の痕跡がある。大きく２種の剝離技術が確認できる。１つは板状・サイコロ状・チョッピングトゥール状の石核から貝殻状剝片を剝離する技術、もう１つは鶏卵大のチャートの原石から両極打撃により貝殻状の薄手の剝片を剝離するものである。前者は貝殻状刃器や機能部位のみを加工する削器類の素材となり、後者は楔形石器の素材となる。

石刃素材の石器や微量の石刃石核が存在するが、遺跡内での石刃剝離の痕跡はほとんどない。そのため、石刃は製品として持ち込まれたと考えられる。

検出された土坑については共伴遺物がないため性格が不明である。詳しくは後節にて触れる。



第 178 図　照月台Ⅰ石器文化のおもな石器

(7) 石器文化の設定

本石器群はナイフ形石器を特徴とするナイフ形石器石器群として位置付けられる。また、器種組成には１時期の人々が持っていた道具の組み合わせを見出すことができるため、石器文化として評価できる。照月台遺跡での石器文化の設定は今回が初めてあるため、本石器群を照月台Ⅰ石器文化とする。第 178 図に主な石器を示す。

貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化同様にナイフ形石器、台形石器、斧形石器が共伴する石器群となり、相違点はあるものの、石器型式、出土層位、石材構成、黒曜石産地群の一致など共通要素の方が強い。

土坑の覆土の状況を考慮すると層位的にＶａ層に生活面をもつ AT 降灰直後の石器文化として位置付けられる。野尻湖遺跡群編年では第Ⅱ期に属す。

3　貫ノ木遺跡 H5 地点、照月台遺跡 BP 地点の成果と課題

(1) 野尻湖遺跡群の旧石器時代編年

上信越自動車道建設に伴う発掘調査の成果から野尻湖遺跡群の旧石器時代編年案を提起した（谷他 2003）。第 20 表に編年表を、以下にその概略を示す。

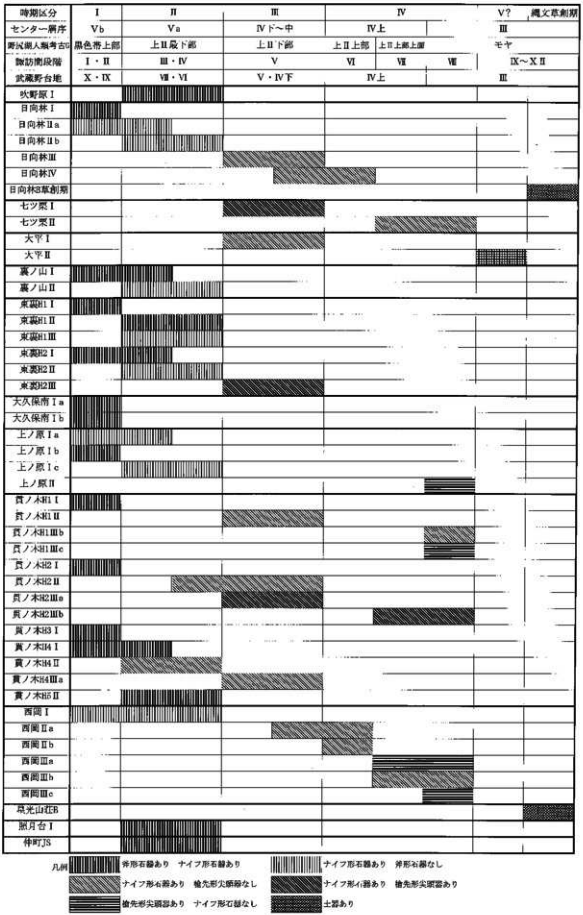
第Ⅰ期

Ｖｂ層中に生活面をもち、AT 降灰以前の後期旧石器時代初頭に位置付けられる。

斧形石器、台形石器が他地域より突出して多く、ナイフ形石器、石刃等も多く組成する。

石材は黒曜石を主体とする石器群と、それ以外の石材を主体とする石器群に分かれる。

大規模な遺跡が複数あり、日向林Ⅰ石器文化など環状ブロック群が存在する。



第 20 表　野尻湖遺跡群の旧石器時代石器群の変遷（谷他 2003 を修正）

第Ⅱ期

Ｖａ層中に生活面をもつ。第Ⅰ期の後からＡＴ降灰前後に位置付けられる。

ナイフ形石器には基部加工の一群と２側縁加工の一群に分かれる。掻器、彫器が組成に加わり、斧形石器、台形石器も組成に残る。

石材は黒曜石を主体とする石器群と、それ以外の石材を主体とする石器群に分かれる。

以前として大規模な遺跡が残される。環状ブロック群が存在するかは微妙である。

第Ⅲ期

Ⅳ層下部に生活面をもつ。ＡＴ降灰後の最終氷期最寒冷期に位置付けられる。

ナイフ形石器が主体であるが槍先形尖頭器が登場する。黒曜石やチャートを主用石材とする左右非対称の槍先形尖頭器、円形掻器を特徴とする石器群、頁岩系石材を主要石材とする「杉久保型」以前の、基部に打面を残す基部加工のナイフ形石器に彫器を伴う杉久保系石器群、無斑晶質安山岩を主要石材とする国府型ナイフ形石器を含む国府系石器群がある。

遺跡数は減り、規模も小さくなる。

第Ⅳ期

Ⅳ層上部からⅢ層下部に生活面をもつ。第Ⅲ期後の最終氷期後半から終末期に位置付けられる。

ナイフ形石器石器群とナイフ形石器を組成しない槍先形尖頭器石器群が存在する。頁岩系石材を主要石材とする杉久保型ナイフ形石器に神山型彫器を伴う杉久保系石器群、無斑晶質安山岩を主要石材とする板状剝片石核から剝離された横長剝片を素材とするナイフ形石器を特徴とする国府系石器群がある。

遺跡数は再び増すが、規模はあまり大きくない。

第Ⅴ期

Ⅲ層に生活面をもつ。第Ⅳ期と土器出現期の間を想定している。

細石器石器群と神子柴系石器群を想定しているが、ブロックとしての検出例は少なく、石器単独で出土する場合が多い。

遺跡数は減り、規模も小さい。

野尻湖遺跡群ではⅤ期の後の縄文時代草創期の遺跡は多い。

(2) 貫ノ木遺跡 H1 ～ 4 地点の石器文化

第 179 ～ 181 図に貫ノ木遺跡 H1 ～ 4 地点で設定された石器文化のおもな石器を示した。以下時期をおって概略を説明する。

第Ⅰ期

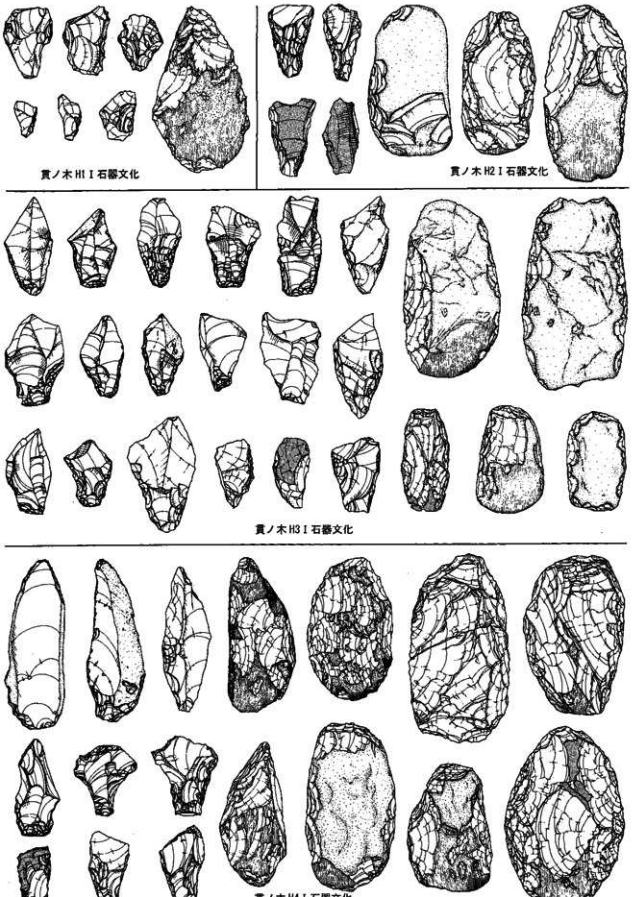
H1 Ⅰ・H2 Ⅰ・H3 Ⅰ・H4 Ⅰ石器文化が該当する。

規模の差はあるが、すべての地点に存在する。特に H3 Ⅰ石器文化と H4 Ⅰ石器文化は規模が大きい。

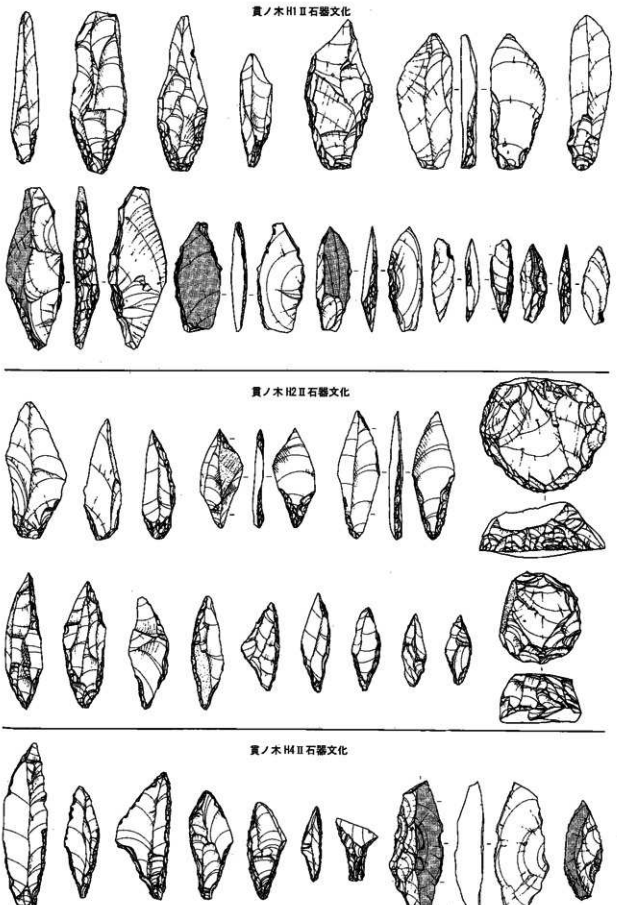
H3 Ⅰ石器文化は環状ブロック群が存在する。ナイフ形石器や台形石器の形態には、素材打面を側縁に置く「日向林型」(谷 2000a)、素材打面を基部に置き尖端がペン先形を呈する型、素材打面を基部に置き先が開き台形を呈する型の３種類があり、これに石刃素材のナイフ形石器が加わる。また、斧形石器も多い。

野尻湖遺跡群Ⅰ期にみられるナイフ形石器や台形石器の形態のほとんどが存在する特徴をもつ。石材は黒曜石が主体で、産地は諏訪星ヶ台群が主体である。

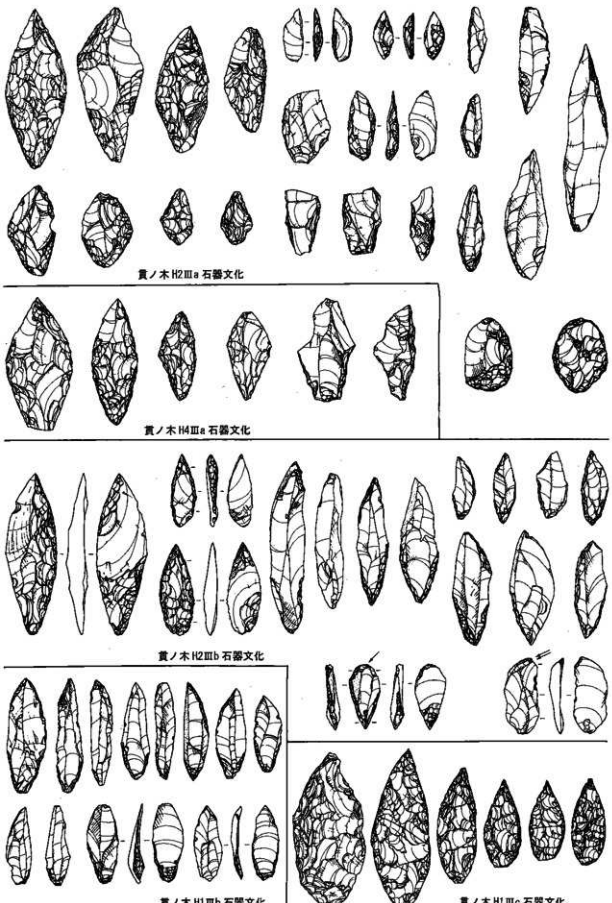
H4 Ⅰ石器文化でも H3 Ⅰ石器文化同様に多くの種類のナイフ形石器、台形石器を有すが、基部加工のナイフ形石器が顕著である。石材は無斑晶質安山岩が主体で、黒曜石、チャートも多い。H3 Ⅰ石器文化より時期的に新しい可能性が指摘されている (大竹 2000)。



第179図　貫ノ木遺跡H1～4地点で確認された石器文化その1



第180図 貫ノ木遺跡H1～4地点で確認された石器文化その2



第181図　貫ノ木遺跡H1～4地点で確認された石器文化その3

H2石器文化は台形石器や斧形石器を組成している。蓼科冷山群の黒曜石を主体とする一群が含まれる。周囲に他の時期のブロックが多くあり、区分が難しい。

H1Ⅰ石器文化は台形石器や斧形石器を組成しており、ナイフ形石器は伴わない。石材は無斑晶質安山岩が主体である。ブロック数が少なく、規模が小さい。

第Ⅱ期

H4Ⅱ石器文化が該当する。

H4Ⅱ石器文化では、頁岩系石材や玉髄の基部加工のナイフ形石器および台形石器の一群が認められ、これらは第Ⅱ期に属すと考えられる。国府系の石器群も存在するが、数量が少なく、組成に加わるかは微妙である。周囲に他の時期のブロックが多く、区別が難しい側面をもつ。

第Ⅲ期

H1Ⅱ・H2Ⅱ・H1Ⅲa・H2Ⅲa石器文化が該当する。

H2Ⅱ石器文化およびH1Ⅱ石器文化には頁岩系石材多用する基部加工のナイフ形石器石器群がみられる。基部に置かれた打面は残される場合と折断される場合があるが、第Ⅳ期の杉久保系石器群のナイフ形石器と比べると全体的に大形で厚みをもつ。他には円形拇指状の掻器と彫器が組成する。

H1Ⅱ石器文化には無斑晶質安山岩を多用した国府系石器群が存在する。背面の底面を除く剝離面は複数あり、国府型ナイフ形石器とは異なる。他には掻器が伴う。

H2Ⅲa石器文化および、H4Ⅲa石器文化には樋状剝離を有する槍先形尖頭器および左右非対称の槍先形尖頭器が特徴的に存在する。これらには小形で非石刃素材の2側縁加工のナイフ形石器が伴う。他には円形掻器が伴う。

第Ⅳ期

H1Ⅲb・H1Ⅲc・H2Ⅲb石器文化が該当する。

H1Ⅲb・H2Ⅲb石器文化では、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫器が組成する杉久保系の石器群が存在する。H2Ⅲbでは頁岩系石材が多用されているが、H1Ⅲb石器文化では黒曜石が多い。

H1Ⅲc石器文化では、黒曜石の槍先形尖頭器石器群が存在する。両面に精緻な面的調整が施され、器厚が薄く鋭い先端をもつ。平面系の最大幅が基部側に偏り、基部形は丸くなる斉一性をもつ。ナイフ形石器は組成しないようだ。

以上のようにH1～4地点では野尻湖遺跡群で確認されるほとんどの時期の石器群が確認されている。特にH2地点とH4地点第Ⅰ期～Ⅳ期に属すブロックが密度高く存在しており、区分が難しい。

石器文化の認定はブロック単位を基本としている。製品が単独で分布することはよくあるが、時期的重複が多い地区では、ブロックの範囲内に他の時期の石器が単独で入り込む可能性が考えられる。そのため、数量的に安定しないとブロックに属すと判断できないことから、所属を判断できない石器も多く存在する。

(3) 貫ノ木H5Ⅱ石器文化と照月台Ⅰ石器文化の成果と課題

貫ノ木H5Ⅱ石器文化と照月台Ⅰ石器文化は第Ⅱ期に位置付けられる。両石器文化は第Ⅱ期の石器群としてはまとまりが良く、ほぼ純粋な姿を表している。

貫ノ木遺跡H1～4地点で、第Ⅱ期に属すのは貫ノ木H4Ⅱ石器文化であった。しかし、H4地点は遺物密度が高く、ブロックの重複があることから単位の抽出が難しく、全体像がはっきりとしない。したがって、H1～4点の調査では第Ⅱ期の貫ノ木遺跡の様子が不明瞭であった。しかし、照月台Ⅰ・貫ノ木H5Ⅱ石器文化で第Ⅱ期の石器文化の様相が確認され、具体的な1様相が確認された。このことにより、貫ノ木H4Ⅱ石器文化の器種組成や石材組成をより具体化する新視点が生まれた。同時に斧形石器を組成する貫ノ木H4Ⅰ石器文化との区分を再検討する必要がでてきた。

また、貫ノ木H3地点のペン先形を呈するナイフ形石器および台形石器と、貫ノ木H5Ⅱ石器文化の同石器の共通性が注目される。前者は第Ⅰ期、後者は第Ⅱ期に位置付けられており、時間差がある。貫ノ木H5Ⅱ石器文化では石刃素材のナイフ形石器が卓越し、彫器や掻器が存在することから、今回は時期差ありとの判断をしたが、両者の石器型式差および時期差については詳細に検討する必要がある。

東裏H2Ⅱ石器文化は剝片尖頭器を含む基部加工のナイフ形石器石器群であるが、東裏H2地点は層序的区分が不可能なことから、その時間的位置付けが非常に難しかった。照月台Ⅰ石器文化の剝片尖頭器としての分類が可能なナイフ形石器（報告番号1）、左右側縁をノッチ状に作出する台形石器（報告番号32・33）は、東裏H2Ⅱ石器文化の剝片尖頭器や台形石器と非常に良く似ている。その他のナイフ形石器や台形石器、貫ノ木H5Ⅱ石器文化の同器種にも共通性が認められる。東裏H2Ⅱ石器文化は報告書でAT降灰前後からその後にやや幅をもたして時期的位置付けを行っていた（谷2000b）。この時期は野尻湖編年の第Ⅱ期から第Ⅲ期に対応するが、照月台Ⅰ・貫ノ木H5Ⅱ石器文化により第Ⅱ期のAT降灰直後に限定できるようになった。

また、東裏H2Ⅱ石器文化と分布が重なる東裏H2Ⅰ石器文化は斧形石器の存在から、第Ⅰ期相当に位置付けていた。しかし、照月台Ⅰ・貫ノ木H5Ⅱ石器文化に斧形石器が組成することから、東裏H2Ⅰ石器文化は東裏H2Ⅱ石器文化と同一石器文化で、第Ⅱ期に属す可能性が考えられるようになった。再検討が必要である。

層位的出土事例の多い関東地方での斧形石器は、第Ⅰ期に対比される武蔵野台地X層～Ⅸ層段階の石器群に組成し、第Ⅱ期に対比される武蔵野台地Ⅶ～Ⅵ層段階の出土事例はほとんどない。そのことから、日本の斧形石器のほとんどが、第Ⅰ期に並行する時期に属し、第Ⅱ期には組成しないとの意見がある（小菅2002）。

しかし、第Ⅱ期に位置付けた照月台Ⅰ・貫ノ木H5Ⅱ石器文化には斧形石器が組成している。第Ⅱ期に斧形石器が組成するかしないかは非常に重要な問題であることから、斧形石器組成の確実性について検討する。

斧形石器の多くが蛇紋岩を石材としている。蛇紋岩で他の器種が作られることはほとんどないことから、個体別資料分析では斧形石器とブロック等との共伴関係は証明できない。したがって、分布から検証する以外に方法はない。

貫ノ木遺跡では4点の斧形石器が出土している（第56～57図・番号201～204）。201はBL5008内部に位置している（第22図）。北隅近くではあるが、周囲はブロックを構成する石器に囲まれている。層位的にもVa層から出土していることから、ブロックと同時に残された可能性が高いと判断できる。BL5009はBL5008の斜面下部に位置し、両ブロックの境界は不明瞭で遺物分布域はほぼ連なっており、203はその境界付近に位置している。出土層位がⅢ層であることから、本来BL5008にあったものが、ずれ落ちてきたと考えられる。したがって、201と203はBL5008に伴っていると判断できる。BL5008は規模が大きく、ナイフ形石器、台形石器、彫器、掻器と貫ノ木H5Ⅱ石器文化の主要器種の共伴が確認できるブロックである。202はわずか5点からなるブロックに属し、204はBL5004の隅に位置することから、周囲の遺物との同時性は不明瞭で判断が難しい。

照月台遺跡では7点の斧形石器が出土している（第139～142図・報告番号212～218）。212は斧形石器および再加工に伴う調整剝片類9点の接合資料であり、9点が同時に存在したといえる資料である。すべてがBL1-1内部から出土しており（第88図）、直径3m前後の分布域をもつ、層位分布はⅣ層1点、Va層7点、Vb層1点でほぼVa層に集中し、石器文化の生活面とも一致する。平面分布、垂直分布の両者で完全にBL1-1内部に入り込んでいることから、BL1-1との同時性が証明される。214はBL1-1

内部、215はBL1-3内部から出土している（第88・90図）。215はⅡ層出土で、層位的な問題があるが、214の平面・垂直分布は完全にBL1-1に伴うといえる。213はBL1-4のはずれに位置しており、216と217は照月台Ⅰ石器文化から除外したブロックに属す。218は形態的に斧形石器でない可能性があるため、ここでは含めずに分析する。

以上、照月台Ⅰ・貫ノ木H5Ⅱ石器文化における斧形石器の出土位置の検討をした。照月台Ⅰ石器文化では2点、貫ノ木H5Ⅱ石器文化でも2点の斧形石器がブロックと分離できない分布が確認された。特に照月台Ⅰ石器文化の212は9点の接合資料で、すべてがBL1-1の範囲内に収まるといった現象ががみられた。そもそも製品はブロック隅やブロック外から検出される割合が高いことから、これだけのブロックとの共伴例があれば、その同時性は証明されたと判断できる。

貫ノ木H5Ⅱ石器文化において、斧形石器が第Ⅱ期に共伴すると証明された。東裏H1Ⅱ・吹野原Ⅰ石器文化は第Ⅱ期に位置付けられ、斧形石器の共伴問題が課題となっていたが、これは解消されたといえよう。

台形石器について

第Ⅱ期の台形石器は斧形石器同様に第Ⅰ期の流れを受けつぐ器種である。このように斧形石器が確実に第Ⅱ期にも組成するとなれば、台形石器が同様に組成し続けると位置付ける根拠となる。第Ⅱ期の台形石器には、左右側縁をノッチ状に作出する台形石器（以下側縁ノッチ状台形石器とする。）を想定していた。これらが確認された東裏H1Ⅱ・東裏H2Ⅱ石器文化では堆積環境の悪さから時期的位置付けの根拠に欠ける部分があった。

照月台Ⅰ石器文化の報告番号25・30・31・32・33は側縁ノッチ状台形石器である。これにより、東裏H1Ⅱ・東裏H2Ⅱ石器文化の台形石器が第Ⅱ期に属すものとの確証を得ることができた。

照月台Ⅰ石器文化では、側縁ノッチ状台形石器の調整加工にはプランティングと平坦剥離の両者が共存する。また、側縁ノッチ状台形石器以外にも平坦剥離により直線的な左右側縁を作出する台形石器（報告番号21～24・26～29）が共伴している。この側縁が直線的な台形石器は第Ⅰ期の一般的な台形石器の形態であり、第Ⅱ期にも組成が続くと評価できる。しかし、第Ⅱ期のこの種の台形石器は、第Ⅰ期と比べ、形態的斉一性がやや低く、小形化する傾向がみられる。この変化の傾向および側縁ノッチ状台形石器の登場は第Ⅰ期から第Ⅱ期への台形石器の型式変化として捉えられる。

彫器および掻器が第Ⅱ期に組成することが確認できた点も、照月台Ⅰ・貫ノ木H5Ⅱ石器文化の大きな成果といえよう。

彫器および掻器について

第Ⅰ期にも彫器とした器種が存在する。ただ、樋状剥離があるというだけの器種で、目的的な彫刀面の作出を確認できるものはなかった。したがって、第Ⅰ期の彫器がその後の彫器に型式的につながる器種である根拠はなく、彫器といいきれるものではない。

貫ノ木H5Ⅱ石器文化の彫器は、樋状剥離打面の作出および彫刀面以外の周縁加工の存在から、明確な彫刀面作出の目的意識が読み取れる。これらは、後の時期の彫器に確実につながっていく技術であることから、まさしく彫器と命名するにふさわしい器種といえよう。野尻湖遺跡群ではその後の杉久保系石器群で彫器が発達する。杉久保系石器群は野尻湖遺跡群を南限として、東北日本海側に分布する石器群である。東北日本海地域では層位的出土事例がほとんどなく、彫器の初源についても不明な点が多かったが、野尻湖遺跡群第Ⅱ期には確実に登場している事実は大きな成果といえる。ただし、出現経緯については第Ⅰ期の彫器との接点はいまのところ不確実で、今後の課題といえよう。

第Ⅰ期の石器群で掻器状石器とした石器が存在する（谷2000a）。これらは、刃部に厚みがなく、刃部

加工も簡素であることから、掻器的な機能を想定しながらも、その後の掻器につながるものか不確定なため、器種を分けた。貫ノ木H5Ⅱ石器文化では78点もの掻器が出土した。これらは厚みのある刃部をもち、刃部加工は器体内面までおよぶ剝離、その後の仕上げとなる微細な剝離により、丸い刃部が作出されることから、掻器として認定した。掻器についてはその後縄文時代に至るまで、継続して組成し続ける器種であり、貫ノ木H5Ⅱ石器文化により現時点での初源が第Ⅱ期にあることが確認された。照月台Ⅰ石器文化にも貫ノ木H5Ⅱ石器文化同様の掻器が存在するが、同時に掻器状石器も存在する。貫ノ木H5Ⅱ石器文化共通する和田土屋橋西・南群の黒曜石には掻器が多く、和田鷹山群および他の石材では掻器状石器が多い。この差は次項にて集団差を想定している。照月台Ⅰ石器文化での掻器、掻器状石器のあり方は、掻器状石器が掻器に淘汰されていく姿ではないだろうか。掻器状石器が掻器の素形であるかは今後の課題となるが、黒曜石産地のあり方から掻器がナイフ形石器や石刃と共に遺跡に持ち込まれていることから、掻器の出現はナイフ形石器や石刃製作技術の出現に関係が深いことが推測できる。

第2節　黒曜石の産地推定結果から

センターによる信濃町内の調査では、可能な限りの旧石器時代に属す黒曜石の産地分析を実施してきた（長野県埋蔵文化財センター 2000abcd・2002）。分析の対象は13遺跡、約15,900点となる。第21表にこれまでの産地推定結果を時期ごとに示した。なお、すべての推定は沼津工業高等専門学校の望月明彦氏によるものである。

今回の分析結果では、和田土屋橋西・南群および和田男女倉群の数の多さが特徴となる。この結果が何を意味するのか考察する。

1 土屋橋群の黒曜石

和田土屋橋西群は男女倉川の支流土屋沢の北側、土屋橋南群は南側に位置しており、両者の距離は500mに満たない。両者は元素組成が似ており、望月氏による判別図の領域も重なり合う部分あることから、完全区分は不可能である。また、土屋沢では同一地点で両者が採取できる場所があることから、ここではまとめて「土屋橋群」として取り扱う。

これまでの分析では土屋橋群の組成比は高くても5%前後で、まったくない遺跡も存在する。土屋橋群が主体となるブロックは検出されていないことから、原石を持ち込んで石器製作をするという行為はなく、大部分が製品として持ち込まれたものと考えられる。

望月氏に先駆けて、遺跡から出土する黒曜石の産地分析を行っていた藁科哲男氏の産地群は、土屋橋西群と同一地点で採取される黒曜石が和田峠第四群、和田土屋橋南群が和田峠第五群あるいは第六群と分類されている（藁科 1993）。藁科氏や望月氏はこれまでに、野尻湖遺跡群以外の全国の遺跡から出土する黒曜石の産地分析を手がけてきているが、土屋橋群、和田峠第四・五・六群の黒曜石が主体となる遺跡はない。そもそも、黒曜石原産地周辺以外で、土屋橋群が推定されること自体がめずらしく、原産地から遠くに搬出されない産地群の黒曜石と思われていた。

今回の分析では、貫ノ木h5Ⅱ石器文化707点（約50%）、照月台Ⅰ石器文化246点（約20%）と多くの土屋橋群の石器が出土している。土屋橋群が主体となるブロックも存在し、これまでにない状況が確認された。

2　和田男女倉群の黒曜石

土屋沢は土屋橋の下流約 1km で本沢とブドウ沢に合流して男女倉川となる。男女倉川両岸の段丘上には男女倉遺跡がある（信州ローム研究会 1972・長野県道路公社他 1975）。男女倉遺跡は段丘上の平坦地全域に広がる大規模遺跡で、登録上は 1 遺跡であるが、実質は遺跡群の様相を呈する。特に槍先形尖頭器が大量に出土しており、黒曜石原産地直下の集中的な石器製作が行われる遺跡群として位置付けられている（大竹幸 1989）。男女倉遺跡群に接する山には望月氏の高松沢群、ブドウ沢群、牧ヶ沢群（以下 3 者を総称して「和田男女倉群」という。）に属す産地群の原石が採取可能な路頭および散布地が存在する。これらは、藁科氏の「男女倉群」に大半が属すと思われる。和田男女倉群の黒曜石は球顆が多い特徴をもつため、目的的な剝離が難しい。東餅屋や星ヶ塔など、より良質の黒曜石採取地が近くにあるためか、産地推定で和田男女倉群・「男女倉群」と推定された石器は長野県の黒曜石原産地以外ではほとんどなかった。

第 21 表においても和田男女倉群の少なさが確認できる。

今回の分析では貫ノ木 H5 Ⅱ石器文化 100 点（約 7%）、照月台Ⅰ石器文化 61 点（約 5%）の和田男女倉群が出土している。和田男女倉群が主体となるブロックは存在せず、製品の比率が高い。

3　土屋橋群、和田男女倉群の比率の高さから考えられること

土屋橋群と和田男女倉群の黒曜石が採集できる地点は近く、男女倉谷および土屋橋周辺では両者を採集できる地点がある。したがって、両産地群の石材は一連の採取活動で得られた可能性が考えられる。原産地から遺跡までの移動中においても、狩猟民である旧石器時代人たちは生業活動は必要であり、日常的な石器製作を繰り返していたはずである。その中で石質の悪い和田男女倉群は、搬出される原石として採取時点で選択される機会が少ないことと、原石として持ち出されても欠損しやすいことから、野尻湖遺跡群のような消費地の遺跡に持ち込まれる量が少なくなる。一方、石質の良い土屋橋群は搬出される原石として選択される量が多く、石器製作による欠損のリスクも少ないことから、より長く、多く運ばれ遺跡に持ち込まれたのであろう。その結果が、貫ノ木 H5 Ⅱ・照月台Ⅰ石器文化の両産地群の比率の違いに表れていると考えられる。

照月台Ⅰ石器文化では、ナイフ形石器、掻器等の石刃を素材とする器種および石刃は土屋橋群が多く、台形石器等の貝殻状剝片を素材とする器種は和田鷹山群が多い傾向がみられた。これは貫ノ木遺跡と同様の石材採取形態をもつ集団と、それとは異なる和田鷹山群が主体となる石材採取形態をもつ集団が合流した結果の表れと考える。両者の分布域が重なりあうことは、合流後の滞在期間が長かったことを示しているのだろう。つまり、照月台Ⅰ石器文化には行動を異にしていた集団が合流して、一定期間共同生活をした痕跡が残されていると考えられる。

貫ノ木 H5 Ⅱ・照月台Ⅰ石器文化以外での土屋橋群と和田男女倉群の少なさは、土屋橋群・和田男女倉群の黒曜石が多く搬出される時期と地域が限定されていた可能性を示している。貫ノ木 H5 Ⅱ・照月台Ⅰ石器文化は第 1・2 節で示したように、AT 降灰前から前後の野尻湖第Ⅱ期に位置付けられる。該期の遺跡は男女倉遺跡周辺ではまだ確認されていないが、専業的な石器製作色の薄い、日常的な石器製作が行われた遺跡が存在すると思われる。

野尻湖第Ⅱ期は関東地方などの太平洋側に移動領域をもつ旧石器時代人の黒曜石の採取地に男女倉谷や土屋沢が含まれていなかったのだろう。一方、長野県北部や新潟県方面において土屋橋群、和田男女倉群の黒曜石が多く出土する遺跡が存在すると思われる。

時期	石器文化	和田 (WD)							和田 (WO)			諏訪	蓼科		深浦	木造	男鹿	高原山	神津	下呂	NK	不可等	分析総数	石器総数	黒曜石総数	黒曜石比率
	判別群	鷹山	小深沢	土屋橋北	土屋橋西	土屋橋南	芙蓉ライト	古峠	ブドウ沢	牧ヶ沢	高松沢	諏訪星ヶ台	冷山	双子池	八森山	出来島	金ヶ崎	甘湯沢	恩馳島							
	記号	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTM	WDHY	WDHT	WOBD	WOMS	WOTM	SWHD	TSTY	TSHG	HUHM	KDDK	OGKS	THAY	KZOB	GERO	NK					
Ⅰ	日向林Ⅰ	3179	558	38								46	102	1								45	3969	9001	6489	72.1%
	日向林Ⅱa	23					5				1												29	43	31	72.1%
	裏ノ山Ⅰ	3				1						1										0	5	16	5	31.3%
	東裏H1Ⅰ	290	1	1							2	7										5	306	461	406	88.1%
	大久保南Ⅰa	29			3	1						11	1									3	48	535	51	9.5%
	大久保南Ⅰb	404	5		1		45	2				16		1								13	487	696	565	81.2%
	上ノ原Ⅰa	80					6					1	160									15	262	756	348	46.0%
	上ノ原Ⅰb	5					2						1									1	9	786	12	1.5%
	上ノ原Ⅰその他	25	1	1	1		1					2	3										34	332	43	13.0%
	貫ノ木H1Ⅰ	79	15	2									1									2	99	961	142	14.8%
	貫ノ木H2Ⅰ	36	5	1	5	5			1		1	14	81									5	154	1186	184	15.5%
	貫ノ木H3Ⅰ	375	141	75	90	14					4	1023	15									83	1820	7533	2573	34.2%
	貫ノ木H4Ⅰ	659	128	10	19	24			1		2	104	14									37	998	7915	1733	21.9%
Ⅰ～Ⅱ	西岡Ⅰ	5					7	1				3	1									6	23	713	31	4.3%
Ⅱ	裏ノ山Ⅱ	1316	66	14	17	2	139				1	37	1									55	1648	7631	3197	41.9%
	東裏H1Ⅱ	30	1	4	5	1						3	1									1	46	257	59	23.0%
	東裏H1Ⅲ	19		2	3							14										5	43	180	57	31.7%
	東裏H2Ⅰ・Ⅱ	206	7	12	19	4			3		5	48	4									54	362	2325	483	20.8%
	貫ノ木H4Ⅱ	33	7	1	13	1						57	5	3								5	125	1255	156	12.4%
	貫ノ木H5Ⅱ	287	34	63	442	265	27		2		98	56	2							4	3	35	1318	2837	1824	64.3%
	照月台Ⅰ	540	30	13	159	87	27		8		53	187	48									37	1189	3544	1415	39.9%
	吹野原Ⅰ	42	1								2		95									3	143	251	210	83.7%
	日向林Ⅱb	8					2								1		4						15	390	16	4.1%
Ⅱ～Ⅲ	貫ノ木H2Ⅱ	30	4	1	2	2						91	8									8	146	1818	175	9.6%
Ⅲ	七ツ栗Ⅰ	26					2															1	29	616	48	7.8%
	日向林Ⅲ	1																					1	62	1	1.6%
	大平Ⅰ	31					2					1	1										35	906	62	6.8%
	東裏H2Ⅲ	119	8	7	13	5			5		5	92	4				1						259	4193	319	7.6%
	貫ノ木H1Ⅱ	13	3			1						14			1							1	33	711	92	12.9%
	貫ノ木H2Ⅲa	63	6	2	30	29			1		6	16	24									29	206	3225	378	11.7%
	貫ノ木H4Ⅲa	27	3		2							6	1									2	41	750	72	9.6%
Ⅲ～Ⅳ	日向林Ⅳ				3																	1	4	65	4	6.2%
	西岡Ⅱa	1					1					4											6	82	11	13.4%
Ⅳ	七ツ栗Ⅱ	3			1							1										1	6	341	6	1.8%
	上ノ原Ⅱ	7							1		1	3	8	2					1			7	30	543	33	6.1%
	貫ノ木H1Ⅲa	18																				0	18	44	22	50.0%
	貫ノ木H1Ⅲc	7			4	1						11										5	28	90	67	74.4%
	貫ノ木H2Ⅲb	53	10	4	1	3						66	5									13	155	1226	176	14.4%
	西岡Ⅱb				3							3	20									2	28	225	36	16.0%
	西岡Ⅲa	188	13	1	2	2	12		1			73	12	1				1				20	326	948	645	68.0%
	西岡Ⅲb	27	3		3	1	2					29	13									2	80	975	135	13.8%
	西岡Ⅲc	2										3	1					1					7	168	7	4.2%
Ⅴ	大平Ⅱ	2										1											3	70	5	7.1%
草創期	星光山荘B	1										2										2	5	1260	105	8.3%
不明	七ツ栗その他				1	1																1	3	4	3	75.0%
	日向林Bその他	3																					3	30	3	10.0%
	日向林Aその他	5																					5	22	5	22.7%
	大平Bその他	2														3							5	24	4	16.7%
	裏ノ山その他	10			4		4					7											25	46	28	60.9%
	大久保南その他														1							1	2	10	2	20.0%
	上ノ原その他											2					2					2	6	14	6	42.9%
	貫ノ木H1その他										2	208										24	287	1183	432	36.5%
	貫ノ木H2その他	47	2	3	2	20			0		2	82	10									6	174	1870	214	11.4%
	貫ノ木H3その他	115	19	2	6	8			0		3	37	4									5	199	1282	251	19.6%
	貫ノ木H4その他	300	37	9	11	8			2		3	25	3									25	423	3346	727	21.7%
	西岡その他	8	1				1					1	4									1	16	81	29	35.8%
	吹野原Aその他	6		1	2	1						11	9										30	232	31	13.4%
	貫ノ木H5その他	3					1																4	6	4	66.7%
	照月台その他	63	2		7	2	1		2	1	5	68	2				1					6	160	458	169	36.9%
Ⅰ期合計		5187	854	128	119	45	59	2	2	0	10	1225	378	2	0	0	0	0	0	0	0	209	8220	30221	12582	41.6%
Ⅱ期合計		2481	146	109	658	360	195	0	13	0	159	402	156	3	1	0	4	0	0	4	3	195	4889	18670	7417	39.7%
Ⅲ期合計		280	20	9	45	35	4	0	6	0	11	129	30	0	1	0	1	0	0	0	0	33	604	10463	972	9.3%
Ⅳ期合計		305	26	5	14	7	14	0	2	0	1	189	59	3	0	0	0	2	1	0	0	50	678	4560	1127	24.7%
Ⅴ期合計		2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	70	5	7.1%
合計		8854	1111	267	874	489	287	3	27	1	196	2487	664	8	3	3	8	2	1	4	3	575	15920	76530	24337	31.8%

第21表　野尻湖遺跡群における時期別黒曜石産地組成

第３節　石器の微細剥離痕および線状痕の観察から

石器にみられる線状痕と微細剥離痕は、使用の痕跡である可能性が高い。しかし、断定できるまでの根拠が認められる例はほとんどないことから、「使用痕」ではなく、「微細剥離痕および線状痕」とした。

デジタルマイクロスコープでの観察を選択した石器は、これらが肉眼で確認できた石器のみである。したがって、使用頻度が低い石器や、線状痕や微細剥離痕がつきにくい使用法なども考えられるため、同一器種の同一部分すべてに、観察と同じ線状痕や微細剥離痕がみられるとの判断できない。また、観察された線状痕や微細剥離痕は最終的なものであり、複数の用途があった場合には、最終的な用途による痕跡が、前段階の用途の痕跡を消している場合や、両者が混ざって残されている場合など様々な状況が考えられることから、用途や対象物の限定には至っていない。

ここでは、最終的に残されている痕跡の中で最も濃いものに注目して、刃部の運動方向および対象物の硬さを推測する。

1　ナイフ形石器・台形石器

線状痕の方向は刃部の運動方向を表し、背面と腹面の線状痕の程度の差は、刃が立っていたのか寝ていたのかを表していると考えられる。したがって、ナイフ形石器の刃部には縁辺に平行する線状痕が背面と腹面に均等にみられたことから、刃をほぼ垂直に立てて縁辺に平行して刃部を動かしたと考えられる。

また、尖端には刃部縁辺に平行する線状痕と背縁辺に平行する線状痕が交差してみられたことから、尖端を刺突に用いたと考えられる。

微細剥離痕は多様であったが、ベントタイプの開始部をもつものは対象物が柔らかく、コーンタイプの開始部をもつものは硬かった可能性が考えられる（中島 1983）。

台形石器については、ナイフ形石器ほど顕著な線状痕や微細剥離痕が残されていることはなかったが、観察した石器については、ナイフ形石器と同じ様相がみられた。また、日向林Ｂ遺跡の台形石器で観察した痕跡とも一致した（日本道路公団他 2000a）。

ナイフ形石器の基部には目的的な形態の斉一性が認められることから、着柄されていたと考えられる。柄の形状はわからないが、観察された刃部の運動方向を考慮すると、器種呼称のとおり現代のナイフ的な使用があったと考えられる。

2　彫器

彫刀面および彫刀面に接する腹面に縁辺に平行する線状痕がみられた。特に樋状剥離打面・彫刀面・腹面が接する角部を起点として、彫刀面と腹面のなす縁辺に顕著な線状痕がみられることから、同部が機能部であった可能性が高い。彫器の呼称は「彫刻刀」としての機能が想定されているが、今回の観察からはその具体像はみえなかった。

3　掻器

縁辺に直交する線状痕がみられることから、刃部は縁辺に直交する方向に運動していたと考えられる。線状痕のみられる範囲は背面および腹面の縁辺付近のみで短いことから、刃部は立っていたことが予想される。

また、刃部以外の素材時点からの鋭い縁辺にはナイフ形石器と同種の線状痕、微細剥離痕がみられるも

のが存在したことから、用途が単一ではかったことも考えられる。

刃部想定した部位が本来の刃部であるとすれば、器種呼称のとおりに「掻きとる」という用途があった可能性が考えられる。

4 削器

削器には刃部の背面と腹面にほぼ均等な縁辺に平行する線状痕がみられた。したがって、刃を立てて縁辺に平行に動かしたと判断される。刃部だけをみるとナイフ形石器と一致するが、尖端がない点、基部の作出が認められない点で大きく異なる。

5 まとめ

以上のように器種ごとの線状痕と微細剥離痕をみてきたが、今回の観察で線状痕から確認された刃部の運動方向は、我々の認定した器種に予想されている機能・用途に矛盾するものではなかった。しかし、具体的な機能や対象物の姿はまだみえない。観察事例を増すことが重要だが、黒曜石以外の石材の観察方法の確立や、光沢痕の観察などやるべきことは多い。

第４節　照月台遺跡の土坑 SK25 の評価

1　土坑の検出位置

SK25 は第１号ブロックの端に位置している。BL1-3 の遺物分布図で（第 90 図）、遺物分布の端にあることが確認できる。同一平面内に掻器が１点存在しているが、出土層位がⅢ層で、土坑覆土出土ではない。

土坑覆土から出土した遺物は微量の砕片のみである。砕片のみで BL1 と共存したとの判断はできない。しかし、BL1 と時期が異なるとした場合、土坑のみを残したことになる。土坑掘りこみ面と BL1 の生活面が一致し、接する分布状況から同時期と判断するのが妥当と思われる。

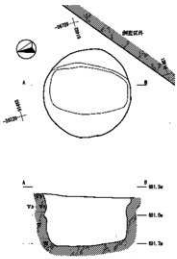
2　土坑覆土の状況

SK25 周辺では、縄文時代の陥し穴が複数検出されている。そのため、縄文時代の陥し穴の誤認と疑われる危惧がある。ここではその可能性がないことを説明する。

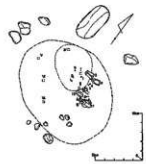
土坑の覆土のほぼ全体に AT が拡散している状況が肉眼で確認できる。野尻湖遺跡群で AT が純層やブロック状に観察できるのは底湿地のほか、極端な凹地ぐらいである。照月台遺跡の調査区内では土坑覆土以外で AT を肉眼で観察できる場所はなかった。したがって、土坑は AT が地表にあった短い期間内に埋没したと判断できる。つまり、AT 降灰直後に埋没した土坑となり、縄文時代の陥し穴でないことが証明される。

覆土はⅣ・Ⅴ・Ⅵ層がブロック状に混ざりあう状況であった。埋没時期が AT 降灰直後であれば、Ⅳ層は堆積前のため、土坑内に入り込むことはない。土坑内でⅣ層とされている土は、Ⅳ層に似ている土で、Ⅳ層そのものではないと思われる。そもそも、自然堆積によるⅣ層・Ⅴａ層・Ⅴｂ層の色調等は、地表であった時期からのものではなく、埋没後にハード化、ソフト化、黄色化などの変化が起きていると思われる。そのため、土坑内にⅣ層に類似する土が存在しても矛盾はないと考える。

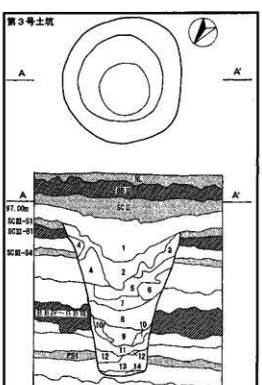
一般に遺跡の発掘現場での断面観察では、本来上下に層をなす複数種の土がブロック状に混在する場合は、人為的埋没と判断される。それに習うと本土坑も人為的埋没と判断できる。



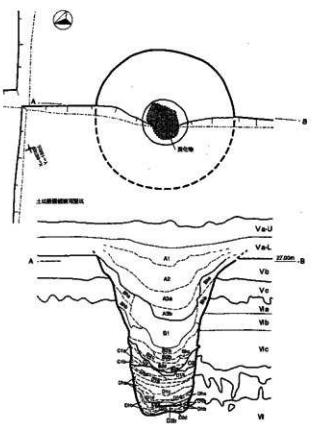
照月台遺跡 SK25



湯の里４遺跡 P-15
（北海道埋蔵文化財センター 1985 より）



初音ヶ原 A 遺跡第Ⅳ文化層第３号土坑
（三島市教育委員会 1999 より）



打木原遺跡 SK08
（横須賀市教育委員会他 2002 より）

縮尺４遺跡共通

第 182 図　旧石器時代の土坑の比較

3　土坑の類例

SK25は開口部がやや膨らみをもつ直径約90cmの円形を呈し、底部が直軸約70cm・短軸約40cmの隅丸方形、深さ約50cmの規模をもつ。性格として「陥し穴」「墓坑」「貯蔵穴」の3つの可能性が検出当初から考えられ検討されてきた。第182図に照月台遺跡のSK25と国内の旧石器時代の土坑の例を同一縮尺で示した。

静岡県の足鷹・箱根山麓では陥し穴と考えられている多くの土坑の検出例が知られる。特に三島市初音ヶ原A・B遺跡では60基の土坑が複数の列をなして検出されている。これらは、AT下位の第Ⅲ黒色帯から検出されている。より下層の第Ⅴ黒色帯からは、中見代第Ⅰ遺跡などで野尻湖遺跡群のⅤb層の石器群および武蔵野台地Ⅸ・X層段階に対比される石器群が検出されている。照月台遺跡はAT降灰直後に位置付けられることから、初音ヶ原A・B遺跡の土坑の方が古いと判断できるが、旧石器時代的年代観では近い時期として認識されよう。

初音ヶ原A・B遺跡の土坑の平均的規模は開口部が直径140cmの円形を呈し、底部が直径61cmの円形、深さ136cmの規模をもち、逆茂木等の施設はない。

神奈川県横須賀市打木原遺跡でも陥穴状土坑9基が報告されている（横須賀市教育委員会他2002）。土坑は相模野台地B3に相当するⅤa層下部から掘り込まれている。ATは一枚上層のⅣ層に極大偏がくるため、AT降灰以前の土坑となる。平面形、断面形の形状や規模は足鷹・箱根山麓の土坑との共通性が強く、列状に配置されていることから陥し穴と考えられる。

静岡県、神奈川県の陥し穴と考えられている土坑の類例を挙げたが、以下の点で、照月台遺跡のSK25と大きく異なる。平面形が大きく掘り込みが深い点、自然埋没と判断できる点、近くにブロックが存在しない点である。

北海道渡島半島南西部の知内町に位置する湯の里4遺跡では、墓とされる土坑1基が報告されている（北海道埋蔵文化財センター1985）。底部近くで検出されたため、壁の立ちあがりや断面観察の記録がないが、調査所見によると30cm以上の深さが予想されている。土坑内部からは副葬品と考えられる垂飾2点、玉3点の他、石刃石核4点、剝片5点、礫1点が検出されている。層位的な時期決定が難しい状況であるが、土坑周囲にはA群とされる有茎尖頭器を含む尖頭器石器群が分布していることから、旧石器時代終末期から縄文時代草創期に位置付けられる。同遺跡から検出されている台形石器についてはB群とされている峠下型細石核を含む石器群の分布域内で検出されている。A群とB群の分布域が異なることから、土坑と台形石器も直接的な関係はないと思われる。湯の里4遺跡の土坑には副葬品が伴うことから墓と考えられるが、照月台遺跡の土坑に遺物は伴わない。また、湯の里4遺跡の土坑は規模や埋没過程がよくわからないため対比は難しい。

国内で旧石器時代の貯蔵穴とされる類例は今のところない。貯蔵穴との判断には土坑内から食料と考えられる有機質の物質検出が必要不可欠と思われるが、酸性土壌である国内で、検出の期待は薄い。SK25の規模や形状は貯蔵穴としての利用も考えられるが、旧石器時代に食料を貯蔵する行為があったかどうかも不明の中、貯蔵穴との判断はできない。

4　土坑の性格

結局のところSK25は現時点での国内の類例はない状況である。陥し穴とされる類例とは、形状、規模、覆土の埋没状況が大きく異なることから、SK25は陥し穴ではないと判断される。ほとんどの旧石器時代遺跡には土坑や掘り込みを伴う遺構が検出されないことから、SK25は非日常的な行為として構築された

と考えられる。人為的埋没の状況を考慮すると貯蔵穴よりは、墓の可能性が高そうだが決定打に欠ける。

SK25の性格を知るための自然科学分析を実施したが、特定できるような結果は得られていない。

SK25の性格を判断するには、新たな類例が必要となる。

第５節　貫ノ木遺跡の隆起線文土器

1 貫ノ木遺跡の隆起線文土器

1個体21片の上器が検出された。底部はないものの、口縁部から胴部下半までの破片があり、全体の30～40%にあたる。直径1m以内の範囲に集中して検出され、同範囲に他の遺物はない。出土層位と破片個々の出土座標の記録はあるが、出土状況写真や詳細な図面の記録はない。出土層位はⅢ層で、垂直分布は表裏縄文土器等の土器片より30～60cm深い位置となる。

器厚4～5mmで底部近くはやや厚い。口径・器高とも約30cm前後の大きさをもつ。口縁部はわずかに外反するがほぼ垂直に立つ。口唇部は平らに整形された後に、外面との境に直径4mm前後の棒状工具の腹部を7～8mmの間隔で斜めに押し付ける刻みが施されている。口端部と外面の境は一部に粘土帯の重なりがみられるが、粘土紐が貼りつけられたものか、整形時にはみ出たものか、はっきりとわからない。

口縁から垂下する隆帯が4から5単位確認される。隆帯は幅5mm、厚さ3mm前後で、剝がれ落ちている部分があることから明かな貼り付けと判断できる。

垂下する隆帯は口縁から約55mm下り水平に貼りつけられた隆帯と合流する。水平方向の隆帯の大きさと施文は垂下する隆帯と同一である。

外面および内面は指頭圧痕による凹凸がある。器厚が薄いのはこの指頭圧痕により、薄くの伸ばされたためと思われる。指頭圧痕の後に横方向に擦った跡が確認され、この擦痕が顕著な部分は条痕状を呈す。

色調は橙色を基調とするが、黒ずんで褐灰色や黒褐色となる部分がある。土器内面には炭化物が付着している部分がある。

2 周辺地域の様相

野尻湖遺跡群では貫ノ木遺跡の隆起線文土器に前後する時期の遺跡が複数知られている。隆起線文土器は狐久保遺跡（小林1968）、仲町遺跡（野尻湖人類考古グループ1987）、貫ノ木遺跡H3地点（長野県埋蔵文化財センター2000d）、東裏遺跡特別養護老人ホーム地点（未報告[註1]）で出土しているが、これらは、調査範囲の制約や単独出土のため全容が不明瞭である。最もまとまった資料として星光山荘B遺跡（日本道路公団他2000d）があげられる（第184図）。同遺跡は野尻湖の北西約2kmに位置し、隆起線文土器片1284点と、それに伴う石器1262点が検出されている。おもな石器に「神子柴型石斧」の範疇に含まれる局部磨製石斧18点のほか、石鏃大の有茎尖頭器31点、槍先形尖頭器34点がある。隆起線文土器は隆帯の細い「微隆起線文」あるいは「細隆起線文」に類するもので、隆帯の貼り付けが確認できない。口縁に平行する複数の隆帯をもつものを基本とするが、斜走あるいはその他独特の文様がみられることから、隆起線文土器でも新しい段階に位置付けられる。局部磨製石斧は「神子柴型石斧」としては、小形で華奢な印象をもたせられるものが多く、「神子柴型石斧」としては新しい段階に位置付けられるものと思われる。

星光山荘B遺跡のほか、周知の隆起線文土器は貫ノ木遺跡とくらべ隆帯が細かったり、隆帯の割り付けや施文方法に違いがあり、現時点で同一型式と判断できるものはないといえよう。しかし、前後する時

註1：信濃町教育委員会1993年調査

期の資料が豊富な地域なだけに今後の類例が期待できる。

「神子柴型石斧」は、狐久保遺跡（小林 1968）、砂畑遺跡（森嶋 1968）、立が鼻遺跡（森嶋 1968）、小丸山遺跡（森嶋 1968）で各1点ずつ計4点が表面採集されている。発掘資料では上ノ原遺跡北部高校跡地地点で1点（中村 1992a・b）、七ツ栗遺跡H地点で1点（長野県埋蔵文化財センター 2000a）、大平B遺跡で2点（長野県埋蔵文化財センター 2000a）、東裏遺跡H2地点で2点（日本道路公団他 2000b）の合計7点の他、仲町遺跡BP地点（長野県埋蔵文化財センター 2004）でも複数の「神子柴型石斧」が出土している。また、「神子柴型尖頭器」も海端遺跡で2点の採集品が知られる（中村 1988）。

野尻湖の北東40～50kmに位置する新潟県中魚沼郡の津南町と中里村には、信濃川による河岸段丘上に旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が多く立地している。特に本ノ木遺跡、卯ノ木遺跡、田沢遺跡、壬遺跡など学史的に著名な遺跡も含まれ、野尻湖遺跡群に勝るとも劣らない縄文時代草創期の遺跡密集地域となっている。また、野尻湖と津南・中里は同じ信濃川水系に属し地域的つながりも予想される。

中里村久保寺南遺跡では1,000点を上回る隆起線文土器片および石器が検出されている（佐藤・笠井 2000・佐藤 2001・第183図）。久保寺南の隆起線文土器は文様割付が大きく異なるものの、器形、指頭圧痕と擦りによる器面整形、隆帯の貼り付けおよび隆帯への棒状工具による施文などの共通点も認められる。石器群は大形の槍先形尖頭器、局部磨製石斧、掻器などが組成している。槍先形尖頭器や削器の特徴は長野県飯山市の関沢遺跡（飯山市教育委員会 1981）、長野県栄村の横倉遺跡（神田・永峯 1958）との共通性が強い。局部磨製石斧はリダクション後のようで原形がはっきりしないが、槍先形尖頭器や石刃等のあり方から、神子柴系石器群の範疇に含まれると思われる。

現時点の貫ノ木遺跡の隆起線文土器の類例は久保寺南遺跡が最も近く、共伴石器も久保寺南に近いものが想定されよう。

3 放射性炭素年代測定値の意義と課題

貫ノ木遺跡の隆起線文土器に付着した炭化物の放射性炭素年代を測定した結果、16,005～14,125calBP[註1]の年代値が得られている（第4章第1節参照）。

国内最古の土器として知られている青森県東津軽郡蟹田町大平山元Ⅰ遺跡の土器の放射性炭素年代は5点の土器付着物から得られているが、誤差1σの範囲内で最も古い年代値が16,750～14,670calBPである（中村・辻 1999）。貫ノ木遺跡の土器はほぼこの年代内に含まれてしまうことから、大枠で同時期の炭素年代値をもつといえよう。

大平山元Ⅰ遺跡の測定対象となった5点の土器片は1個体と報告されている（谷口 1999）。したがって、大平山元Ⅰ遺跡の土器に付着した炭素の年代値は同じになるはずだが、約2,000年もの年代値の開きがある。測定を行った中村俊夫氏によると測定試料が微量であったために、汚染の程度の差により年代値の開きが生じたとされている。現実問題として、まったく同じ状態に試料を調整することは不可能と思われることから、試料の状態やサンプリング方法によって数値に誤差が生じることを認識する必要がある。また、時期や地域によって^{14}Cの減ずる量が異なることも確認されているため、放射性炭素年代測定法自体も完璧とはいえない。さらに、暦年較正については、幾度となくプログラムのバージョンアップが繰り返され、そのたびに数値が異なる現実もある。

しかし、大局的にみればこれまでの放射性炭素年代測定値は、型式学的編年と大きく矛盾することはなく、1つの指標となることも事実である。考古学的な立場からは前記した問題を認識した上で型式学的編年やその他の年代測定方法とも比較し、総合的に年代を判断していく必要があろう。

註1：Calib4.4を使用して、誤差は1σBCをBPに換算した数値。

貫ノ木遺跡の隆起線文土器は久保寺南遺跡に類例が求められる。久保寺南遺跡では隆起線文土器に神子柴系の石器群が共伴している。星光山荘B遺跡も神子柴系石器群の範疇に含まれるが、石鏃大の有茎尖頭器を組成することから、久保寺南の石器群より新しいと考えられる。星光山荘B遺跡の隆起線文土器片の付着物から得られた放射性炭素年代値は14,200calBP前後で(日本道路公団他 2000d)、久保寺南遺跡の隆起線文土器の付着物から得られた放射性炭素年代値は15,100calBP前後となり(佐藤 2001・工藤 2003ab)放射性炭素年代値との前後関係が一致している。久保寺南遺跡と貫ノ木遺跡の炭素年代値も考古学的な尺度としては近い値として評価できよう。

したがって、貫ノ木遺跡の放射性炭素年代値は型式的な変遷や、これまでの放射性炭素年代値と整合するといえる。

4 土器出現期の諸問題

貫ノ木遺跡の放射性炭素年代値は隆起線文土器としては最も古い値で、初源の土器とされる無文土器に迫るものである。この値が本当だという前提に立つと様々な課題が浮かび上がる。

隆起線文土器の古い年代値が得られたことから、単純に一番古い土器の仲間に隆起線文土器が食い込んでくるとの解釈ができる。しかし、層位的事例や石器群の比較検討から無文土器が隆起線文土器に先行すると考え方が主流のようである。ただ、無文土器とされている多くは、断片的な破片であることから有文土器の無文部である可能性を否定できないと思われる。

貫ノ木遺跡と星光山荘B遺跡のように同じ隆起線文土器でも時間幅をもつことが確認されている。隆起線文土器より、無文土器が先行するとされるのは、南関東や西日本の洞窟遺跡での層位的出土事例が根拠となっている。しかし、これらの層位的に比較可能な資料が古い型式の隆起線文土器とは限らないのではないだろうか。

野尻湖遺跡群の日向林B遺跡には神子柴系石器群と同一の分布範囲から無文土器が検出されている。この土器は1個体か2個体の破片であるが、破片数が少なく本当に無文かどうかはわからない資料である。この土器に伴う石器は数が少なく石斧や槍先形尖頭器がないものの、大形の石刃素材削器や掻器から神子柴遺跡に類似する資料と思われる。神子柴遺跡や唐沢B遺跡などの大形尖頭器や大形の神子柴形石斧を組成する神子柴系石器群に土器が組成するかどうかは微妙なところであるが、それに近い状況から、石器編年的に久保寺南遺跡に先行すると思われる。そうなると、日向林B遺跡の石器群に伴う無文土器は久保寺南遺跡に近い貫ノ木遺跡の隆起線文土器より古いと考えられる。その判断が正しければ、日向林B遺跡の年代値は貫ノ木遺跡より古いということになる。

同様に久保寺南遺跡についても、より古いと考えられている土器群が想定されている(佐藤 2001)。

日本列島の出現期の土器に伴う石器群には異なる複数の系統が存在するように思える。大平山元Ⅰ遺跡および久保寺南遺跡では神子柴系石器群が伴っており、貫ノ木遺跡もこれに類すると想定される。

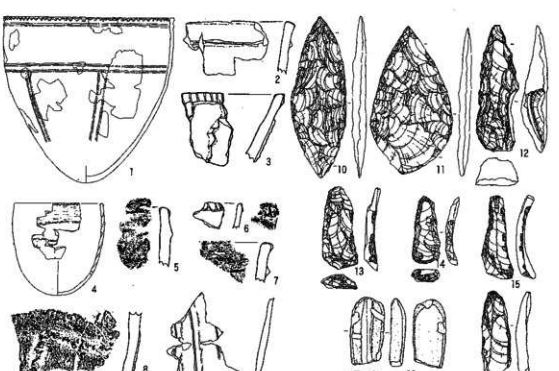
長崎県福井洞穴(芹沢・鎌木 1965)、長崎県泉福寺洞穴(麻生 1984)、神奈川県月見野遺跡群上野遺跡第1地点(大和市教育委員会 1986)等では細石器に土器が伴う。

神奈川県宮ヶ瀬遺跡群北原No.10・11北遺跡(かながわ考古学財団 1998)では柳葉形を主体とする石器群に無文土器が伴っている(かながわ考古学財団 1998)。無文土器周辺から検出された炭化物の放射性炭素年代測定値は、大平山元Ⅰ遺跡や貫ノ木遺跡に近い値が得られており注目される。同様の土器および石器群は神奈川県吉岡遺跡群C区・D区(かながわ考古学財団 1999)、東京都前田耕地遺跡(前田耕地遺跡調査会 1977)にみられる。これらの石器群は柳葉形尖頭器が卓越し、神子柴系石器群とは異なると考えられる。これらを柳葉形尖頭器石器群と称しておく。

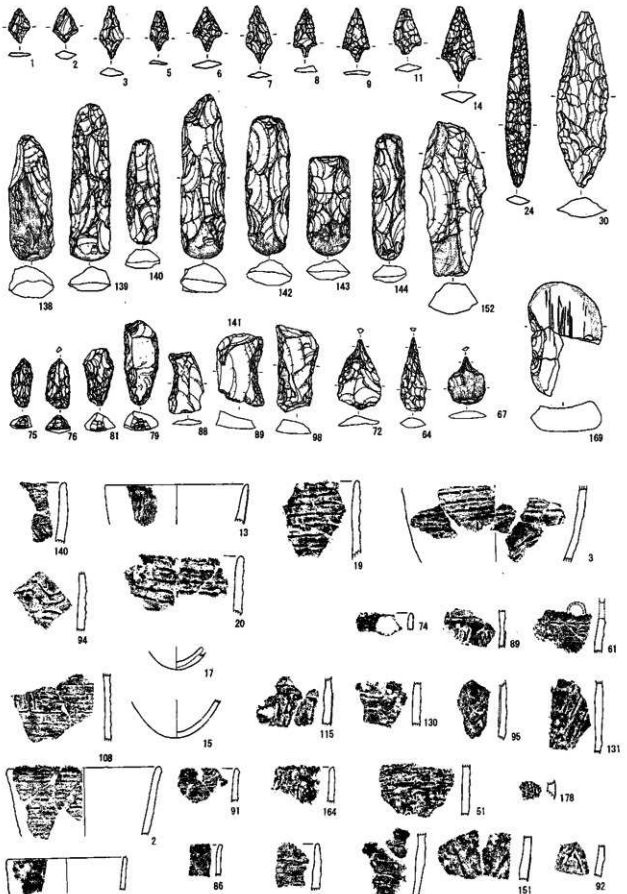
神子柴系石器群、細石器石器群、槍葉形尖頭器石器群はそれぞれ多くの類例を有し、時間幅をもつ変遷過程も想定される。細石器石器群と神子柴系石器群は基本的に相容れない状況を示すが、時間的にはかなり並行して存在していたことが知られている。このように土器出現期にみられる石器群も一様ではなく、非常に複雑で混沌としたあり方を示すようだ。日本列島に最初の土器を持った人々はどんな石器を使っていたのだろうか。

近年、野尻湖底から採取されたボーリングコアの試料を用いて、25,000～6,000年前の気候変動を示す論考が発表されている（公文・河合・井内 2003）。有機炭素・全窒素の含有率と花粉分析に基づいて気候変動を推定したデータである。貫ノ木遺跡の15000calBP前後の時期は、晩氷期に温暖化が進む中で寒の戻りといわれる寒い時期に相当している。公文らはこの時期が北欧のヤンガードリアス期に対比される可能性を示唆しているが、北欧のデータと比べ年代値が2,000～3,000年新しくずれている。同様に、福井県三方湖や水月湖とのデータとの年代のずれがあり、問題点として指摘されよう。しかし、いずれのデータをとっても、貫ノ木遺跡の土器から得られた炭素年代値は、急激な温暖化の前に位置している。植生等は気候変動よりやや遅れて変化することから、当時の気候は旧石器時代的な寒冷な気候であったと判断できる。

貫ノ木遺跡の隆起線文土器により、出現期の土器の様相が明らかになったわけではない。しかし、出現期の土器の姿に近づくための貴重な資料となることは間違いなく、今後の研究課題が明確化してきたといえるのではないだろうか。



第183図　久保寺南遺跡の遺物（縮尺不同・佐藤 2001より）



第 184 図　星光山荘Ｂ遺跡の遺物（縮尺不同）

第６章　結語

センターによる貫ノ木遺跡の調査は平成５年に H4 地点で始まった。調査当初から大量の旧石器時代の石器が出土する状況であった。同時に調査が行われていた日向林Ｂ遺跡では環状ブロック群から多量の斧形石器が出土し脚光を浴びていたが、貫ノ木遺跡の遺物密度、遺物分布範囲は日向林Ｂ遺跡を遥かに上回る状況であった。

調査が進むとその理由が明確化される。日向林Ｂ遺跡は単独時期の遺跡であったの対して、貫ノ木遺跡は多くの時期が重なりあう遺跡であることが判明した。後期旧石器時代初頭から縄文時代草創期までの遺物が、平面的・層位的に複雑に重なりあう状況で、１時期１単位を抽出するのが非常に難しく、評価が困難な状況も多々あった。

整理作業が進む中、平成 11 年に国道 18 号バイパス建設第２期工事に先立つ貫ノ木遺跡 H5 地点および照月台遺跡 BP 地点の調査が実施された。両調査とも前回の貫ノ木遺跡の調査同様に大量の旧石器時代の石器が出土する状況であり、遺跡規模がさらに大きくなることが確認された。

10 年にわたる貫ノ木遺跡および照月台遺跡の調査成果の概要を挙げまとめとする。

旧石器時代（野尻湖第Ⅰ期：約３万年前）

貫ノ木遺跡では非常に多くの石器が各地点から出土しており、石器数量、分布範囲、面積とも国内最大級である。特に H2・H3・H4 地点では斧形石器や砥石、ナイフ形石器や台形石器など当時の野尻湖遺跡群にあるすべての器種が多量に出土しており、大規模なブロック群が重複して存在することがわかってきた。野尻湖および黒姫山の裾に広がる低地帯を見渡せる丘陵上に位置する貫ノ木の地を、狩猟の拠点として利用していたと考えられる。

旧石器時代（野尻湖第Ⅱ期：約 2.5 万年前）

貫ノ木遺跡 H2 ～５地点、照月台遺跡 BP 地点で確認されている。貫ノ木遺跡 H2 ～４地点では Ｖｂ層の石器群との区分が難しかったが、本書掲載の貫ノ木遺跡 H5 地点と照月台遺跡 BP 地点の成果により、その様相がみえてきた。

企画的な石核調整が施された石刃石核が現われ、どの遺跡にも石刃を素材とするナイフ形石器がみられるようになる。一方、貝殻状剥片を素材とする台形石器も依然として使用されている。その調整加工はブランティングが多く、ノッチ状の側縁が作出されるものが特徴的に存在する。斧形石器も数量は減るようだが一般的に組成する。この時期の斧形石器、台形石器組成は編年が進んでいる関東地方にはみられない様相であり、今後論議を要する部分であるが、東北日本海側の様相の強い野尻湖遺跡群の石器群の特色として評価されていくことと思われる。

照月台遺跡 BP 地点の土坑 SK25 は、性格判断が難しいが旧石器時代の土坑の発見例は全国でも稀で貴重な記録となる。

旧石器時代（野尻湖第Ⅲ・Ⅳ期：約２万年前）

多様相の石器群が登場する。貫ノ木遺跡 H1・2・4 の各地点で確認されている。

頁岩系の石材を主体して、基部加工のナイフ形石器、彫器を特徴的に組成する東北地方との関連が強い石器群が H1 地点および H2 地点に存在する。無斑晶質安山岩を石材として、板状の剥片から連続して剥離される横長剥片を素材とするナイフ形石器を特徴とする近畿地方との関連が強い石器群が、H1 地点および H4 地点にある。また、槍先形尖頭器および２側縁加工のナイフ形石器を組成する中部高地および関

東地方との関係が強い石器群がH2地点とH4地点にみられる。

あたかも、東北、近畿、関東の各地域から人々が集まってきたかのような様相を呈しているが、野尻湖遺跡群が地域石器文化の接点として重要な場所であったことを示しているものと思われる。

旧石器時代末～縄文時代草創期（野尻湖Ⅴ期～縄文時代草創期：約1.5万年前）

前時期とくらべると遺物数、規模とも縮小するが、依然として貫ノ木遺跡において該期の遺物群が出土する。H1地点では黒曜石製の精緻な槍先形尖頭器を主体とする石器群が出土している。また、各地点において、神子柴系石器群に属す斧形石器が単独で出土している。

貫ノ木遺跡H5地点で出土した隆起線文土器は、放射性炭素年代測定により約15,500年前（calBP）と推定された。この年代値は青森県大平山元Ⅰ遺跡の値にほぼ並び、全国で最古級の値となる。野尻湖遺跡群には型式学的に前後すると思われる土器が出土していることから、今後の出現期の土器研究にとって重要な資料となる。

まとめ

以上のような成果を得ることができたが、開発に伴う緊急発掘調査の性格上十分な記録保存ができたとはいえない。特に2000年に発覚した「旧石器捏造事件」以来、発掘現場の記録の重要性が指摘されてきている中、本来必要であるはずの石器出土状況写真およびブロックの検出状況写真がほとんどない点は深く反省するところである。また、図化されない石器の法量を計測する時間がとれなかった等至らぬ点が多々ある。ただ、今回の資料を現在の研究の表舞台ににあげてやる責務はなんとか果たせたかと思う。

平成5年に始まった上信越自動車および国道18号野尻バイパス関連の発掘調査も、本書と共に刊行される「仲町遺跡」「川久保遺跡」の報告書刊行をもって終了することとなる。平成12年3月には上信越自動車道建設に伴う発掘調査の報告書が刊行され、その成果が公表されている。これらと共に今後の研究に本資料が活用されていくことを望む限りである。

貫ノ木遺跡H5地点隆起線文土器出土地点現況（2003年12月24日撮影）

引用、参考文献

赤羽貞幸 1996「野尻湖の生い立ちとその変遷」『アーバンクボタ』35

麻生 優編 1984『梁福寺洞穴の発掘記録』築地書館

安蒜政雄 1979「2 石器の形態と機能」『山本考古学を学ぶ』(2) 有斐閣選書

稲田孝司 2001「遊動する旧石器人」『先史日本を復元する』1　岩波書店

大竹幸恵 1989「尖頭器文化と遺跡群の形成」『長野県考古学会誌』59・60

大竹憲昭 1989「長野県の石斧」『旧石器時代の石斧（斧形石器）をめぐって』北陸旧石器文化研究会

大竹憲昭 2000「第 5 章　成果と課題」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15 信濃町内その 1 貫ノ木遺跡・西岡 A 遺跡 旧石器時代編』

大竹憲昭 2003「移行期石器群の変遷」『季刊考古学』83

岡本東三 2003「多岐亡羊の縄紋文化起源論」『季刊考古学』83

織笠 昭・野尻湖発掘調査団 1986「長野県野尻湖遺跡群の編年と地域的様相」『日本考古学協会第 52 回総会研究発表要旨』

鎌木義昌・片沢長介 1965「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3-1

神田五六・永峯光一 1958「奥信濃・横倉遺跡」『石器時代』第 5 号

工藤雄一郎 2003a「更新世終末から完新世移行期における考古学研究の諸問題」『古代文化』55-6

工藤雄一郎 2003b「細石刃石器群の年代に関する諸問題」『シンポジウム 日本の細石刃文化Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－』

公文富士夫・河合小百合・井内美郎 2003「野尻湖湖底堆積物中の有機炭素・全窒素含有率および花粉分析に基づく約 25,000 ～ 6,000 年前の気候変動」『第四紀研究』42-1

小菅将夫 2002「Ⅰ岩宿時代研究の開始と磨製の石斧」『鍛古の磨製石器－岩宿時代Ⅰ期の石斧の謎』笠懸野岩宿文化資料館第 35 回企画展展示図録

小林　孚 1968「長野県上水内郡信濃町弧久保遺跡緊急発掘調査概報」『信濃』20-4

酒井潤一 1996「野尻湖と最終氷期の研究」『アーバンクボタ』35

佐藤宏之 1988「台形様石器研究序説」『考古学雑誌』第 73 巻第 3 号

佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房

佐藤雅一・笠井洋祐 2000「新潟県中里村・久保寺南遺跡の調査概要」『第 12 回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』

佐藤雅一 2001「2. 信濃川上流域の遺跡と遺物の様相」『長岡市立科学博物館開館 50 周年記念特別展示図録 重要文化財考古資料展－火焔土器と小瀬ケ沢・室谷洞窟出土品－』

佐藤雅一 2003「遺跡の立地と集団の動き－新潟県・信濃川上流域における活動痕跡の様相－」『季刊考古学』83

白石浩之 1980「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 18

白石浩之 2003「縄文文化のはじまり」『季刊考古学』83

鈴木敏中 1999「第 2 節　第Ⅳ文化層の土坑について」『初音ケ原遺跡』三島市教育委員会

須藤隆司 1986「群馬県岩塚遺跡の石器文化－ナイフ形石器の型式学的考察－」『明治大学考古学博物館館報』No.2

砂出佳弘 1983「石斧について」『神奈川考古』第 15 号

諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24

芹沢長介・麻生優 1953「北信、野尻湖底発見の無土器文化」『考古学雑誌』39-2

芹沢長介 1986『旧石器の知識』考古学シリーズ 11　東京美術

谷 和隆 1995「野尻湖遺跡群における先土器時代の石器石材」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4

谷 和隆 1995「野尻湖遺跡群と石斧」『考古学ジャーナル』No.385

谷 和隆 2000a「第 7 章　成果と課題」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15 信濃町内その 1 日向林 B 遺跡・日向林 A 遺跡・七ツ栗遺跡・大平 B 遺跡 旧石器時代編』

谷 和隆 2000b「第 6 章　成果と課題」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15 信濃町内その 1 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡 旧石器時代編』

谷 和隆 2002「第 5 章　成果と課題」『県単道路改良（一）古間（停）線埋蔵文化財発掘調査報告書　－信濃町内－　吹野原 A 遺跡』

谷 和隆・大竹憲昭 2003「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『第 15 回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』

谷口康浩 1999「長岩久保文化期の諸問題」『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団編

戸沢充則 1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1

長崎潤一 1990「後期旧石器時代前半期の石斧－形態変化論を視点として－」『先史考古学研究』第 3 号

中島庄一 1983「石器Ⅰ　使用痕」『縄文文化の研究』第 7 巻

中村由克 1988「昭和 62 年度に野尻湖博物館によせられた考古資料」『信濃考古』105

中村由克　1992a「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅰ）」『考古学ジャーナル』342

中村由克　1992b「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅱ）」『考古学ジャーナル』344

中村由克 1995「長野、新潟における石器石材について」『石器石材～先間実の原石とその流通を中心として～』第 3 回岩宿フォーラム予稿集

中村由克 2000「信濃町吹野原 A 遺跡の 11 年度調査」第 12 回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨

中村俊夫・辻誠一郎 1999「青森県東津軽郡蟹田町大平山元Ⅰ遺跡の土器破片表面に付着した微量炭化物の加速器 ^{14}C 年代」『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団編
橋本勝雄 1995「関東東南部における後期旧石器時代前半期の石斧」『考古学ジャーナル』No.385
林茂樹、樋口昇一、森嶋稔、佐沢浩、小林学、畑川亮、北村直次 1970「杉久保A遺跡緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』第8号
森嶋 稔 1968「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』20-4
矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第1号
渡辺哲也・中村由克 1992「信濃町貫ノ木遺跡の調査」『第5回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』
藁科哲男 1993「第4節男女倉遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析」『長野県黒曜石原産地遺跡分布調査報告書(和田峠・男女倉谷)Ⅲ』和田村教育委員会
飯山市教育委員会 1981『太子林・関沢遺跡』
大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団 1999『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』
かながわ考古学財団 1998「宮ヶ瀬遺跡群XV」かながわ考古学財団調査報告41
かながわ考古学財団 1999「古淵遺跡群Ⅷ」かながわ考古学財団調査報告48
地学団体研究会編 1996『新版地学辞典』平凡社
信濃町誌編纂委員会 1968『信濃町誌』
信濃町教育委員会 1995『貫ノ木遺跡、日向林B遺跡（個人住宅地点）発掘調査報告書』
長野県道路公社・和田村教育委員会 1975『男女倉ー国道142号新和田トンネル有料道路事業地内緊急発掘調査報告書』
長野県埋蔵文化財センター他 1998『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 貫ノ木・西岡A』
長野県埋蔵文化財センター他 2000a『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代編』
長野県埋蔵文化財センター他 2000b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡 旧石器時代編』
長野県埋蔵文化財センター他 2000c『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代編』
長野県埋蔵文化財センター他 2000d『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2 星光山荘A遺跡・星光山荘B遺跡・西岡A遺跡・貫ノ木遺跡・上ノ原遺跡・大久保南遺跡・裏裏遺跡・裏ノ山遺跡・針ノ木遺跡・大平B遺跡・日向林A遺跡・日向林B遺跡・七ツ栗遺跡・普光田遺跡 縄文～近世編』
長野県埋蔵文化財センター他 2000e『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2 信濃町データ編』
長野県埋蔵文化財センター他 2002「県単道路改良(一)古間(停)線埋蔵文化財発掘調査報告書 ー信濃町内ー 吹野原A遺跡』
野尻湖人類考古グループ 1987『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』野尻湖発掘の考古学的成果 第1集
野尻湖人類考古グループ 1990『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅱ』野尻湖発掘の考古学的成果 第2集
野尻湖人類考古グループ 1994「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告』第2号
野尻湖発掘調査団 1975『野尻湖の発掘 1962-1973』共立出版
北陸旧石器文化研究会 1989「旧石器時代の石斧（斧形石器）をめぐって』
北海道埋蔵文化財センター 1985『湯の里遺跡群』ー津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書ー北埋調報18
前田耕地遺跡調査会 1977『前田耕地遺跡Ⅰ』
三島市教育委員会 1999『初音ヶ原遺跡』都市計画道路谷田幸原線初音ヶ原インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大和市教育委員会 1986『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書第21集
横須賀市教育委員会・横須賀市緑政部 2002『打木原遺跡』「(仮称)長井海の手公園」整備計画に伴う埋蔵文化財発掘調査 横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第10集

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどう18ごう（のじりばいぱす）まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	信濃町内その2　貫ノ木遺跡　照月台遺跡
巻次	2
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	62
編著者名	谷和隆
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4　TEL026-293-5926
発行年月日	2004年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
貫ノ木遺跡	長野県上水内郡信濃町大字野尻字滝沢766他	205834	47	36° 49′ 29″ （世界測地系） 36° 49′ 18″ （旧日本測地系）	138° 11′ 40″ （世界測地系） 138° 11′ 51″ （旧日本測地系）	1999年7月7日～ 1999年10月29日	2,940	国道拡幅工事に伴う事前調査
照月台遺跡	長野県上水内郡信濃町大字野尻字上の原516-7他	205834	46	36° 49′ 37″ （世界測地系） 36° 49′ 26″ （旧日本測地系）	138° 11′ 50″ （世界測地系） 138° 12′ 01″ （旧日本測地系）	1999年5月10日 ～ 1999年9月15日	4,780	国道拡幅工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
貫ノ木遺跡	集落	旧石器	石器集中地点（ブロック）20	ナイフ形石器・台形石器 斧形石器・石刃	ナイフ形石器・彫器・掻器が多数出土
	散布地	縄文	なし	隆起線文土器・表裏縄文土器 押型文土器・沈線文土器	約15,500年前の炭素年代値を持つ土器
照月台遺跡	集落	旧石器	石器集中地点（ブロック）12・土坑1・礫群3	ナイフ形石器・台形石器 斧形石器・楔形石器	ナイフ形石器・台形石器・楔形石器が多数出土 旧石器時代の土坑
	土坑群	縄文	陥し穴33・集石2	土器	なし

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書62

一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書2

信濃町内その2

貫ノ木遺跡・照月台遺跡

発行　平成16年3月19日発行
発行者　国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター
〒387-8007 長野県長野市
篠ノ井布施高田963-4
TEL026-274-3891　FAX274-3892
印刷　信毎書籍印刷株式会社